

上信越自動車道関係発掘調査報告書VI

かみなかじま
上中島遺跡

のばやし
野林遺跡

2000

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

上信越自動車道関係発掘調査報告書VI

上中島遺跡

野林遺跡

2000

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

上信越自動車道は、首都圏と上越地方を結ぶ幹線道路として、群馬県藤岡インターチェンジから分岐し、長野県を経て新潟県上越市に至る全長203キロメートルの高速自動車国道です。これによって、関越・磐越自動車道と並び、日本海側と太平洋側を結ぶ大動脈として、沿線地域の発展に多大な効果をもたらすものと期待されています。

本書は、この道路建設に先立ち、平成7年度から8年度に調査した「上中島遺跡」と「野林遺跡」の発掘調査報告書です。調査の結果、上中島遺跡では縄文時代・弥生時代の遺物が見つかりました。弥生時代の土器は、信州方面で出土する土器と同様のものです。

野林遺跡では、縄文時代の陥し穴と考えられる土坑列、時期不明の道路遺構などが発見されました。陥し穴と考えられる土坑からは、妙高山北東麓を流下する渋江川によって形成された浸食断崖を背景にした狩猟活動が偲ばれます。また、出土した縄文時代の土器は、少量ですが、北陸や関東、信州の各方面の土器が見られ、当地域が各文化の接点にあることを如述に示しています。

今回の調査成果が、歴史を解明するための資料として広く活用され、埋蔵文化財に対する理解と認識を深める契機となれば幸いです。

最後に、この調査に関して多大なご協力とご援助を賜った中郷村教育委員会、ならびに地元の方々をはじめ、日本道路公団北陸支社・同上越工事事務所に対して厚く御礼申し上げます。

平成12年3月

新潟県教育委員会

教育長 野本憲雄

例　　言

1. 本報告書は、上信越自動車道の建設に伴い、新潟県が日本道路公団から受託して実施した新潟県中頭城郡中郷村大字二本木字上中島1,708他に所在する上中島遺跡、同村大字藤沢字野林1,142-1他に所在する野林遺跡の発掘調査記録である。
2. 発掘調査は、調査主体である新潟県教育委員会（以下、県教委）が財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に調査を委託し、平成7年度・8年度に実施した。
3. 整理作業および報告書作成にかかる作業は、平成8年度・9年度に実施し、埋文事業団職員がこれにあたった。
4. 出土遺物と調査にかかる資料は、すべて県教委が保管している。遺物の註記号は上中島遺跡を「上ナカ」、野林遺跡を「ノ林」として出土地点・層位等を併記した。
5. 本書で示す方位はすべて磁北を示す。
6. 各遺跡における遺物番号は土器、石器ごとに通し番号を付した。図面図版と写真図版の番号は一致している。
7. 造構実測図および本文で用いた土層註記は、ローマ数字で遺跡内の基本層序を、アラビア数字で造構内の覆土を表している。
8. 墓塚の木炭層、磨石類の使用痕はスクリーントーンを使って表現した。そのスクリーントーンの示す内容は、図版凡例に付した。
9. 文中の註は、すべて脚註とした。また、引用文献は著者及び発行年（西暦）を文中〔 〕で示し、巻末に一括して掲載した。
10. 本書の作成は飯坂盛泰（埋文事業団文化財調査員）、島田昌幸（同文化財調査員）、佐藤　恒（同嘱託員）、瀧澤　誠（同嘱託員）、山崎忠良（同嘱託員）が担当し、編集は飯坂、島田が担当し執筆分担は、以下のとおりである。
第Ⅰ章、第Ⅱ章、第Ⅲ章1～4・6・7（飯坂）、第Ⅳ章5（佐藤）、第Ⅴ章1～3・5A・7A・7C（島田）、第Ⅵ章5B・7B・7D（山崎）、第Ⅶ章4（瀧澤）、第Ⅷ章6（山崎・飯坂）
11. 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多大なご教示・ご協力を賜った。厚くお礼申し上げる。（五十音順、敬称略）

金子直行 黒板禎二 小島正巳 高橋 勉 谷井 慶 稲跡 喬 野村忠司 細田 勝

目 次

| | |
|--------------------|----|
| 第Ⅰ章 調査に至る経緯 | 1 |
| 第Ⅱ章 遺跡の環境 | 1 |
| 1 遺跡の立地と自然環境 | 1 |
| 2 周辺の遺跡 | 2 |
| 第Ⅲ章 上中島遺跡 | 4 |
| 1 調査体制 | 4 |
| 2 調査概要と経過 | 4 |
| A 一次調査 | 4 |
| B 二次調査 | 5 |
| (1) 調査方法 | 5 |
| (2) 調査経過 | 5 |
| 3 整理作業 | 6 |
| A 方 法 | 6 |
| (1) 遺物 | 6 |
| (2) 遺構図面 | 6 |
| B 整理経過 | 6 |
| (1) 経過 | 6 |
| (2) 体 制 | 6 |
| 4 遺 跡 | 7 |
| A 概 観 | 7 |
| B グリッド設定 | 7 |
| C 層 序 | 8 |
| 5 遺 構 | 9 |
| A 炭 烟 | 9 |
| B 土坑・ピット | 9 |
| 6 遺 物 | 10 |
| A 土 器 | 10 |
| (1) 楩文土器 | 10 |
| (2) 弥生土器 | 12 |
| B 石 器 | 12 |
| 7 まとめ | 12 |
| 第Ⅳ章 野林遺跡 | 15 |
| 1 調査の体制 | 15 |
| 2 調査概要と経過 | 16 |
| A 一次調査 | 16 |
| B 二次調査 | 17 |
| (1) 調査方法 | 17 |
| (2) 調査経過 | 18 |
| 3 整理作業 | 18 |
| A 方 法 | 18 |
| B 整理経過 | 18 |
| (1) 経 過 | 18 |
| (2) 体 制 | 18 |

| | |
|------------------|----|
| 4 遺 跡 | 19 |
| A 概 観 | 19 |
| B グリッド設定 | 20 |
| C 層 序 | 20 |
| (1) 野林遺跡A地点 | 20 |
| (2) 野林遺跡C地点 | 20 |
| (3) 野林遺跡D地点 | 23 |
| 5 遺 構 | 23 |
| A 野林遺跡C地点 | 23 |
| (1) 道路遺構 | 23 |
| (2) 炭 窯 | 24 |
| (3) 土 坑 | 25 |
| (4) 集 石 | 26 |
| B 野林遺跡D地点 | 26 |
| (1) 炭 窯 | 26 |
| (2) 土 坑 | 27 |
| (3) 陥し穴状土坑 | 27 |
| (4) ピット | 30 |
| 6 遺 物 | 31 |
| A 野林遺跡A地点 | 31 |
| (1) 縄文時代の土器 | 31 |
| (2) その他の時代の土器 | 32 |
| B 野林遺跡C地点 | 32 |
| C 野林遺跡D地点 | 32 |
| D 表採遺物 | 32 |
| 7 まとめ | 33 |
| A 道路遺構について | 33 |
| B 陥し穴列について | 33 |
| (1) 形 態 | 33 |
| (2) 機 能 | 34 |
| (3) 立地・配列 | 34 |
| (4) 構築時期 | 34 |
| C 炭窯とそれに伴う土坑について | 35 |
| D 縄文時代前期末の土器について | 35 |
| 《要約》 | 38 |
| 《引用・参考文献》 | 39 |

挿図目次

| | | |
|-----|--------------|----|
| 第1図 | 周辺の遺跡分布図 | 3 |
| 第2図 | 上中島遺跡一次調査範囲図 | 5 |
| 第3図 | 上中島遺跡グリッド設定図 | 8 |
| 第4図 | 上中島遺跡土層柱状図 | 8 |
| 第5図 | 野林遺跡一次調査範囲図 | 17 |
| 第6図 | 野林遺跡グリッド設定図 | 21 |
| 第7図 | 野林遺跡A地点土層柱状図 | 21 |
| 第8図 | 野林遺跡C地点土層柱状図 | 22 |
| 第9図 | 野林遺跡D地点土層柱状図 | 22 |

表 目 次

| | | |
|-----|-----------------|----|
| 第1表 | 上中島遺跡遺構計測表 | 10 |
| 第2表 | 上中島遺跡遺物観察表 | 13 |
| 第3表 | 野林遺跡D地点陥し穴土坑観察表 | 30 |
| 第4表 | 野林遺跡遺物観察表 | 37 |

図 版

図面

| | | | |
|-----|----------------|------|-----------------|
| 図版1 | 上中島遺跡遺構全体図 | 図版10 | 野林遺跡C地点遺構実測図(1) |
| 図版2 | 上中島遺跡遺構実測図 | 図版11 | 野林遺跡C地点遺構実測図(2) |
| 図版3 | 上中島遺跡遺物実測図(1) | 図版12 | 野林遺跡C地点遺構実測図(3) |
| 図版4 | 上中島遺跡遺物実測図(2) | 図版13 | 野林遺跡D地点遺構実測図(1) |
| 図版5 | 上中島遺跡遺物実測図(3) | 図版14 | 野林遺跡D地点遺構実測図(2) |
| 図版6 | 野林遺跡C地点全体図 | 図版15 | 野林遺跡D地点遺構実測図(3) |
| 図版7 | 野林遺跡D地点全体図 | 図版16 | 野林遺跡D地点遺構実測図(4) |
| 図版8 | 野林遺跡C地点道路遺構平面図 | 図版17 | 野林遺跡D地点遺構実測図(5) |
| 図版9 | 野林遺跡C地点道路遺構断面図 | 図版18 | 野林遺跡遺物実測図 |

写真

| | |
|-------|---|
| 上中島遺跡 | |
| 図版19 | 調査前近景 調査区南西側全景 調査区北東側全景 調査区南西側土層断面 作業風景 1号炭窯完掘 1号炭窯土層断面 2号炭窯とSK2完掘状況 2号炭窯土層断面(1) |
| 図版20 | 2号炭窯土層断面(2) 2号炭窯土層断面(3) 2号炭窯土層断面(4) 2号炭窯土層断面(5) SK1完掘 SK1土層断面(1) SK1土層断面(2) 1号炭窯とSK1 SK2完掘 SK2土層断面 |
| 図版21 | SK3完掘 SK3土層断面 1号ピット完掘 1号ピット土層断面 2号ピット完掘 2号ピット土層断面 3号ピット完掘 3号ピット土層断面 甌生土器出土状況 2号炭窯とSK2, SK3 |

図版22 出土遺物（1）

図版23 出土遺物（2）

野林遺跡

図版24 A地点北側完掘 A地点西側完掘 A地点土層堆積 A地点遺物出土状況 B地点調査区完掘 B
地点土層堆積 C地点東側調査区全景（1） C地点東側調査区全景（2） C地点西側調査区全
景 C地点西側調査区全景

野林C地点

図版25 上段西側全景 下段西側全景 上段土層堆積 下段土層堆積 1号炭窯完掘 1号炭窯土層断面
2号炭窯完掘 2号炭窯木炭出土状況 3号炭窯完掘 4号炭窯完掘

図版26 5号炭窯完掘 5号炭窯土層断面 SK1土層断面 2号炭窯とSK2、SK3 SK2完掘 S
K2土層断面 SK3完掘 SK3土層断面 SK4完掘 SK4土層断面

図版27 SK5完掘 SK5土層断面 SK6完掘 SK6土層断面 SK7完掘 SK7土層断面 1・
2号集石 1・2号集石断面 道路遺構 道路遺構断面

野林D地点

図版28 調査前全景 土層堆積（1） 土層堆積（2） 土層堆積（3） 1号炭窯完掘 1号炭窯土層断
面（1） 1号炭窯土層断面（2） 1号炭窯土層断面（3） 2号炭窯完掘 2号炭窯土層断面

図版29 3号炭窯完掘 3号炭窯土層断面 SK1完掘 SK1土層断面 SK2完掘 SK2土層断面
SK3完掘 SK3土層断面 SK4完掘 SK4土層断面

図版30 SK5完掘 SK5土層断面 SK6完掘 SK6土層断面 SK7完掘 SK7土層断面 SK
8完掘 SK8土層断面 SK9完掘 SK9土層断面

図版31 SK10完掘 SK10土層断面 SK11完掘 SK11土層断面 SK12完掘 SK12土層断面 SK
13完掘 SK13土層断面 SK14完掘 SK14土層断面

図版32 SK15完掘 SK15土層断面 SK16完掘 SK16土層断面 SK17完掘 SK17土層断面 SK
18完掘 SK18土層断面 SK19完掘 SK19土層断面

図版33 陥L穴列（1） 陥L穴列（2） 5DP1完掘 5DP1土層断面 5DP2完掘 5DP2土
層断面 4EP1完掘 4EP1土層断面 調査区完掘 調査風景

図版34 野林遺跡出土遺物

第Ⅰ章 調査に至る経緯

上信越自動車道は群馬県藤岡市で関越自動車道と分岐し、長野市を経て上越市で北陸自動車道と接続する総延長203kmの高速道路である。このうち、新潟県は妙高高原町～上越市まで33.9kmが相当する。

上信越自動車道のうち妙高高原町～上越間は、昭和48年11月に基本計画が出され、上中島遺跡・野林遺跡にかかる区間（中郷村～上越市）の整備計画は平成元年1月に決定された。これを受けて県教委は、日本道路公団（以下、公団）との間で法線内の遺跡分布調査・試掘調査等に関する協議を本格化させ、平成2年4月16日～4月21日に路線が予想される区域の埋蔵文化財の分布調査を行い、周知の遺跡と新発見の遺跡28か所と地形上から調査が必要と考えられる地点25か所の存在を公団に通知した。その後、施行命令は平成2年11月に出された。

上中島遺跡は周知の遺跡で、平成元年に国道18号線上新バイパス建設に伴い発掘調査されている。しかし、平成2年の分布調査により国道西側の高速道路法線内に遺跡の範囲が拡大することが確認された。その後、一次調査は平成6年6月に実施し、縄文時代の遺構・遺物と、平安時代以降の炭窯が検出された。そのため、県教委と公団で協議をし、記録保存のための発掘調査が実施されることになった。二次調査は、平成7年4月から8月まで実施した。

野林遺跡は平成2年の分布調査で地形的に遺跡の存在する可能性がある地点ということで調査の対象となった。一次調査は、工事計画や用地買収の関係で平成6年9月を皮切りに平成7年まで5回行われ、その結果、縄文時代の遺構・遺物、平安時代以降の炭窯などが検出されたA～D地点の4地点（第6図）について二次調査を実施することとなった。二次調査は、平成7年度と8年度に実施した。

第Ⅱ章 遺跡の環境

1 遺跡の立地と自然環境

上中島遺跡・野林遺跡が所在する中郷村は、新潟県の南西部に位置し、妙高山（標高2,454m）北東側の斜面上にある。北は新井市、南は妙高村に接し、長野県境まで約20kmである。山林が総面積43.75haのうち83.8%を占める典型的な山間である。関川は、妙高山麓の東縁を北流し、その関川左岸に国道18号線やJR信越線といった交通の動脈が並行して南北に走っている。

上中島遺跡と野林遺跡は、それぞれ渋江川右岸の妙高山起源の火砕流堆積台地上に位置する。標高は、上中島遺跡が241～247mで、野林遺跡が235～258mを測る。火砕流堆積層は、渋江川火砕流堆積層を基盤にその上を矢代川岩屑流が覆っている。

2 周辺の遺跡（第1図）

上中島遺跡、野林遺跡が所在する妙高山東麓周辺と、高床山以西の関川流域丘陵部に縄文時代の遺跡が数多く分布する。弥生時代以降の遺跡は、確認例が少ない。片貝川以南では、妙高山起源の赤倉火砕流堆積物や大田切川火砕流堆積物などが堆積しているところがあり、これにより文化層の上下関係が明らかになっている遺跡も存在する。

〔縄文時代〕

草創期から早期の遺跡は、上信越自動車関連や国道18号線関連で妙高高原町関川谷内遺跡〔小池ほか1998〕、同町大堀遺跡〔立木・寺崎ほか1996〕、同町中ノ沢遺跡〔立木・寺崎ほか1997〕、中郷村八斗両原遺跡〔飯坂1997〕の調査が行われ資料が増加した。また、中郷村松ヶ峯遺跡群は、県教委および頸城南地区総合学術調査会の考古グループによる調査が行われ報告されている〔室岡ほか1966〕ほか、小島正巳氏により踏査がなされ、数地点で表採された押型土器が資料紹介されている〔小島1991〕。

前期の遺跡は、矢代川右岸に位置する新井市三本木新田B遺跡で前期中葉、同市萩清水遺跡で前期後葉の遺構、遺物が見つかっている〔立木・寺崎1997〕。古塔山西方に位置する妙高村中古遺跡は遺物包含層が赤倉火山灰層と大田切火山灰層に覆われていて、赤倉火山灰層下から早期～前期前葉の遺物が、その上位で鍋屋町式期を主体に土器が出土している〔室岡・早津1986〕。

中期の遺跡は、妙高山北東側に多く分布する。中郷村和泉A遺跡は、大田切川火砕流堆積物と赤倉火砕流堆積物との間で中期初頭の集落跡が見つかっている〔荒川1995〕。高床山南東側にある中郷村南田遺跡〔親跡1988〕でも中期初頭の土器が出土している。また、高床山南方の関川流域の台地上には、新井市大貝遺跡〔岡本男ほか1967〕、妙高村道添遺跡〔室岡1994・1995〕などの遺跡が分布する。

後期、晚期の遺跡は、中郷村龍峰遺跡で、住居跡や配石遺構が検出されている〔中郷村教委1996〕。配石遺構は、妙高村蓬生遺跡〔中川ほか1967〕、中郷村奥の城（西峰）遺跡〔岡本郁ほか1982〕、中郷村小丸山遺跡〔親跡1990〕でも確認されている。先述の和泉A遺跡は、大田切川火砕流堆積物より上位で晚期前葉の土坑群や晚期後葉の遺物が出土している〔前掲〕。他には、妙高高原町兼保遺跡D地区〔室岡1986〕、妙高村上ツ平遺跡〔親跡1992〕などが調査されている。

〔弥生時代〕

妙高山麓の当期の遺跡は、分布が稀薄である。和泉A遺跡は、前期末から中期初頭に位置づけられる土器が出土している〔前掲〕。龍峰遺跡や妙高高原町伏見遺跡でも遺物が確認されている。後期には、頸城平野西側の丘陵で新井市斐太遺跡群〔駒井・吉田1962〕などの高地性集落が現れる。



第1図 周辺の遺跡分布図

| No | 遺跡名 | 時代 | No | 遺跡名 | 時代 | No | 遺跡名 | 時代 |
|----|--------|----------------|----|--------|---------------|----|----------|----------------|
| 1 | 鳴山B | 縄文 | 29 | 圓岡 | 縄文(中) | 57 | 御所A | 古墳・後(中～後) |
| 2 | 飯田 | 縄文 | 30 | 庵ノ呂 | 縄文 | 58 | 純文 | 純文 |
| 3 | 畦地 | 縄文(後) | 31 | 江町 | 縄文(後) | 59 | 御平 | 平安 |
| 4 | 森清水 | 縄文(早・中) | 32 | 猿塚A | 縄文(後) | 60 | 小河内西 | 弥生(島)・古墳(前) |
| 5 | 三木本新田B | 縄文(前) | 33 | 上ノ原 | 縄文(後～中) | 61 | 大河原C | 弥生(島)・古墳(後)・平安 |
| 6 | 松山B | 縄文(中) | 34 | 外堀B | 縄文(後・中・後) | 62 | 扇戸 | 縄文(後～中) |
| 7 | 西坪 | 縄文(後)・弥生・奈良・平安 | 35 | 外堀A | 縄文(後) | 63 | 浦ノ里・湯ノ瀬裏 | 江戸初期 |
| 8 | 北林 | 縄文(後) | 36 | 北ノ原 | 縄文(中～後) | 64 | 小原 | 縄文(早) |
| 9 | 柏山A | 縄文(中～後) | 37 | 金山 | 縄文(中) | 65 | 大貝 | 縄文(前～後) |
| 10 | 御前 | 縄文 | 38 | 二木本西林 | 縄文(中～晚) | 66 | 延道 | 縄文(早～中) |
| 11 | 道原 | 縄文 | 39 | 鳥の城 | 縄文(中～後) | 67 | 平相 | 縄文(後) |
| 12 | 大字内の北 | 縄文(後) | 40 | 大河原 | 縄文(中) | 68 | 待 | 縄文(後) |
| 13 | 神谷石 | 縄文(中) | 41 | 寺池 | 縄文(早～前) | 69 | 長沢原 | 縄文(中～後) |
| 14 | 小丸山 | 縄文(中～後) | 42 | 池田林A | 縄文(後) | 70 | 上ノ牛 | 縄文(後～晚) |
| 15 | 丸山 | 縄文(中～後) | 43 | 池田林B | 縄文(中) | 71 | 御前 | 縄文(後～晚) |
| 16 | 前原川 | 縄文 | 44 | 水上 | 縄文(後) | 72 | 造詣 | 縄文(後～中・後) |
| 17 | 前原 | 縄文(中～後) | 45 | 元龍敷 | 縄文(後～晚) | 73 | 佐木町 | 縄文(中～後) |
| 18 | 新井新田 | 縄文(後) | 46 | 鏡引 | 縄文(後)・食生・古墳 | 74 | 高曾 | 縄文(中) |
| 19 | 大久保 | 縄文(中) | 47 | 大虎沢B | 縄文(早～前) | 75 | 深瀬ツ屋 | 縄文(後・晚) |
| 20 | 馬取 | 縄文(後) | 48 | 小原 | 縄文(中～後)・平安 | 76 | 田尻 | 縄文(後) |
| 21 | 大丈沢 | 縄文(後～晚) | 49 | 石原畠 | 縄文 | 77 | 船原 | 縄文 |
| 22 | 縣諸水 | 縄文(後) | 50 | 前田 | 縄文(中～後)・平安・中量 | 78 | 大坪 | 縄文 |
| 23 | 向原 | 縄文 | 51 | 山 | 縄文 | 79 | 蓬生 | 縄文(後～晚) |
| 24 | 野林 | 縄文(前)・後生 | 52 | 蟹林 | 縄文(早・中・後) | 80 | 深沢 | 縄文(後) |
| 25 | 中島 | 縄文(中) | 53 | 跡の山遺跡群 | 縄文(前・中) | 81 | 寺割 | 縄文(後) |
| 26 | 八千尋原 | 縄文(早・前) | 54 | 鶴ヶ島遺跡群 | 縄文(早・後) | 82 | 吉古 | 縄文(早・前) |
| 27 | 上中島 | 縄文(早～後)・弥生(中) | 55 | 潘の山遺跡群 | 縄文(早・中・後) | 83 | 面陣 | 縄文 |
| 28 | 前田水上 | 縄文(早・前) | 56 | 豊臣 | 縄文(後～前)・鶴(前) | 84 | 上野 | 縄文 |

第Ⅲ章 上中島遺跡

1 調査体制

発掘調査は下記の体制で行った。

[一次調査]

調査期間 平成6年6月6日～6月10日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 本間栄三郎）

調 査 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

管 理 藍原直木（事務局長）

渡辺耕吉（総務課長）

茂田井信彦（調査課長）

庶 務 泉田 誠（総務課主事）

指 導 藤巻正信（調査課第一係長）

調査職員 田海義正（同主任調査員）

橋谷田裕治（同主任調査員）

[二次調査]

調査期間 平成7年4月25日～8月11日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 平野清明）

調 査 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

管 理 藍原直木（事務局長）

山上利雄（総務課長）

亀井 功（調査課長）

庶 務 泉田 誠（総務課主事）

指 導 藤巻正信（調査課第一係長）

調査担当 飯坂盛泰（同文化財調査員）

調査職員 橋谷田裕治（同主任調査員）

佐藤 恒（同嘱託員）

2 調査概要と経過

A 一次調査

平成6年6月6日～6月10日の間に調査を実施した。調査方法は任意の位置に計16基のトレンチを設定し、遺構・遺物の有無を確認した（第2図）。調査対象面積は13,000m²で、確認率は5.4%（702m²）である。土層の堆積は畑の耕作により激しく攪乱を受け、保存状況は良くなかった。しかし、5基のトレンチ

から遺構や遺物が確認された。遺構は、覆土に焼山起源の火山灰が入り、帰属年代が平安時代に推定される炭窯1基と土坑・ピット3基が検出された。遺物は、縄文土器、石斧などが出土した。その結果、遺構・遺物が確認された調査対象範囲の北側、6,400m²について二次調査が必要であると判断した。

B 二次調査

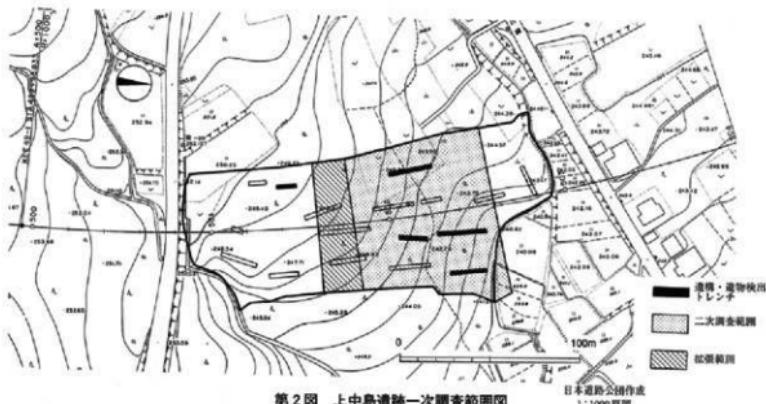
(1) 調査方法

調査方法は、表土除去、基本層序の確認、包含層発掘、遺構検出・発掘、写真・実測の行程を基本としたが、途中からは遺構・遺物の検出が稀薄だったので、5m間隔で長大なトレントを設置し遺構が検出されればトレントを中心に拡張していくという方法を採った。検出された遺構は、種別毎に通し番号を付し発掘した。遺構種別は、炭窯、径1m以上の土坑（SK）、小さな落ち込み（ピット）である。実測は縮尺1/20で図化した。出土遺物は、層位を確認しながら小グリッド単位で採取し、位置と層位を遺物に記した。記録写真は、35ミリモノクローム、35ミリカラーリバーサルを基本とした。

(2) 調査経過

上中島遺跡の二次調査は、平成7年4月25日から8月11日まで行った。4月上旬から調査区に残る雪と伐木を重機で除去し、現場事務所の設置、器材準備などを開始した。4月25日、調査員が現地に入り、器材搬入、表土除去作業を行った。この時、調査区南側で遺物が表採されたので調査範囲を南へ約20m広げ、その結果、調査面積は1,400m²が加わり、7,800m²となった（第2図）。5月8日、作業員説明を行い翌日からベルトコンベアを設置し調査区北東側から包含層発掘を行った。5月17日、基準杭を設置する。5月19日、1号炭窯とその関連土坑が検出された。6月12日～7月6日、八斗森原遺跡ボックス工事部分の二次調査を急遽行うことになり、この間、上中島遺跡は、炭窯の調査以外は、休止状態となった。

7月5日から、縄文時代の遺構・遺物が稀薄の為、トレントによる調査に切り替えた。7月11日の集中豪雨で、トレント内・遺構に土砂・雨水が流れ込み13日はその除去に追われた。7月19日、7D区周辺で弥生時代中期の遺物が出土したが分布範囲は狭く遺構は検出されなかった。7月下旬、比較的縄文時代中



第2図 上中島遺跡一次調査範囲図

期の遺物が多く出土する12E区を中心に面的な調査を行ったが、平安時代以降の炭窯とそれに関連する土坑しか検出されなかった。8月10日までに実測・測量、写真撮影など現場の作業が終了した。8月11日、器材を撤収し、発掘調査を終了した。

3 整理作業

A 方 法

(1) 遺 物

出土遺物は、縄文土器・石器、弥生土器などで、浅箱にして約4箱である。基礎作業としてすべての遺物を水洗いし、註記を施した。註記は、白色ポスターカラーなどを使い、遺跡名・出土位置・層位を明記した。土器の接合は、復元可能なものだけを行った。報告書掲載資料を選び、実測・拓影を実施した。石器は出土量が少ないので最初に器種毎に分類し、それぞれ報告書掲載資料を選び実測図を作成した。

(2) 遺構図面

遺構図面は、遺構毎の平面図・断面図の確認を行った。整理段階で遺構でないと判断したものは消去した。遺構トレースは、炭窯・土坑・ピットを縮尺1/20で行った。

B 整理経過

(1) 経 過

出土遺物の洗浄・註記は、発掘現場で実施した。また、図面・写真の整理や遺構台帳などの作成は、発掘作業と並行して進めた。

本格的な整理作業は、平成8年と平成9年度の冬期間である。

(2) 体 制

平成8年度

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 平野清明）

整 理 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

管 理 藍原直木（事務局長）

山上利雄（総務課長）

龜井 功（調査課長）

庶 務 泉田 誠（総務課主事）

指 導 藤巻正信（調査課第一係長）

整理担当 飯坂盛泰（同文化財調査員）

整理職員 佐藤 恒（同嘱託員）

平成9年度

管 理 須田益輝（事務局長）
 若槻勝則（総務課長）
 亀井 功（調査課長）
 庶 務 泉田 誠（総務課主事）
 指 導 藤巻正信（調査課調査第一係長）
 整理担当 飯坂盛泰（同 文化財調査員）

平成10年度・平成11年度

管 理 須田益輝（事務局長）
 若槻勝則（総務課長）
 本間信昭（調査課長）
 庶 務 椎谷久雄（総務課主任）
 指 導 寺崎裕助（調査課調査第一係長）
 整理担当 飯坂盛泰（同 文化財調査員）

4 遺跡

A 概観

上中島遺跡は、今回の調査区から東側約50m離れた地点が一般国道18号上新バイパス建設に係り、平成元年に県教委により発掘調査がなされている。この時の調査では、縄文時代晩期を中心に早期から晩期まで遺物が出土し、晩期の堅穴住居、土坑、土器捨て場なども見つかっている〔立木1999〕。

調査区の地形は、調査区の南西から北東に向かって標高が下がり、比高差は約6mである。調査区内は、西側の一部が畑であった以外は林であった。遺跡周辺は、調査区の西側が畑あるいは林で、東側は水田・住宅地である。

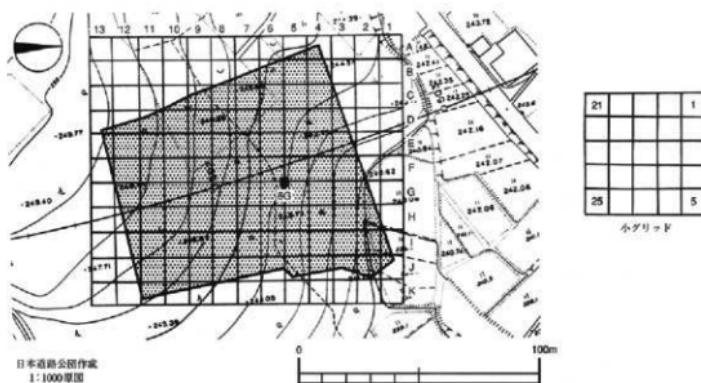
今回の発掘調査では、遺物の出土量は少ないが、縄文時代と弥生時代の土器が出土した。縄文土器は、中期前葉を主体に早期から晩期までのもので、弥生時代は中期後葉のものが多く出土した。検出した遺構は、出土土器に相当する時期の明らかな遺構ではなく、覆土に含まれる火山灰から平安時代以降と時期が想定される炭灰2基とそれに関連する土坑3基、時期・性格不明のピット3基である。

B グリッド設定（第3図）

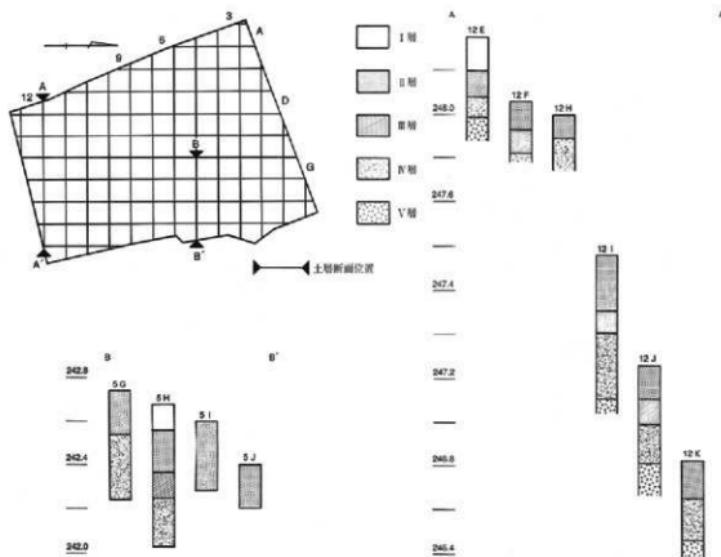
グリッドは、上新バイパス調査時のグリッドを今回の調査区に延長して設定した（第3図）。グリッドの主軸は磁北方向で、真北は東に約7度である。大グリッドは10m方眼で、呼称は、西から東へアルファベットのAからKで、北から南へ算用数字の1から13とし、両者の組み合わせで「1 A」・「2 B」のように呼称した。大グリッド内における小グリッドは2m方眼で、1~25の番号を付した。前述の大グリッドと組み合わせると「1 A-1」、「2 B-25」となり、遺構と遺物の位置の表記はこの方法で処理した。国家座標値は、6 G 東でX=+108100.000、Y=-24550.000である。

C 層序 (第4図)

上中島遺跡は、妙高山がある南西側から北東に向かって標高が下がる傾斜地に位置する。そのため、土層堆積の層厚は、調査区南側で浅く、北側で厚くなっている。基本層序は、現表土からI～V層に大別し



第3図 上中島遺跡グリッド設定図



第4図 上中島遺跡土層柱状図

た。I層は、暗褐色土で現表土である。層厚は、15~30cm程度である。II層は、黒褐色土で、層厚は10~20cm程度である。III層は、褐色土で、層厚は10cm程度である。この層は、場所によっては確認できないことがあった。IV層は、暗褐色土で礫片が混じる。層厚は、20~30cm程度である。V層は、黄褐色土で拳大以上の礫が多く含まれる。調査区は、後世の擾乱を受けている箇所が多く土層堆積は一定しないが、縄文時代の遺物は、早期から晩期まで層位差を持たずI層からIII層の範囲で出土した。弥生時代の遺物は、出土地点が調査区西端の畑であったため、土層は判然としなかった。また、炭窯とその関連土坑は、II層上面で形状が確認できた。

5 遺構

検出された遺構は、炭窯2基、炭窯に関わる土坑が3基、他に散在するピットが3基である。1号炭窯は、調査区北端に土坑(SK1)を伴い、2号炭窯は、調査区南端に2基の土坑(SK2、SK3)を伴って、II層上面で検出された。炭窯の脇で検出された土坑は、製炭に際して掘られたものと思われる。これらの炭窯と土坑の年代は、覆土上部に約1,000年前に噴火した焼山起源のものと思われる灰白色の火山灰層[早津1994]が堆積していることから平安時代の所産と考えられるが、当該期の遺物は出土していない。3基のピットは、出土遺物はなく、所属時期・性格不明である。

A 炭窯(図版2)

1号炭窯(図版2) 4G-13区に位置し、II層上面で検出された。平面形状は、ほぼ隅円長方形である。規模は長径396cm、短径233cm、深さ42cmで、長軸方向は、N-19°-Eである。底面は平坦で、長径363cm、短径206cmである。覆土は、5層に分けられ、1層は焼山起源の火山灰層で、4層は焼土層である。底面には、炭を焼く時の部材と考えられる丸太材が炭化しつつも残存していた。

2号炭窯(図版2) 12F-24区に位置し、II層上面で検出された。平面形状は、隅円長方形で、規模は長径612cm、短径274cm、深さ48cmで、長軸方向はN-6°-Wである。底面は長径500cm、短径210cmを測る。覆土は13層に分けられ、1層は、焼山起源の火山灰層である。5、7、11層は、木炭層で間層を挟み交互に堆積し、窯廐絶後の埋め方の様子が窺える。

B 土坑・ピット(図版2)

SK1(図版2) 4G-16区に位置し、1号炭窯から50cm離れたところで検出された。平面形状は、東西に長い梢円形を呈する。規模は長径293cm、短径268cm、深さ18cmを測り、長軸方向はN-61°-Eである。壁面は、緩やかに立ち上がる。覆土は3層に分けられ、1層は焼山起源の火山灰層である。出土遺物はなかった。

SK2(図版2) 13F-14区に位置する。2号窯の南1mに近接し、規模は、長径209cm、短径198cm、深さ21cmを測る。長軸方向は、N-25°-Wである。壁面は、平坦な底面に緩やかに傾斜する。出土遺物はなかった。

SK3(図版2) 12F-22区に位置する。2号窯の西側1.5m離れた所でほぼ並列して検出された。規模は、長径368cm、短径220cm、深さ32cmを測る。底面は平坦で、壁面は緩やかに立ち上がる。覆土は3層に分けられ、1層は焼山起源の火山灰層である。出土遺物はなかった。

1号ピット(図版2) 5I-22区に位置する。平面形状は、橢円形を呈し、規模は長径80cm、短径56cm、深さ41cmである。出土遺物はなかった。

2号ピット(図版2) 5H-19区に位置し、II層上面で検出された。平面形状は不整円形で、規模は長径73cm、短径68cm、深さ14cmである。底面は平坦で、壁面は緩やかに立ち上がる。覆土は、3層に分けられるが、いづれもしまりを欠く。出土遺物はなかった。

3号ピット(図版2) 4H-8区に位置し、II層で検出された。平面形状は不整円形で、規模は長径77cm、短径67cm、深さ22cmである。壁面は、南側が急傾斜で、南側は緩やかに底面に落ち込む。出土遺物はなかった。

第1表 上中島遺跡遺構計測表

| 遺構名 | 位置 | 上端 | | 下端 | | 深さ(cm) | 長軸方向 |
|-------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|---------|
| | | 長径(cm) | 短径(cm) | 長径(cm) | 短径(cm) | | |
| 1号炭窯 | 4G-13 | 396 | 233 | 363 | 206 | 42 | N-19°-E |
| 2号炭窯 | 12F-24 | 612 | 274 | 500 | 200 | 48 | N-6°-W |
| SK1 | 4G-16 | 293 | 268 | 247 | 193 | 18 | N-61°-E |
| SK2 | 13F-14 | 209 | 198 | 165 | 153 | 21 | N-25°-W |
| SK3 | 12F-22 | 368 | 220 | 297 | 128 | 32 | N-2°-W |
| 1号ピット | 5I-22 | 80 | 56 | 25 | 9 | 41 | N-57°-E |
| 2号ピット | 5H-19 | 73 | 68 | 48 | 34 | 14 | N-66°-E |
| 3号ピット | 4H-8 | 77 | 67 | 17 | 16 | 22 | N-10°-W |

6 遺 物

当遺跡から出土した遺物は、繩文土器120点、弥生土器19点、石器47点で出土量は多くなかった。繩文土器は、早期中葉から晩期までの時期があり、その中に中期前葉が主体である。中期前葉の土器は調査区南西側の12E区周辺で多く出土し、時期は北陸の新崎式併行にある。弥生土器は、長野県の北信地域に分布の中心がある中期後葉の栗林式土器が出土している。弥生時代中期後半の土器は調査区西端の7C区周辺で比較的まとまって出土しているが、遺構出土のものはなかった。

A 土 器

(1) 繩文土器(図版3・4)

早期の土器(図版3-1~5) 当期の土器は、5点で出土量は少ない。1は、橢円形の押型文が施文されている。2は、橢円形の押型文が2方向に施文されている。胎土は、石英の混入が目立つ。3は、外側の磨滅が激しいが橢円形の押型文が施文されている。4は、山形の押型文が施文されている。器厚は薄く、色調は他の土器と異なり白い。5は、山形の押型文で、器面に繊維痕が見られる。

前期の土器(図版3-6~10) 当期の土器も出土量は少ない。6と7は、羽状繩文が施文されている。6は、器面に繊維痕が目立つ。8~10は、前期後葉の諸磧b式期の土器である。8と9は同一個体で、地文のRL繩文に矢羽状の刻みが施された浮線文を有する。10は浮線上に爪形が施され、胎土は石英の混入が目立つ。

中期の土器(図版3・4-11~46) 当期の土器は前葉のものが主体で、その他に後葉の土器が少量出

土している（44～46）。11は、半截竹管による横位半隆起線文で区画する。口縁部は橋状把手が付き、斜格子文と半隆起線文で文様が描かれる。頸部は無文帶で、胴部は口縁部と同様の斜格子目文が施される。胎土は、白色粒子が多く含まれる。12は、沈線で描いた斜格子目文に隆帯が付く。文様の区画は、半隆起線文である。胎土は、雲母が多く含まれる。13は、半隆起線文の中を、斜格子文が施されている。胎土は、雲母が多く含まれている。12と13は同一個体である。14～22は、同一の個体で、色調は赤色で、胎土に白色粒子が多く混入している。14は、爪形が施された横位半隆起線文と地文の繩文が施されている。繩文地上には、棒状工具で縦と横に沈線が加えられている。15は、口唇部に突起が付く。文様は、爪形が施された横位半隆起線文が施されている。16は、爪形が施された横位半隆起線文と垂下する半隆起線文が施されている。17は頸部で、爪形が施された横位半隆起線文がめぐる。18～20は、垂下する縦位半隆起線文で文様が描かれ、地文の繩文が施されている。21は、繩文だけ施されている。23は、横位半隆起線文がめぐり、繩文地に沈線が垂下する。胎土は、白色粒子が目立つ。24は、口縁部に隆帯が付く。全面に繩文が施され、横位に半隆起線文がめぐる。胎土は、白色粒子を含む。25は、横位半隆起線文を施し、地文として繩文が施されている。胎土は、石英が目立つ。26は、縦位隆帯に刻み目を施し、全面に地文の繩文が施されている。胎土は、白色粒子が含まれる。27は、横位に爪形を施した隆帯がめぐり、地文の繩文が施されている。28は、隆帯に爪形文を施す。口唇に刻み目がある。29は、細線文に三角形の抉りを施している。色調は灰色で、白色粒子を含む。30は、半隆起線文で文様が区画されている。文様構成は、上から無文帶→細線文で、胴部は半隆起線文の空白を格子目文で埋める。色調は白色で、胎土は粒子が粗い。31は、横位半隆起線文間に縦位半隆起線文を施す。32は、繩文施文上を縦位に半隆起線文を施す。胎土に雲母が目立つ。33は、半隆起線文の空白部分に格子目文を施している。胎土は、白色粒子が多く入る。34は、半隆起線文の間を格子目文で埋めている。胎土は、石英、白色粒子を多く含んでいる。35は、半隆起線文が施されている。色調は白色である。36は、半隆起線文が施され、胎土に石英を含む。37は、縦位半隆起線文を施す。色調は白色で、胎土に白色粒子を含む。38は、撲糸文を施している。胎土は、白色粒子が多く入る。39は、繩文上に横位半隆起線文を施し、口縁と胴部に刻み目を施した突起がつく。胎土は、白色粒子の混入が目立つ。40は、沈線で文様が施されている。胎土は、雲母が目立つ。41は、1条横位に沈線文が施され、上部を刺突文で、下部を縦位の沈線文で施している。胎土は、雲母が目立つ。42は、口縁部から口唇部に縦位に隆帯が付く。文様は、沈線で正位格子文を乱雜に描く。胎土は、白色粒子が目立つ。43は、半截竹管で綾衫状の文様を施している。胎土は、白色粒子が目立つ。44は、口縁の上部が無文帶で、刻み目を施した隆帯がめぐる。胎土は、砂粒が多く白色粒子の混入も目立つ。45と46は同一個体で、粗製の土器である。文様は、櫛齒状工具で縦位に波状や直線上に施している。胎土は、白色粒子が多く入っている。

後期の土器（図版4-47～50） 後期後葉に相当するものと思われるが、出土量は少ない。47は、刻み目が施された瘤状の突起がつき、横位に沈線文が施されている。48は、壺または注口土器と思われる。文様は沈線文で描かれている。49は、2条の沈線で文様が施されている。50は、全面に繩文が施されている粗製の深鉢の底部である。

晩期の土器（図版4-51～56） 51は晩期前葉の浅鉢で、口縁にL R繩文と刺突を施した横位平行沈線文が施されている。52は、口縁の内面側が厚く、器面は磨かれ滑らかである。文様は凹線で描かれている。53は口縁に列点を施した隆帯がめぐる。54は比重が軽い土器で、横位に沈線が施されている。55は、口縁の外側が肥厚し、器面は無文である。56は、器面が平滑で無文である。

(2) 弥生土器(図版4-57~70)

弥生土器は、中期後葉の時期のものが主体である。器種は壺形、菱形の土器が出土しているが、壺形土器の出土量は少ない。壺は、赤彩されているものもあるが、細片のため図示しなかった。

57は、壺形土器の破片と思われる。文様は、縄文地上に小波状の沈線を施文している。58~70は菱形土器である。58~61は、器面に櫛歯状工具で簾状文や羽状文を描いている。また、58は口唇に縄文が、60には刻み目が施されている。器形は、2種類見られる。58と59は口縁が外反し、胴部が丸みを帯びるもので、60は胴部の最大径が中位以下にある。62は、甕の口縁で口唇に刻み目が施されている。63は、口唇に縄文を施文し、小波状にしている。器面は、櫛歯状工具で横位と斜位に条線を施している。65と66は、同個体で数条小波状に施文している。胎土は、細砂が多く入っている。67は波状線が、68は波状沈線文が施されている。69は、器面をハケ目調整している。70は、甕の底部片である。

B 石 器(図版5)

石器は47点の出土で、量は少ない。特色として、器種では磨製石斧、磨石頭が多く、石材では安山岩、黒曜石の比率が高い。また、磨製石斧の石材(2~4)は太形の5を除けば蛇紋岩である。以下にそれぞれの概略を記す。1はチャート製の凹基無茎鐵で片脚が欠損している。2~5は磨製石斧で、刃部形態は2・3が両刃で、5が片刃である。6~8は磨石頭で、6は磨痕が、7・8は凹痕が見られる。9は不定形石器で、不連続の二次加工が側縁になされている。10は石皿で、磨面の一部が赤褐色に変色している。

7 まとめ

この調査で、縄文時代早期から中期、晩期と弥生時代中期後半の遺物、平安時代の所産と考えられる炭窯とこれに関連する土坑が検出された。

縄文時代は、明確な遺構がなく、遺物も多期に及ぶが各時期とも出土量は少なかった。そのような中で、最も主体となる時期が中期後葉で、在地系、北陸系の土器などが認められた。早・前期の遺物は最も少ないが、北側に道路を挟んで早・前期が主体の八斗ヶ原遺跡がある。

弥生時代中期後半の遺物は、長野の栗林式といわれる一群と思われる。個体数は少ないが、甕は残りがよく良好な資料であるが、当該期の遺構は検出されなかった。

炭窯は、妙高山麓周辺の遺跡でよく見つかる両端が突出した長方形を呈する形態のものである。時期は、覆土に焼山起源と考えられる火山灰が流れ込んでいることから平安時代以降の所産と考えられる。

第2表 上中島遺跡遺物觀察表

縄文土器

| 図 No | 出土位置・層位 | 時期 | 形態 | 色調 内/外 | 胎土 | 焼成 | 地文 | 文様 | 法量 (cm) | 備考 |
|------|-------------|------|---------------|---------------|--------|----|--------------|------------------|---------|----------|
| 1 | 12F - 3 II | 早期中葉 | 刷毛 | にぶい赤褐色/黒褐色 | 石英 | 良 | 縦内彌押壓文 | | | |
| 2 | 6I - 21 II | 早期中葉 | 刷毛 | にぶい赤褐色/灰褐色 | 石英・砂多 | 良 | 縦内彌押壓文 | | | |
| 3 | 12F - 13 II | 早期中葉 | 刷毛 | にぶい褐色/黒色 | 砂 | 良 | 縦内彌押壓文 | | | |
| 4 | 4I - 9 II | 早期中葉 | 刷毛 | にぶい黄褐色/灰黃褐色 | 白粘・石英 | 良 | 山形押壓文 | | | |
| 5 | 4E - 4 II | 早期中葉 | 刷毛 | にぶい褐色/にぶい褐色 | 鐵鏽痕 | 良 | 山形押壓文 | | | |
| 6 | 7C - 18 | 前期 | 刷毛 | にぶい黃褐色/にぶい褐色 | 鐵鏽痕 | 良 | 羽狀壓文 | | | |
| 7 | 4I - 9 II | 前期 | 刷毛 | にぶい褐色/にぶい褐色 | 鐵鏽痕 | 良 | 羽狀壓文 | | | |
| 8 | 表揮 | 前段後半 | 灰黃褐色 | にぶい黃褐色 | 細砂 | 良 | LR | 矢羽羽の浮雕文 | | No8と同個体 |
| 9 | 2D - 20 I | 前期後半 | 刷毛 | 鐵鏽色/灰黃褐色 | 石英・細砂 | 良 | LR | 矢羽羽の浮雕文 | | No8と同個体 |
| 10 | 11J - 1 II | 前期後半 | 刷毛 | にぶい赤褐色/灰褐色 | 石英 | 良 | LR | 船形浮雕文 | | |
| 11 | 2J - 21 | 中期前葉 | 口縁 | にぶい黃褐色/にぶい黃褐色 | 白粘・石英 | 普通 | 半斜起繪文 | 舟形子目文 織帯把手 | 口径 33.0 | |
| 12 | 12E - 25 II | 中期前葉 | 刷毛 | にぶい褐色/にぶい褐色 | 石英 | 良 | 斜子目文 | 織帯 | | No12と同個体 |
| 13 | 13D - 5 II | 中期前葉 | 刷毛 | にぶい褐色/褐色 | 雲母 | 良 | 斜子目文 | | | No13と同個体 |
| 14 | 12E - 24 II | 中期前葉 | 口縁 | 黒褐色/にぶい褐色 | 白粘・砂多 | 良 | LR | 半斜起繪文上に爪形文 沈織文 | 口径 13.5 | |
| 15 | 12E - 16 | 中期前葉 | 口縁 | にぶい赤褐色/赤褐色 | 白粘・砂多 | 良 | LR | 小尖起 半斜起繪文上に爪形文 | | |
| 16 | 12E - 18 | 中期前葉 | 刷毛 | 赤褐色/暗褐色 | 砂多 | 良 | LR | 半斜起繪文上に爪形文 半斜起繪文 | | |
| 17 | 12E - 19 | 中期前葉 | 刷毛 | 暗褐色/にぶい褐色 | 白粘・砂多 | 良 | 半斜起繪文上に爪形文 | | | |
| 18 | 12E - 19 | 中期前葉 | 刷毛 | 褐褐色/にぶい褐色 | 砂多 | 良 | LR | 半斜起繪文 | | |
| 19 | 12E - 19 II | 中期前葉 | 刷毛 | にぶい黃褐色/にぶい黃褐色 | 砂多 | 良 | LR | 半斜起繪文 | | |
| 20 | 12E - 19 II | 中期前葉 | 刷毛 | にぶい赤褐色/にぶい黃褐色 | 白粘多 | 良 | LR | 半斜起繪文 | | |
| 21 | 12E - 24 II | 中期前葉 | 刷毛 | にぶい赤褐色/暗赤褐色 | 砂多 | 良 | LR | | | |
| 22 | 12E - 4 II | 中期前葉 | 底 | 赤褐色/にぶい黃褐色 | 砂多 | 良 | | | 直径 144 | |
| 23 | 12E - 16 II | 中期前葉 | 刷毛 | 褐色/にぶい黃褐色 | 白粘・雲母 | 良 | LR | 半斜起繪文 沈織文 | | |
| 24 | 12D - 19 II | 中期前葉 | 口縁 | 褐色/にぶい褐色 | 白粘 | 良 | LR | 横紋子縫起繪文 1次の窪起 | 口径 32.4 | |
| 25 | 4H - 6 II | 中期前葉 | 刷毛 | にぶい黃褐色/にぶい黃褐色 | 石英 | 良 | LR | 横紋子縫起繪文 | | |
| 26 | 13D - 5 II | 中期前葉 | 刷毛 | 鐵褐色/灰褐色 | 白粘 | 良 | LR | 削目縫帶 | | |
| 27 | 10D - 21 II | 中期前葉 | 刷毛 | にぶい褐色/褐色 | 白粘 | 良 | LR | 削目縫帶 | | |
| 28 | 13D - 5 II | 中期前葉 | 口縁 | にぶい黃褐色/にぶい黃褐色 | 白粘 | 良 | LR | 縫帶上に爪形文 | | |
| 29 | 3I - 24 II | 中期前葉 | 口縁 | 鉛灰褐色/灰褐色 | 白粘多 | 普通 | 織紋文 | 縫帶子縫起繪文 | | |
| 30 | 4I - 2 II | 中期前葉 | 刷毛 | にぶい赤褐色/にぶい褐色 | 砂レキ | 普通 | LR | 半斜起繪文 舟子目文 半斜起繪文 | | |
| 31 | 6J - 12 II | 中期前葉 | 口縁 | にぶい褐色/にぶい褐色 | 砂多 | 普通 | | | | 外側コゲ付着 |
| 32 | 12E - 20 II | 中期前葉 | 刷毛 | にぶい褐色/にぶい褐色 | 石英・雲母 | 普通 | LR | 半斜起繪文 | | |
| 33 | 12E - 5 II | 中期前葉 | 刷毛 | 鐵褐色/にぶい黃褐色 | 石英 | 普通 | 半斜起繪文 | 舟子目文 | | |
| 34 | 12F - 3 II | 中期前葉 | 刷毛 | 灰黃褐色/黑褐色 | 石英・白粘 | 普通 | 半斜起繪文 | 舟子目文 | | |
| 35 | 12E - 19 II | 中期前葉 | 刷毛 | にぶい黃褐色/淡黃褐色 | 石英・砂多 | 良 | 半斜起繪文 | | | |
| 36 | 12E - 5 II | 中期前葉 | 刷毛 | にぶい黃褐色/にぶい黃褐色 | 石英 | 普通 | 半斜起繪文 | | | |
| 37 | 10E - 6 II | 中期前葉 | 底 | 鐵褐色/淡黃褐色 | 白粘・石英 | 良 | 縫帶子縫起繪文 | | 底径 8.5 | |
| 38 | 12D - 9 II | 中期前葉 | 底 | 灰黃褐色/にぶい褐色 | 白粘・石英 | 普通 | 抛光 | | 直径 10.4 | 内面コゲ付着 |
| 39 | 12E - 9 II | 中期前葉 | 口縁 | にぶい褐色/にぶい褐色 | 白粘 | 良 | LR | 縫帶の先端 傷位半斜起繪文 | 口径 21.5 | |
| 40 | 12D - 20 II | 中期前葉 | 刷毛 | にぶい褐色/黑色 | 砂レキ・石英 | 普通 | 沈織文 刺突文 | | | 直徑々々台系 |
| 41 | 12E - 9 II | 中期前葉 | 口縁 | 褐色/にぶい黃褐色 | 砂レキ・石英 | 普通 | 口縫上端にのみ日 | 縫帶沈織文 | | |
| 42 | 12E - 23 | 中期前葉 | 口縁 | 褐色/にぶい褐色 | 白粘・砂多 | 普通 | 縫子目文に絞り抜文 | | | 外側コゲ付着 |
| 43 | 一次 11T | 中期前葉 | 刷毛 | にぶい赤褐色/にぶい褐色 | 赤粘 | 良 | 半斜起繪文による縫帶抜文 | | | |
| 44 | 5G - 19 II | 中期後葉 | 口縁 | 灰黃褐色/淡黃褐色 | 砂多 | 普通 | LR | 縫目縫帶 | | |
| 45 | 12E - 18 II | 中期後葉 | 口縁 | 灰褐色/にぶい褐色 | 白粘 | 良 | 縫帶子縫帶文 | | | No46と同個体 |
| 46 | 表揮 | 中期後葉 | 刷毛 | にぶい褐色/にぶい褐色 | 白粘・砂多 | 良 | 縫帶状或状文・直縫文 | | | No45と同個体 |
| 47 | 12E - 4 II | 後期後葉 | 刷毛 | にぶい褐色/赤褐色 | 砂多 | 良 | 沈織文・突起 | | | |
| 48 | 3H - 5 II | 後期後葉 | 刷毛 | 黑色/褐褐色 | 白粘 | 普通 | LR | 沈織文 | | |
| 49 | 武揮 | 後期後葉 | 口縁 | 灰褐色/灰黃褐色 | 石英 | 普通 | 沈織文 | | | |
| 50 | 12E - 20 II | 後期 | 底 | にぶい黃褐色/鐵褐色 | 細砂 | 良 | HL | | 底径 8.5 | 内面コゲ付着 |
| 51 | 2I - 23 I | 晚期前葉 | 口縁 | にぶい黃褐色/黒褐色 | 白粘 | 良 | LR | 平行沈織 刺突文 | 口径 23.4 | |
| 52 | 表揮 | 晚期 | 口縁 | 黒褐色/暗赤褐色 | 白粘 | 良 | 沈織文 | | | |
| 53 | 3I - 7尾根 | 晚期 | 口縁 | 暗赤褐色/黑色 | 細砂 | 普通 | 織帶 | | | 内面コゲ付着 |
| 54 | 7D - 21 II | 晚期 | 刷毛 | 灰褐色/黑褐色 | 白粘・石英 | 良 | 沈織文 | | | 内面コゲ付着 |
| 55 | 4I - 1 II | 口縁 | にぶい褐色/明赤褐色 | 石英 | 良 | 無文 | | | 口径 10.0 | |
| 56 | 4H - 16 II | 口縁 | にぶい黃褐色/にぶい黃褐色 | 石英 | 良 | 無文 | | | 口径 14.0 | |

弥生土器

| 図 No | 出土位置・層段 | 時期 | 保存状況 | 色調 内/外 | 胎 土 | 施 収 | 地 文 | 文 样 | 径深 (cm) | 備 考 |
|------|------------|------|------|-------------|-------|-----|-----------|------------------------------------|------------|--------|
| 57 | 7D - 21 II | 中期後期 | 崩 | 黒褐色/にぶい黄褐色 | 粗砂 | 普通 | RL, 開文 | 櫛目波状文 | | 外側コケ付着 |
| 58 | 7D - 21 II | 中期後期 | 口縁 | にぶい褐色/黒褐色 | 白粘・粗砂 | 良 | 口唇部 LR 開文 | 頭部押捺壓状文・銅部破れ模様羽状文 内面ノケ調點状微ヘリミガキ | 口径 138 | |
| 59 | 7C - 25 II | 中期後期 | 口縁 | 褐色/銀色 | 石英 | 良 | | 櫛目波状文・羽状文 | 口径 130 | |
| 60 | 7C - 25 II | 中期後期 | 口縁 | 灰黃褐色/黒褐色 | 粗砂 | 良 | 口唇部 | 頭部模様紋文・内面ノケ | 口径 146 | 外側コケ付着 |
| 61 | 7D - 21 II | 中期後期 | 口縁 | にぶい褐色/にぶい銀色 | 石英 | | | 櫛目波状文・羽状文 | | 外側コケ付着 |
| 62 | 4I - 4 | 中期後期 | 口縁 | にぶい銀色/にぶい銀色 | 粗砂 | 普通 | 口唇部 | 羽状文 | | |
| 63 | 4H - 20 | 中期後期 | 口縁 | にぶい褐色/黒褐色 | 粗砂 | 良 | 口唇部 RL 開文 | 施捺壓状文 机により小枝状・銅部破れ・ 評定物強化 | | |
| 64 | 4I - 3 II | | 崩 | にぶい銀色/にぶい銀色 | | 良 | | 櫛目波状文 | | 外側コケ付着 |
| 65 | 7C - 25 II | | 崩 | 黒褐色/にぶい銀色 | 粗砂多 | 普通 | | 櫛目波状文 | | 外側コケ付着 |
| 66 | 7C - 25 II | | 崩 | 褐色/黒褐色 | 粗砂多 | 普通 | | 櫛目波状文 | No.65 と同様作 | |
| 67 | 2I - 17 | | 崩 | 黒色/にぶい赤褐色 | 粗砂多 | 良 | | 櫛目波状文 | | |
| 68 | 7D - 21 II | | 崩 | 褐灰色/銀色 | 粗砂多 | 普通 | | 波状沈線 | | 外側コケ付着 |
| 69 | 2I - 24 | | 崩 | 黒褐色/にぶい銀色 | 石英 | 良 | | | | |
| 73 | 2I - 24 | | 崩 | 灰黃褐色/にぶい銀色 | 白粘・石英 | 普通 | | | 直徑 60 | |

石 器

| 図 No | 器種 | 出土位置 | 長さ (cm) | 幅 (cm) | 厚さ (cm) | 重量 (g) | 石 材 | 状 態 | 素 材 | 備 考 |
|------|-------|------------|---------|--------|---------|--------|-------|------|--------|----------------|
| 1 | 石錐 | 4I - 10 II | 2.1 | 1.4 | 0.3 | チャート | 片脚欠 | 横長 | 四面削茎 | |
| 2 | 磨製石斧 | 9H | 9.2 | 4.1 | 1.3 | 87 | 蛇 紋 岩 | 完 | 両刃 円刃 | |
| 3 | 磨製石斧 | 7H - 2 風掛本 | (8.6) | 5.8 | 2.4 | 192 | 蛇 紋 岩 | 基部欠損 | 両刃 側円刃 | |
| 4 | 磨製石斧 | 7H - 2 風掛本 | (9.9) | 5.2 | 2.1 | 202 | 蛇 紋 岩 | 刀部欠損 | | |
| 5 | 磨製石斧 | 地点不明 | 15.7 | 5.3 | 3.8 | 478 | 粘 紋 岩 | 完 | 両刃 側円刃 | |
| 6 | 磨石類 | 表株 | 10.5 | 8.9 | 5.6 | 735 | 安 山 岩 | 完 | 磨痕 | |
| 7 | 磨石類 | 表株 | 9.9 | 8.6 | 3.6 | 432 | 砂 岩 | 完 | 凹痕 | |
| 8 | 磨石類 | 10H | 9.5 | 5.2 | 4.4 | 354 | 凝灰角砾岩 | 完 | | |
| 9 | 石皿 | 4J - 21 | 20.1 | 16.5 | 4.9 | | 砂 岩 | 完 | | 両面磨痕 赤褐色の付着物あり |
| 10 | 不定形石器 | 4H - 16 | 6.9 | 6.7 | 2.4 | | 安 山 岩 | | 直徑 | |

第Ⅳ章 野林遺跡

1 調査の体制

発掘調査は下記の体制で行った。

[一次調査]

調査期間 平成6年9月2日～9月7日（B地点）・10月31日～11月18日（C・D地点）

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 本間栄三郎）

調 査 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

管 理 藍原直木（事務局長）

渡辺耕吉（総務課長）

茂田井信彦（調査課長）

庶 務 泉田 誠（総務課主事）

指 導 藤巻正信（調査課第一係長）

調査担当 田海義正（同主任調査員）

調査職員 橋谷田裕治（同主任調査員）

調査期間 平成7年6月29日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 平野清明）

調 査 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

管 理 藍原直木（事務局長）

山上利雄（総務課長）

龜井 功（調査課長）

庶 務 泉田 誠（総務課主事）

指 導 藤巻正信（調査課第一係長）

調査担当 田海義正（同主任調査員）

調査期間 平成7年8月22日～8月25日（C地点）・9月11日～9月14日（A地点）

調査担当 田海 義正（調査課第一係主任調査員）

調査職員 三ツ井朋子（同文化財調査員）

[二次調査]

調査期間 平成7年8月28日～9月8日・10月2日～11月22日

調査担当 武田孝昭（調査課第一係文化財調査員）

調査職員 星 奈津子（同文化財調査員）

山田 昇（同嘱託員）

調査期間 平成8年7月22日～10月3日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 平野清明）

調査 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

管 理 藍原直木（事務局長）

山上利雄（総務課長）

亀井 功（調査課長）

庶 務 泉田 誠（総務課主事）

指導 藤巻正信（調査課第一係長）

調査担当 般坂盛泰（同文化財調査員）

調査職員 渡澤 誠（同嘱託員）

山崎忠良（同嘱託員）

2 調査概要と経過

A 一次調査（第5回）

一次調査は用地買収の終了した所から順次着手して行き、5回にわたって実施した。5回の調査で対象とした面積は、延べ39,140m²で、設定したトレンチは合計148か所である。

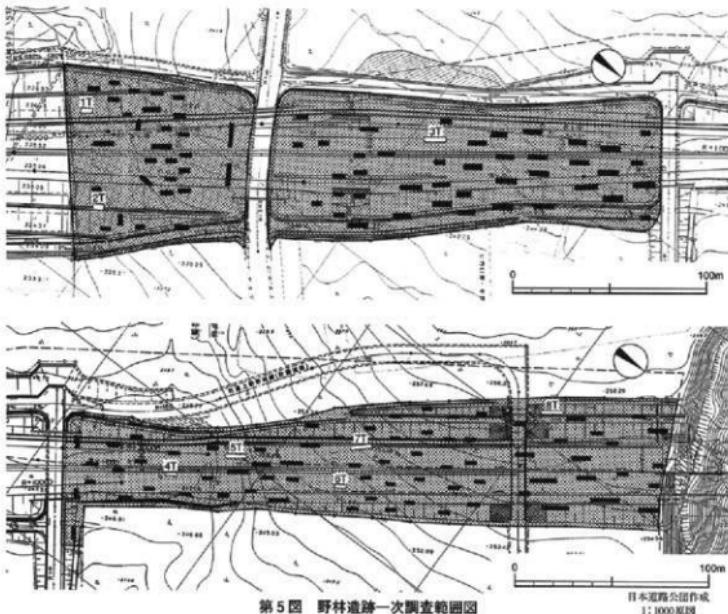
1回目の調査（平成6年9月2日～9月7日）では当初予定されていた37,300m²のうち、用地買収の終了した11,550m²を対象とした。その後立木の伐採と用地買収が進み、2回目（同年10月31日～11月18日）の調査で、残り部分のうちの12,950m²を対象として調査を行った。しかし、依然一部未買収の用地が2か所残り、その部分に関しては次年度へ送られた。平成7年度に入り、カルバートボックス工事にかかる村道松ヶ峯線の切り回し部分1,840m²を調査する必要が出たため、急遽3回目（平成7年6月29日）の調査を行った。また、法線内の用地買収が進み、4回目（平成7年8月22日～8月25日）で6,200m²を、5回目（同年9月11日～9月14日）で6,600m²を対象に調査を行った。

5回にわたる調査はいずれも重機または人力によりトレンチ内を徐々に掘り下げながら、遺構・遺物の有無を確認・記録した。その結果、遺構・遺物が確認されたトレンチは合計8か所であった（第5回白抜きのトレンチ）。各トレンチの概要は次の通りである。

1トレンチ・2トレンチ（以下1T・2T）では、縄文時代前期末葉と中期初頭の土器が出土したが、遺構は検出されなかった。3Tでは地表面で焼土層が確認された。4Tでは土坑^{註1)}が、5Tで炭窯と思われる炭化物の集中、6T・7Tで炭窯と土坑、8Tではフ拉斯コ状土坑がそれぞれ検出された。ただしこれらの各遺構に伴う遺物は検出されなかった。以上のことから、1T・2T周辺の2,000m²を「野林遺跡A地点」、3T周辺の600m²を「同B地点」、4T～7T周辺の5,600m²を「同C地点」、8T周辺の1,200m²^{註2)}を「同D地点」として、二次調査必要範囲と判断した。

註1) 二次調査で再検討した結果、人為的な遺構でないと判断した。

註2) D地点は、二次調査中に範囲が拡大され、1,570m²となった。



第5図 野林遺跡一次調査範囲図

日本道路公団作成
1:1000縮尺

B 二次調査

二次調査は平成7年度と8年度の2か年にわたって行った。グリッドの設定と発掘方法は、年度や地点に関わらず統一した。調査経過については各地点毎に報告する。

(1) 調査方法

詳細は各地点によって異なるが、基本的には基本層序の確認、包含層発掘、遺構の精査・発掘、遺構の実測・写真撮影という手順で調査を行った。表土の除去作業は、調査員立ち合いの基に遺物包含層直上まで重機でおこない、遺物包含層の掘削は人力でおこなった。また、一次調査の結果から遺物出土が稀薄なか所は、遺構検出に重点を置き重機で地山面まで慎重に掘り下げた。出土した遺物は、小グリッド単位を基本に出土層位を記し取り上げた。検出された遺構は、種類毎に通し番号を付し発掘した。遺構種別は、道路遺構、炭窯、土坑（SK）、陥没穴状土坑（SK）、集石、ピットである。実測は、概ね縮尺1/20で図化したが、細かな図化を要するものは縮尺1/10でおこなった。現場での記録写真は、35ミリモノクローム、35ミリカラーリバーサルを基本とした。

(2) 調査経過

A 地点 平成 7 年 10 月 2 日から表土剥ぎを開始した。公団より、調査区の北東側（国道18号線側）に工事用進入路を建設したいとの要請があり、該当する 400m²を早急に調査することとなった。これについては 10 月 20 日に調査を終了した。並行して 10 月 16 日より、残りの 1,600m²についての調査を行った。一次調査の 2 T 付近から遺物が出土したが、それ以外からは全く出なかったので、2 T 周辺以外は地山面まで重機により包含層を発掘した。遺構は検出されず、11 月 15 日 A 地点の調査を終了した。

B 地点 一次調査で確認された焼土層は、二次調査において再検討した結果、地山土が自然に赤変したものと判明したため、これは遺構と認められず B 地点では遺構・遺物ともに検出されなかつことになる。

C 地点 C 地点 の調査は 2 か年にわたり、平成 7 年度はセンターラインより北東側半分 (2,600m²) を、8 年度は南西側半分 (3,000m²) を調査した。7 年度の調査では 10 月 17 日より表土剥ぎを開始した。遺物がほとんど確認されなかつたので、A 地点と同様地山面まで重機により掘り下げ、遺構確認を行つた。炭窯とそれに伴う土坑、集石等を検出・調査し、11 月 22 日、7 年度の調査を終了した。翌 8 年度の調査は D 地点と併せて行った。D 地点を先行して調査したが、8 月 19 日から C 地点も本格的に着手し、10 月 3 日に終了した。炭窯とそれに伴う土坑、道路遺構を検出した。

D 地点 平成 8 年 7 月 22 日から調査を開始した。当初の対象面積は 1,200m² であったが、陥穴列が調査予定範囲の外へ東に向かって延びることが判明し、その分 370m² を拡張した。従つて調査面積は 1,570m² となる。炭窯とそれに伴う土坑、16 基からなる陥穴列を検出・調査し、9 月 19 日に終了した。

3 整理作業

A 方法

整理方法は上中島遺跡と同様である。

B 整理経過

(1) 経過

平成 7 年度調査分の資料も含めて本格的な整理作業が行われたのは平成 8 年度の冬期間である。平成 9 年度は写真図版の作成と若干の原稿編集のみを行つた。

(2) 体制

平成 8 年度

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 平野清明）

調査 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

管理 藍原直木（事務局長）

山上利雄（総務課長）

亀井 功（調査課長）

庶務 泉田 誠（総務課主事）

指導 藤巻正信（調査課第一係長）

職員 島田昌幸（同文化財調査員）

瀧澤 誠（同嘱託員）

山崎忠良（同嘱託員）

平成10年度・平成11年度

管 理 須田益輝（事務局長）

若槻勝則（総務課長）

木間信昭（調査課長）

庶 務 推谷久雄（総務課主任）

指 導 寺崎裕助（調査課調査第一係長）

整理担当 飯坂盛泰（同 文化財調査員）

4 遺 跡

A 概 観

野林遺跡は、妙高山の北東山麓およそ13kmに位置し、同山を源流とする渋江川右岸にある。周辺は妙高山及びその周辺を起源とした岩屑流に厚く覆われ、東から北東に緩傾斜する比較的平坦な荒蕪地である。調査区内の標高は南東より北西方向へ約235～258mである。渋江川に隣接する部分は、他よりも一段高い面を形成している。

A地点は、北東に緩傾斜した地形である。南東側には水路が隣接しており、水路造成や伐採で搅乱されていた。遺物は、縄文時代前中期（福浦上層式と十三苦提式）の土器片が出土した。この他、近代以降と思われる瓦器の底部及び口縁部が60点余（数個体分）出土した。

B地点は東に面した斜面で、下方に極めて緩やかに開けている。遺物の出土はなく、遺構も検出されなかった。

C地点は、調査区ほぼ中央から南東方向に急傾斜で落ち込み、両端で比高差が9mある。下段は沢で、堆積層は厚い（1.4～1.5m）。遺構・遺物は検出されず、地下水路の空洞が認められ、降水は伏流水となつて流れていることが伺える。また、疊も多く、最深部分では含水率が高い。遺構・遺物は、斜面から上段にかけてのみ分布している。遺構は、縄文時代のフ拉斯コ状土坑1基、覆土中にみられる灰白色の火山灰から平安時代頃と推定される炭窯5基とそれに伴うと思われる土坑6基、さらに時代不詳の道路遺構が検出された。遺物は縄文土器・赤生土器・古墳時代の土器類・須恵器の小破片が40点余り出土したが、遺構に伴うものはない。

D地点は、野林遺跡で最も標高が高く、平坦ながら北東端を渋江川の深い谷で遮られた高原状の地形である。遺構は、二次調査で調査区南西壁に検出された陥し穴状土坑（SK4）と、既に一次調査で検出されていた土坑とを結ぶ直線上に、多くの土坑が検出された。さらに、その直線を東へ延ばした調査区外で、土取りにより半截状態の陥し穴状土坑が確認された（SK19）。そこで調査区を370m²拡張し、全部で16基の陥し穴状土坑を検出した。これらの土坑列は、今回の調査範囲よりもさらに東西に延びる可能性がある。SK4～SK19の配列及び渋江川にはさまれた地形から、縄文人の獵場と推定できる。D地点では、このほか炭窯3基・炭窯に伴う土坑3基・ピット3基が検出された。なお、遺物は北陸系の縄文時代中期前葉の土器1点と石鏃1点しか出土しなかった。

B グリッド設定 (第6図)

大グリッドは、国家座標を基準とした10m方眼を設定し南北方向は南から順に算用数字を、東西方向は西から順にアルファベットを付け「3 D」のように表した。また、A～Dの各地点間は距離がありセンター杭のラインに対しグリッドの主軸は約45°傾いているため、各地点毎個別に大グリッドを設定した。小グリッドは大グリッドをさらに2m四方に25分割し、大グリッドと同様、南から北、西から東の順に番号を付け「3 D17」のように表した。国家座標値は、A地点の3B杭がX=+108450.00、Y=-24800.00で、8G杭がX=+108500.00、Y=-24750.00である。C地点は、3M杭がX=+108750.00、Y=-24950.00で、13C杭がX=+108850.00、Y=-25050.00である。D地点は、3F杭がX=+108900.00、Y=-25100.00で、8A杭がX=+108950.00で、Y=-25150.00である。

C 層序

(1) 野林遺跡A地点 (第7図)

調査範囲は、北西-南東に約23m、北東-南西に約98mにわたる。現地表の標高は約235～240mで、北東方向に緩やかに傾斜している。一次調査の結果から、遺物出土地点が6H区周辺に限られたため、北東側に位置するベルトのセクション図を実測・記録した。土層はI層からIV層に分層したが、I層の上に盛土が載っていたり、擾乱層が見られたりと堆積状況は良い状態ではなかった。

基本層序は以下の通りである。

- I 層：表土層で、暗褐色を呈する。しまりはややあるが、粘性はない。層厚は20～50cmを測る。
- II 層：暗褐色を呈する層でにぶい黄褐色土が混入、少量の炭化物が点在している。土質はしまりがあり、粘性がなくばさばさしている。層厚は15～30cmである。
- III 層：遺物包含層で、黒色を呈する。粘性・しまりがあり、層厚が12～50cmである。
- IV 層：暗褐色土で、地山層である。土質は粘性がややあり、しまりはない。層厚は8～15cmである。

(2) 野林遺跡C地点 (第8図)

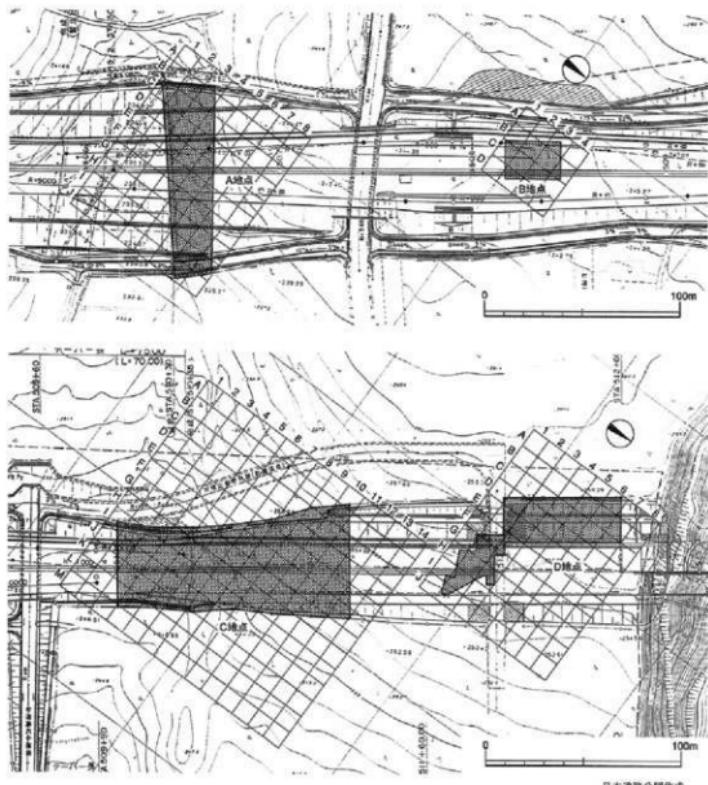
調査範囲は北西-南東に約120m、北東-南西に約50mにわたる。現地表の標高は約247～256mを測り、北東方向に緩やかに傾斜している。調査区北西部と南東部で標高差が大きく、上段（調査区中央から渋江川より上段とする）から下段に至る傾斜面は急である。下段は沢になっており、層序も上段とは異なった様相を呈している。

メインセクションはセンターラインに沿って設定したメインベルト及びそれと直交する任意のベルト上に設定した。土層の堆積は上段で4層・下段で9層に分層されるが、必ずしも上・下段の層位は一致しないため、上段・下段を分けて基本層序を記載する。下段部分では、調査前に工事による残土が盛土されていたため、表土部分に人為的な土層の堆積が認められる。

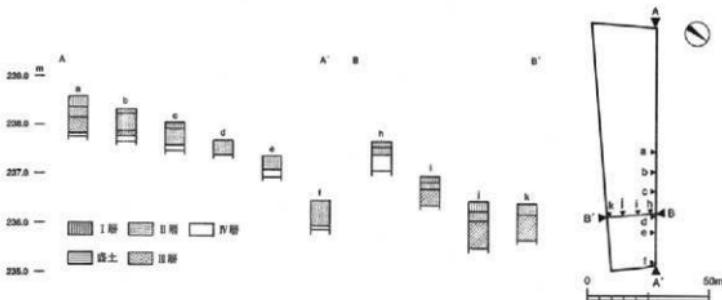
基本層序は以下の通りである。

〔上段基本層序〕

- I 層：黒褐色土で、表土層である。粘性が強く、しまりがない。層厚は8～25cm程を測る。
- II 層：遺物包含層で、黒褐色を呈する。ローム質土で、粘性が強く、しまりがない。層厚は5～15cmを測る。



第6図 野林遺跡グリッド設定図



第7図 野林遺跡A地点土層柱状図

III 層：暗褐色を呈した層で、粘性が強く、しまりはない。黄褐色土のローム粒子が混じる漸移層である。土質はロームで、層厚は5~15cm程を測る。

IV 層：黄褐色を呈した層で、地山層である。土質はロームで、粘性が強く、しまりがある。

[下段基本層序]

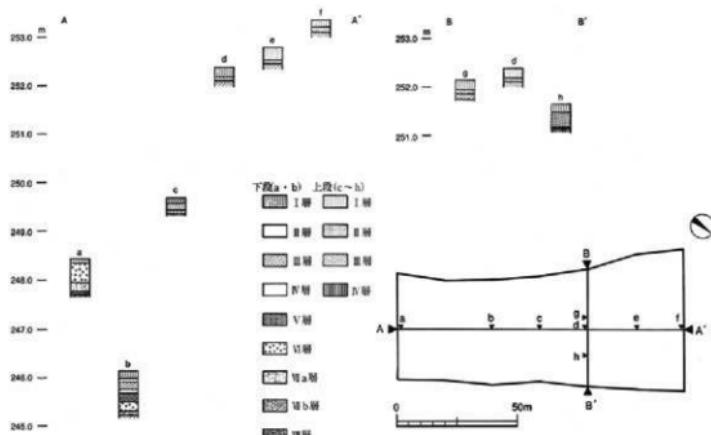
I 層：黒褐色を呈する層で粘性が強く、しまりのない表土層である。層厚は5~20cmを測る。

II 層：I層よりやや濃い黒褐色を呈する層で粘性が強く、しまりはない。層厚は2~12cmを測る。

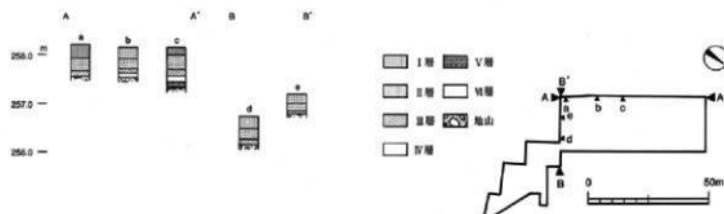
III 層：にぶい黄褐色を呈する層で粘性がなく、しまりがある。火山灰堆積物である。層厚は4~15cmを測る。

IV 層：黒色を呈する層で粘性が強く、しまりはない。層厚は8~15cmを測る。

V 層：黒色を呈する層であるが、少し赤褐色を帯びている。粘性が強く、ややしまりがある。層厚は7~16cmを測る。



第8図 野林遺跡C地点土層柱状図



第9図 野林遺跡D地点土層柱状図

- VI 層：IV・V層より明度の低い黒色を呈する層で、赤褐色を帯びる部分もある。粘性は強く、しまりはない。若干ではあるが、砂・礫が含まれている。層厚は20～40cmを測る。
- VII 層：黒褐色を呈する層で、砂・礫を多く含んでいる。粘性強く、しまりもある。層厚は5～20cmを測る。(上段のII層に相当する)
- VIII 層：暗褐色を呈する層で、砂・礫を多く含む漸移層である。粘性強く、しまりもある。層厚は5～8cmを測る。(上段のIII層に相当する)。
- IX 層：明黄褐色を呈する層で礫を多く含み、妙高山起源の火砕流堆積物と思われる。粘性が強く、しまりもある。

(3) 野林遺跡D地点(第9図)

調査範囲は、北西-南東方向に約60m、北東-南西方向に約23mにわたるほぼ長方形の範囲とそこから東へ延びる拡張部分である。現地表の標高は約257～258mを測り、標高差は1m余である。北西端は渋江川を眼下に見下した比高約50mの崖上にある高原状の地形である。土層はI～VI層に分層した。

基本層序は次の通りである。

- I 層：黒色を呈する表土層で粘性が弱く、しまりは普通である。層厚は10～35cm程を測る。
- II 層：黒色を呈する層で粘性が弱く、しまりは弱い。炭化物が極少量含まれる。層厚は10～30cm程を測る。
- III 層：黒褐色を呈する層で、粘性は概ね弱く、しまりは普通である。炭化物は、直径2mm程の粒子が微量含まれる。また、ロームが、ブロック状または粒状に広く含まれている所も確認できる。層厚は10～20cm程を測る。
- IV 層：黒褐色を呈する層で粘性が弱く、しまりはない。層厚は5～20cm程を測る。
- V 層：暗赤褐色を呈する層で粘性は普通で、しまりはない。礫や炭化物は含まない。層厚は5～15cm程を測る。
- VI 層：明褐色から黄褐色を呈するローム質の地山層で粘性が強く、しまりはある。

5 遺構

A地点・B地点では遺構が確認されなかったため、報告はC地点・D地点について行う。C地点では道路遺構が、D地点では16基の陥し穴列が特徴的である。

A 野林遺跡C地点

遺構は、道路遺構のほかに炭窯5基、炭窯に伴う土坑6基、縄文時代のフラスコ状土坑1基、集石2基を検出した。

(1) 道路遺構(図版8・9)

6F・7F・6G・7G区に位置し、調査区のはば中央部を南西-北東方向に走る。南東に5号炭窯及びSK6がある。長楕円形又は不整楕円形を呈する小さな溝がほぼ20～30cmの間隔をおきながら幾重にも整然と並び、この小溝の長径を“幅”とする波板状の痕跡を形成する。それぞれの小溝の規模は長径50cm

のものから280cmのものまであり一定しないが、概して長径200cm前後、短径50cm前後、深さ10cm程度である。側溝にあたるものは確認されなかった。この波板状の痕跡は南西の調査区外から続いているものと思われ、調査区際では2条認められた。2条の波板状痕跡は北東へ延びるにつれて互いの間を狭め、12m程進むと1条にまとまる。すなわち、確認された波板状痕跡は全体でY字状を呈する。その先は自然消滅的に次第に規模を小さくして行くが、確認されたものの全長は、およそ23mに及ぶ。この波板状痕跡は、等高線に沿って配され、各小溝は谷側より山側で深く掘られている。断面形は、各小溝で丸底であったり、平底であったり一定しない。また、同列の小溝の中でも深さが5cmのものや20cmのものがあり、これも一定しない。覆土は、各小溝で黒褐色土あるいは褐色土が主体を占め、概ねよくしまる。また、各小溝の底面は、凹凸が激しく非常に堅くしまっており、礫を多く含んでいる。遺物等は、検出されておらず、構築時期は不明である。

(2) 炭 窯 (図版10・11)

1号炭窯 (図版10) 8H・9H区に位置し、北西には隣接してSK1がある。残存状況は良好で、平面形は長方形に近い不整形を呈し、長径約410cm、短径約200cm、長軸方向はN-14°-Eである。断面形は、ほぼ平坦な底面と、緩やかに外傾して立ち上がる側壁を持ち、深さは確認面より約15~20cmである。覆土は11層に分層されるが、いずれもよくしまり粘性もある。そのうち4層は、炭化物を多量に含む層で底面近くに広く分布し、南北側で厚く北東側では薄く堆積する。焼土は、覆土中にブロック状にわずかに含まれるのみで、窯底や側壁には確認されなかった。隣接するSK1は、この炭窯に被せる土を採掘した土坑と思われる。

2号炭窯 (図版10) 11F区に位置し、西には隣接してSK2・3がある。窯体南西部はSK7と重複する。また、北側は擾乱を受けたために残っておらず、残存状況は悪い。平面形は、残存部から推定して隅円長方形を呈するものと思われる。南側壁面には突出部が認められ、窯底よりさらに10cm程低い底面を持つ。全長は擾乱により不明であるが、幅は208cm、長軸方向はN-9°-Wである。深さは、約25~30cmで、窯底は緩やかに南側に傾斜する。また、窯底の北側には焼土が多く認められる。覆土は、残存部で8層に分層できる。このうち底部に広く分布する8層は炭化物層で、窯体中央部には細片が多く、底面近くには炭の形が残ったものが多い。また、2層には褐灰色の火山灰が多く含まれる。隣接するSK2・3は、この炭窯に被せる土を採掘した土坑と思われる。

3号炭窯 (図版10) 11C区に位置し、隣接して南東に4号炭窯、北西にSK4、南西にSK5がある。北東壁中央が一部擾乱を受け、残存状況は良くない。平面形は長方形を呈し、全長約260cm、幅約180cm、長軸方向はN-39°-Eである。断面形はほぼ平坦な底面と、緩やかに外傾して立ち上がる側壁を持ち、深さは約8cmと浅い。覆土は2層に分層されるのみで、2層は炭化物を多く含む層である。1層には、褐灰色または灰白色の火山灰が含まれる。隣接するSK4・5は、この炭窯に被せる土を採掘した土坑の可能性があるが、4号炭窯も隣接して存在するため、それぞれの炭窯と土坑の相関関係は明確にし得ない。

4号炭窯 (図版10) 10D・11D区に位置し、隣接して北西に3号炭窯とSK4、西にSK5がある。窯体北東側が削平により一部消失し、残存状況は良くない。残存部から推定し、平面形は隅円長方形を呈する。全長約483cm、幅約220cm、長軸方向はN-28°-Eである。断面形は、ほぼ平坦な底面を持ち、深さはおよそ15~40cmである。窯体南西壁に突出部がある。窯体底面には、壁面が立ち上がる部分に溝が巡り、さらに底面中央をもう1条の溝が縦走する。溝は幅約20cm、深さは2~5cmである。覆土は、3層に

分層でき、いずれの層にも炭化物が認められる。中でも底面近くに広く分布する3層は、炭化物を特に多く含む層である。また、1層には火山灰が多く認められる。隣接するSK4、SK5は、この炭窯に被せる土を採掘した土坑の可能性があるが、前述の3号炭窯も隣接しており、それぞれの炭窯と土坑の相関関係は明確にし得ない。

5号炭窯（図版11） 6G区に位置し、約4m西にSK6がある。北側と西側の一部が削平により消失し、残存状況は悪い。残存する部分から、全体の形状は隅円長方形を呈するものと推定される。全長約590cm、幅約240cm、長軸方向はN-5°-Wである。断面形は、平坦な底面とやや急に立ち上がる側壁を持ち、深さは約45cmである。他の4基の炭窯がほぼ平坦な地形上に作られているのに対し、5号炭窯のみやや傾斜した地形上（約7°南側下がり）に作られている。窯体南側には、小さな突出部があり、そのすぐ内側の窯底にはピット状の浅い落ち込みがある。ピットは直径約60cm、窯底からの深さは約5cmである。

4号炭窯と同様に溝が底面を巡るが、これは途中で途切れた形になり、北西部では確認されなかった。さらに、底面中央に溝が掘られているが、これも窯底中央を3分の2の所で途切れ、北側では確認されなかった。覆土は、6層からなり全体にしまりがない。炭化物層である6層は窯底全体に広く分布し、6層直上に薄く堆積する4層は、灰白色の火山灰層である。隣接するSK6は、この炭窯に被せる土を採掘した土坑と思われる。

（3）土坑（図版11・12）

SK1（図版11） 9H区に位置し、南東には隣接して1号炭窯がある。残存状況は北側を一部欠き、良くない。平面形は不整橢円形を呈し、長径約200cm、短径約160cmである。断面形は、ほぼ平坦な底面と、北西側でゆるく、南東側ではやや急に立ち上がる側壁を持ち、深さは約20cmである。覆土は、6層に分層され、3層に炭化物を少量含む。また、わずかではあるが1層には、褐灰色の火山灰が含まれる。1号炭窯に被せる土を採掘した土坑であると思われる。

SK2（図版11） 11F区に位置し、東には隣接して2号炭窯とSK7が、北西にはSK3がある。残存状況は、良好である。平面形は不整橢円形を呈し、長径約260cm、短径約180cmである。断面形は中央がやや盛り上がった底部と、緩やかに外傾して立ち上がる側壁を持ち、深さは約24cmである。覆土は9層に分層でき、ほぼ全体によくしまり粘性もある。2層は、灰白色の火山灰を多量に含む。また、1～5層及び7層は、炭化粒がわずかに含まれる。2号炭窯に被せる土を採掘した土坑であると思われる。

SK3（図版11） 11F区に位置し、南東に隣接して2号炭窯とSK7が、南にはSK2がある。残存状況は良好である。平面形は不整形で、長径約290cm、短径約175cmである。断面形は丸みをもつ底部と、ゆるやかに外傾する側壁を持ち、深さは約28cmである。覆土は、7層に分層でき、概ね全体にしまりがある。2層は、灰白色の火山灰をやや多く含む。ほぼ全体に炭化物がわずかに含まれ、5層には多量に含まれる。SK2と同様、2号炭窯に被せる土を採掘した土坑であると思われる。

SK4（図版12） 11C区に位置し、南東に3号・4号炭窯、南にSK5がある。残存状況は良好である。平面形は、不整橢円形で、長径318cm、短径188cmである。断面形は、ほぼ平坦な底面と南側で緩やかに、北側でやや急に立ち上がる側壁を持ち、深さは15～20cmである。覆土は、3層に分層でき、1層に褐灰色及び灰白色の火山灰をブロック状に含む。SK5とともに3号・4号炭窯に被せる土を採掘した土坑であると思われる。

SK5（図版12） 10C・11C区に位置し、隣接して北東に3号炭窯、東に4号炭窯、北にSK4があ

る。東側が一部削平されているが残存状況は概ね良好である。平面形はほぼ円形で、長径256cm、短径202cmである。断面形は、凹凸のある底面とゆるやかに外傾する側壁を持ち、深さは18cmである。覆土は、3層に分層でき、いずれも粘性は強いがしまりはない。1層は、灰白色の火山灰を含む。SK 4と同様3号・4号炭窯を被せる土を探査した土坑であると思われる。

SK 6 (図版12) 6G区の緩斜面上に位置し、2m東に5号炭窯がある。南側を一部欠くが、残存状況は概ね良好である。平面形は不整形で、長径276cm、短径208cmである。断面形は、ほぼ平坦な底部を持ち、深さは12cmである。覆土は、3層に分層でき、いずれも粘性は強いがしまりはない。1層は、灰白色の火山灰を、2層には炭化物粒子を含む。5号炭窯を被せる土を探査した土坑であると思われる。

SK 7 (図版12) フラスコ状土坑である。11F区に位置し、一部が2号炭窯との重複により破壊されている。平面形は橢円形で、確認面で110×88cm、くびれ部で78×74cm、底面で160×138cmである。断面形は、北東部分が2号炭窯により一部欠落するものはほぼ平坦な底部を持ち、深さは88cmである。覆土は、14層に分層され、全体にしまりは弱い。出土遺物はなかった。

(4) 集 石 (図版12)

1号集石・2号集石 (図版12) 10G区に位置し、周辺に他の遺構は認められない。1号集石・2号集石の間の距離は約20cmで、両者は近接して存在する。1号集石の礫散布状況は、直径46cmのほぼ円形を呈し、1点だけ礫群から約25cm離れた地点に存在する。2号集石の礫散布状況は、直径37cmのほぼ円形を呈する。1号集石・2号集石ともに掘り込みではなく、土坑を伴わない集石である。いずれの礫にも熱を受けた痕跡は認められず、また付近に炭化物や焼土も確認されなかった。周辺は、遺物包含層にも地山にも礫が全く見当たらない状況であり、搬入礫の可能性が高い。

B 野林遺跡D地点

縄文時代の陥入穴状土坑16基のほか、平安時代の所産と考えられる炭窯3基、炭窯に関わる土坑3基、ビット3基を検出した。

(1) 炭 窯 (図版13)

1号炭窯 (図版13) 5C・6C区に位置し、隣接して南にSK 2、南西に3号炭窯とSK 1がある。炭窯東側には樹木があり、その根が側壁に達していたが、残存状況は概ね良好である。平面形は、隅円長方形で、南側に突出部を持つ。全長約580cm、幅約292cmを測る。断面形は、平坦な底部を持ち、深さはおよそ48cmを測る。窯体南端の突出部の側壁は、検出面より傾斜して窯底に至る。突出部には、細かな炭化物が多く検出された。覆土は、10層に分層され、1・2・4・7層に混じる炭化物のブロックは木炭、3・5・6・9・10層の炭化物は木炭を焼くための燃料と考えられる。また、1層には火山灰が認められる。覆土は、炭化物片を含む黒色土と炭化物ブロックを含む黒褐色土が交互に重なり、堆積している。窯底は一様に焼けており、堅くしまり、やや赤みを帯びている。側壁は、窯底からやや内湾ぎみに立ち上がり、その後緩やかに外反しながら立ち上がる。また、窯底南側、突出部に近い所には、U字形に溝が切られている。溝底は窯底同様焼け、堅くしまる。この溝は、排水のために設けられた溝と考える。溝は、幅18~24cmを測る。隣接するSK 1・2は、この炭窯に土を被せる際に、土を探査した土坑である可能性があるが、3号炭窯も隣接しており、それぞれの炭窯と土坑の相関関係は明確にし得ない。

2号炭窯（図版13） 6D区に位置する。1号炭窯を含む炭窯・土坑の集合地点からはやや離れた位置にあり、隣接する遺構はない。残存状況は比較的良好である。平面形は、不整橢円形ともいべき形で、長径約252cm、短径約174cmを測る。断面形は、平坦な底面を持ち、緩やかに立ち上がる。深さは、およそ12cmを測る。突出部や窯底の排水溝を持たず、1号炭窯とは構造を異にする。覆土は、3層に分層でき、いずれの層にも炭化物を含む。炭化物片を含む黒褐色土（1層）と黒色土（3層）に挟まれて炭化物ブロックを含む黒色土（2層）が堆積する。全体的にしまりはない。この炭窯は、深さ12cmと浅いが、立地から考えて、炭窯廃棄後大きな削平をうけたとは考えられない。窯底や側壁もあまり焼けている様子は認められない。報告では炭窯として扱ったが、炭窯以外の用途も考えられる。

3号炭窯（図版13） 3H区に位置する。隣接する遺構はない。検出面が基本層序のN層のため残存状況は良好とは言えない。平面形は、角の丸まった三角形のような形で、全長約218cm、幅は広い所で約158cmを測る。断面形は、南端と北端にピット状の小穴を持ち、起伏がある。深さは約4cm、南端と北端のピットは深さ15cm前後を測る。覆土は、2層に分層でき、2層黒褐色土の上に炭化物を多く含む1層黒色土が堆積する。

（2）土坑（図版13）

SK1（図版13） 5B区に位置し、隣接して北東に1号炭窯、北に3号炭窯、東にSK2がある。残存状況は、比較的良好である。平面形は橢円形で、長径約240cm、短径約182cmを測る。断面形は、やや起伏があるが概ね平坦な底面を持ち、側壁は緩やかに立ち上がる。深さは約22cmを測る。覆土は、2層に分層した。1層は火山灰を多く含む褐灰色土で、2層は炭化物を少量含む黒色土である。SK1には1号炭窯、3号炭窯、SK2が隣接しており、SK1は、SK2とともに1号炭窯ないし3号炭窯のために土を採掘した土坑である。

SK2（図版13） 5B・5C区に位置する。隣接して北に1号炭窯、北西に3号炭窯、西にSK1がある。残存状況は良好である。平面形は橢円形で、長径約292cm、短径約256cmを測る。断面形は、底面にやや起伏があり、すり鉢状を呈する。深さは約48cmを測る。覆土は、7層に分層できる。1・4・6・7層は炭化物を含み、4層は火山灰を含む。覆土中の炭化物の含有は少量である。また、周囲には1号炭窯、3号炭窯、SK1が近接しており、SK2もSK1同様炭窯に関連した性格の土坑と考える。

SK3（図版13） 5B区に位置する。隣接して北東に1号炭窯、南にSK1・2がある。樹木の根が炭窯内中央に入り込むが、残存状況は比較的良好である。平面形は橢円形で、長径約384cm、短径約318cmを測る。断面形はやや起伏があるものの、概ね平坦な底面を持ち、深さは、およそ24cmを測る。覆土は、2層に分層でき、黒色土（2層）の上に黒褐色土（1層）が堆積する。両層ともにしまりがあり、炭化物を多く含む。また、1層には火山灰を多く含む。

（3）陥し穴状土坑（図版14～17）

陥し穴状土坑の形態はさまざまであるが、平面形ではいずれも上端の直径が80～160cmの円形または不整形を呈する。断面形は、深さ80～100cm前後、確認面から20cm前後のところでくびれを持つフ拉斯コ状を呈するものと、くびれ部からほぼ垂直に落ちるものがある。平面形の下端は、隅円方形又はそれに近い不整形を呈するものがほとんどである。土坑底部に小ピットを持たないものが5基、小ピットを持つものが11基である。小ピットを持つもののうちほとんどは、4基の小ピットを直線で結ぶとほぼ正方形になるように配されている。また、3基の小ピットを持つものについては、ほぼ正三角形になるような配置と

なっている。なお、陥し穴状土坑から遺物の出土はなかった。

S K 4 (図版14) 4 B 区に位置する。残存状況は良好であるが、SK 4 の南西部分は調査範囲外で、調査はできなかった。平面形は上端が不整円形、下端は隅円長方形に近い不整形を呈すると考えられる。上端の径は約92cmを測る。断面形は、くびれ部から垂直ぎみに落ちる側壁を持つ。底面は概ね平坦で、深さは約80cmを測る。SK 4 には底面の小ピットは検出されなかった。覆土は17層に分層できる。覆土の下半部は水平に、上半部はレンズ状に堆積する。壁際には崩落と考えられるローム質土が存在する。

S K 5 (図版14) 4 B 区に位置し、残存状況は良好である。平面形は上端が不整円形、下端は隅円長方形である。上端の長径約120cm、短径約100cmを測る。断面形はフ拉斯コ状で、やや起伏のある底面を持ち、深さは約88cmを測る。底面に小ピットは認められなかった。覆土は13層に分層でき、13層黒褐色土のみが水平に堆積し、それより上の層はレンズ状堆積となる。壁際には崩落を思わせるローム質土が堆積する。

S K 6 (図版14) 4 C 区に位置し、残存状況は良好である。平面形は上端が不整円形、下端は長方形に近い不整円形を呈する。上端は長径が約144cm、短径が約126cmを測る。断面形は、フ拉斯コ状ぎみで、平坦な底面を持ち、深さは約82cmを測る。底面には4基の小ピットが認められた。小ピットの平面は、橢円形で、径10cm前後、深さ10cm前後を測り、方形の下端の各辺に対応する位置に存在する。覆土は、11層に分層できる。覆土の下半部は黒色土が水平に堆積し、上半部は黒色土・黒褐色土がレンズ状に堆積する。壁際には崩落によるローム質土が存在する。

S K 7 (図版14) 3 C 区に位置し、残存状況は良好である。平面形は上端が不整円形、下端は隅円長方形を呈する。上端では長径約160cm、短径約122cmを測る。断面形は、くびれ部からほぼ垂直に落ちる側壁を持ち、底面は平坦である。深さは約105cmを測る。底面からは4基の小ピットが検出された。小ピットの平面形は、橢円形で径10~25cmとばらつきがあり、深さは15cm前後を測る。小ピットは、方形の下端の各辺に対応する。覆土は17層に分層でき、下半部の堆積は水平で、上半部がレンズ状に堆積している。

S K 8 (図版15) 3 D 区に位置し、残存状況は良好である。平面形は上端が不整円形、下端は不整な長方形である。上端は長径約126cm、短径約114cmを測る。断面形は、フ拉斯コ状で平坦な底面を持ち、深さは約80cmを測る。底面の小ピットは認められなかった。覆土は13層に分層でき、13層黒褐色土が水平堆積する以外、レンズ状に堆積する。壁際には崩落によると思われるローム質土がみられた。

S K 9 (図版15) 3 D 区に位置し、残存状況は良好である。平面形は上端が方形に近い不整円形、下端は不整長方形を呈する。上端は長径約102cm、短径約82cmを測る。断面形は、くびれ部から垂直に落ちる側壁を持つ。底面は平坦であり、深さは約88cmを測る。底面から小ピットが4基確認された。小ピットの平面形は円形で、径10cm前後、深さ10cm前後を測り、方形の下端の各辺におおよそ対応する。覆土は15層に分層でき、15層の褐色土が水平堆積するほかは、レンズ状に黒色土・黒褐色土が堆積する。壁際には崩落によるローム質土がみられた。

S K 10 (図版15) 3 E 区に位置し、残存状況は良好である。平面形は上端が円形、下端は不整長方形を呈する。上端は径約122cmを測る。断面形は、フ拉斯コ状で平坦な底面を持ち、深さは約96cmを測る。底面から4基の小ピットが検出された。小ピットは平面形が不整円形で、径10~15cm前後、深さ10cm前後を測る。小ピットは、方形の下端の各辺に対応する。覆土は、15層に分層した。覆土下半部では黒色土や黒褐色土等が水平に堆積し、上半部ではレンズ状に堆積する。壁際には崩落によると思われるローム質土が確認された。

S K 11 (図版15) 3 E 区に位置し、残存状況は良好である。平面の上端は円形、下端は隅円長方形を呈する。上端は長径約130cm、短径約114cmを測る。断面形はフラスコ状で、平坦な底面を持ち、深さは約94cmを測る。底面には、4基の小ビットが検出された。小ビットは平面形が円形で、径10~20cm前後、深さ15cm前後を測る。それぞれの小ビットは、方形の下端の各辺に対応するように配置される。覆土は、20層に分層でき、覆土の下半部が水平堆積、上半部がレンズ状堆積をする。壁際には崩落によるローム質土の堆積が認められた。

S K 12 (図版16) 3 E 区に位置し、残存状況は良好である。平面形は上端が不整な円形で、下端は長方形を呈する。上端の長径は約144cm、短径は約110cmを測る。断面形は、フラスコ状を呈する。底面は、平坦であり、深さは約78cmを測る。底面の小ビットは検出されなかった。覆土は、13層に分層した。13層と12層が水平堆積する以外は、レンズ状堆積をする。壁際には崩落によると考えられるローム質土が存在する。

S K 13 (図版16) 3 F 区に位置し、残存状況は良好である。平面形は上端が円形、下端が隅円長方形を呈する。上端の径は、約106cmを測る。断面形は、くびれ部から垂直に落ちる側壁を持つ。底面にはやや起伏があり、深さは、約84cmを測る。底面からは小ビット1基が検出された。小ビットの平面は、円形を呈し、径10cm、深さ8cmで、西側の壁の中央付近に位置する。覆土は、12層に分層した。覆土の下半部は褐色土・黒色土が水平に堆積し、上半部は黒色土・黒褐色土がレンズ状に堆積する。壁際には崩落によるローム質土の堆積がみられる。

S K 14 (図版16) 3 F 区に位置し、残存状況は良好である。平面形は上端が円形、下端が隅円長方形を呈する。上端の径は約100cmを測る。断面形はフラスコ状で平坦な底面を持ち、深さは約84cmを測る。底面からは小ビットが3基検出された。小ビットの平面は梢円形で、径12cm前後、深さ15cm前後を測り、方形の下端の東側を除く各辺に対応している。覆土は、11層に分層した。覆土の下半部は、黒褐色土・黒色土が水平に堆積し、上半部は黒色土・黒褐色土・暗褐色土がレンズ状に堆積する。壁際には壁の崩落によるローム質土の堆積が認められる。

S K 15 (図版16) 2 H 区に位置する。残存状況は良好である。平面形は上端が梢円形、下端が長方形を呈する。上端の長径は約84cm、短径約68cmを測る。断面形はフラスコ状となり、やや起伏のある底面を持つ。深さは約80cmを測る。底面からは小ビット3基が検出された。小ビットの平面は円形で、径15cm前後、深さ10cm前後を測る。小ビットは、方形の下端の北西辺を除く各辺に対応する。覆土は17層に分層でき、黒色土や黒褐色土がレンズ状に堆積する。壁際には崩落によるローム質土がみられる。

S K 16 (図版17) 2 H 区に位置する。残存状況は良好である。平面形は上端が不整円形で、下端が隅円長方形を呈する。上端の長径は約102cm、短径は約70cmを測る。断面形はフラスコ状で、概ね平坦な底面を持ち、深さは約85cmを測る。底面からは4基の小ビットが検出された。小ビットの平面は、円形ないし梢円形で、径10~17cm前後、深さ20cm前後を測る。小ビットは、方形の下端の各辺に対応する。覆土は10層に分層される。覆土の下半部は黒色土の水平堆積であるが、上半部では垂直方向の堆積が認められる。

S K 17 (図版17) 2 I 区に位置する。残存状況は良好である。平面形は上端が不整円形、下端が隅円長方形である。上端の径は、約98cmを測る。断面形はフラスコ状で平坦な底面を持ち、深さは約86cmを測る。底面南側から小ビット1基が検出されている。小ビットの平面は円形で、径10cm、深さ8cmを測る。覆土は、8層に分層でき、覆土の下半部は黒色土が水平に堆積し、上半部は黒色土・黒褐色土がレンズ状に堆積する。壁際には崩落によるローム質土がある。

S K 18 (図版17) (図版17) 2 I 区に位置する。残存状況は良好である。平面形は上端が不整円形、下端が隅円長方形である。上端の長径約94cm、短径約82cmを測る。断面形はフラスコ状を呈し、やや傾斜する底面を持つ。深さは、約78cmを測る。底面から4基の小ピットが検出された。小ピットの平面形は橢円形で、径17cm前後、深さ12cm前後を測る。小ピットは、方形の下端の各辺に対応する。覆土は、12層に分層した。覆土の下半部が褐色土・黒褐色土・黒色土の水平堆積、上半部が黒色土・黒褐色土・暗褐色土のレンズ状の堆積となる。壁際には崩落によるローム質土の堆積がある。

S K 19 (図版17) 2 J 区に位置する。道路建設の土取り作業により半截された状態で検出され、急遽調査した。そのため、南半分は調査できなかった。残存状況は悪い。平面形は上端が不整円形、下端が長方形を呈すると考えられる。上端の径は、約70cm程と思われる。断面形は、フラスコ状で平坦な底面を持ち、深さは約76cmを測る。底部から小ピットは、検出されなかった。覆土は、下半部が水平堆積、上半部は垂直方向の堆積となる。

(4) ピット (図版17)

4 E - P i t 1 (図版17) 4 E 区に位置し、隣接する遺構はない。残存状況は良好である。平面形は不整円形で、長径約60cm、短径約46cmを測る。断面形はすり鉢状の底面を持ち、立ち上がりは急である。深さは約30cmを測る。覆土は4層に分層でき、しまりはよい。遺物の出土はなく、遺構の構築時期・性格は、不明である。

5 D - P i t 1 (図版17) 5 D 区に位置し、5 D - P i t 2 が北東に隣接する。残存状況は良好である。平面形は橢円形で、長径約54cm、短径約34cmを測る。断面形は、壁の立ち上がりが急な部分と緩やか

第3表 野林遺跡D地点陥入穴状土坑観察表

(単位: cm)

| 遺構No | 検出位置 | 上 端 | | 下 端 | | 深さ | 底 部 小ピット | 断 面 | 備 考 |
|-------|--------|-----|-----|-----|----|-----|-------------|----------|-----------------|
| | | 長径 | 短径 | 長軸 | 短軸 | | | | |
| SK 4 | 4 B 18 | / | / | / | / | 80 | なし | 垂直に落ちる側壁 | 上部の径 92 下部の径 82 |
| SK 5 | 4 B 22 | 120 | 100 | 81 | 63 | 88 | なし | フラスコ状 | |
| SK 6 | 4 C 6 | 144 | 126 | 84 | 72 | 82 | 4基 | フラスコ状 | |
| SK 7 | 3 C 19 | 160 | 122 | 84 | 78 | 105 | 4基 | 垂直に落ちる側壁 | |
| SK 8 | 3 D 4 | 125 | 114 | 80 | 70 | 80 | なし | フラスコ状 | |
| SK 9 | 3 D 13 | 102 | 82 | 86 | 80 | 88 | 4基 | フラスコ状 | |
| SK 10 | 3 E 2 | 124 | 118 | 98 | 70 | 96 | 4基 | フラスコ状 | |
| SK 11 | 3 E 12 | 130 | 114 | 90 | 82 | 94 | 4基 | フラスコ状 | |
| SK 12 | 3 E 21 | 144 | 110 | 88 | 70 | 78 | なし | フラスコ状 | |
| SK 13 | 3 F 1 | 108 | 104 | 80 | 64 | 84 | 1基 | 垂直に落ちる側壁 | |
| SK 14 | 3 F 6 | 103 | 98 | 85 | 74 | 84 | 3基 | フラスコ状 | |
| SK 15 | 2 H 8 | 84 | 68 | 75 | 65 | 80 | 3基 | フラスコ状 | |
| SK 16 | 2 H 22 | 102 | 70 | 92 | 70 | 85 | 4基 | フラスコ状 | |
| SK 17 | 217 | 99 | 96 | 94 | 68 | 86 | 1基 | フラスコ状 | |
| SK 18 | 2116 | 94 | 82 | 72 | 70 | 78 | 4基 | フラスコ状 | |
| SK 19 | 2 J 11 | / | / | / | / | 76 | なし | フラスコ状 | 上部の径 70 下部の径 90 |

※上端は楕円形または橢円形を呈するため「長径」「短径」と表記し、下端は楕円形または扇円形を呈するため「長軸」「短軸」と表記した。

な部分があり、底面は傾斜する。深さは約20cmを測る。覆土は、3層に分層した。遺物の出土は認められず、遺構の構築時期・性格は不明である。

5 D-Pit 2 (図版17) 5D区に位置し、5D-Pit 1が南西に隣接する。残存状況は良好である。平面形は梢円形で、長径約62cm、短径約38cmを測る。断面形は、中央部が一段低く落ち込んでおり、壁の立ち上がりは急である。深さは最深部で約26cmを測る。覆土は、2層に分層した。黒色土と黒褐色土が堆積しているが、しまりはない。遺物の出土は認められず、遺構の構築時期・性格は不明である。

6 遺 物

今回の調査では、整理箱(54×34×10cm)にして、約4箱の遺物が出土した。そのうち土器は、縄文時代前期末を中心として弥生時代後期、古墳時代後期、中世に及んでいる。このほかに縄文時代の石器が3点と時代不詳の瓦器類が出土している。

A 野林遺跡A地点 (図版18-1~38)

A地点からは縄文時代の土器と瓦器類が出土した。縄文土器は前期末のものが主体で、量的には6個体ほどの出土で少ないが北陸、関東、中部高地の土器が混じる当期の貴重な資料となるものである。他には、縄文時代中期初頭の土器が1点出土している。以下、所属時期別に報告する。

(1) 縄文時代の土器 (図版18-1~38)

1~36は縄文時代前期末に所属する土器である。1~8が北陸の福浦上層II式で、9~29が関東の十三苦提式系の土器で、30~36が中部高地系の土器に比定される。

1は口縁部から体部にかけて残存する。法量は、口径が37.4cmで、外反する口縁部には耳状の突起が4個、その間に7個のこぶ状粘土粒による小突起が付けられる。口縁部上半には、結節浮線文1条と横位に半隆起線文が施されている。体部は押圧隆帯を区切りに羽状縄文が施されている。内面は、横ナデ調整がなされている。2と3は同一個体で、口縁に耳状突起と小突起がつき、横位に半隆起線文が施される。4は半隆起線文で文様が描かれている。5は鋸歯状印刻文を交えて横位に半隆起線文が施されている。6~8は同一個体で、横位半隆起線文から下は縄文である。9~19まで同一個体である。文様は、地文にRL縄文を施し、結節浮線文を主文様に構成する。口縁部は内傾し、結節浮線文は波状になるものを挟んで横位に展開する。体部は、結節浮線文が底部に向かって継続する。19には底部から立ち上がり部分におこげ状の炭化物の付着がある。20~25は同一個体で、結節浮線文がRL縄文上に施されている。20は底部に向かって結節浮線文が継続する。26~28は同一個体で、無文地に結節浮線文が施されている。29は結節浮線文のほかに刻み目隆帯が施されている。30~36は同一個体である。頸部に近い30~33は、押圧隆帯が巡っている。34~36の体部は、半隆起線文で文様が構成されている。

37は、中期初頭の土器である。隆帯で区画され、上部は半截竹管による斜格子目文が施されている。38は、地文がLR原体によって施文されている。外面は、炭化物がすす状に付着する。時期は不明である。

(2) その他の時代の土器（写真図版34）

瓦器の類は、5F区付近から出土した。文様は、雷文などがある。破片は大きく、数も多いが、器種を判別することはできなかった。ただ、熱を受けた形跡が残ること、質の破片がいっしょに出土していることを考慮すると、七輪や火鉢、手焙りの類と考えられる。内面、外面ともにすす状に炭化物が付着する。胎土は3mm～1cmの礫を多く含み、粗質である。焼成は普通である。文様は、型を押し付けて、あるいは型に粘土を押し込んでつけたものと考えられる。出土地点には、小屋が建っていたらしく、調査時には農機具が散乱していた所である。これらから考えると、この瓦器類は近代以降の所産と思われる。

B 野林遺跡C地点（図版18-39～43）

C地点から出土した遺物は、縄文時代早期、前期末、中期後葉、弥生時代後期、古墳時代後期、中世に属する土器と縄文時代の石器が2点出土した。以下時期別に報告する。

39は早期の押型文土器の小破片である。40と41は同一個体で、諸磯C式の土器である。40はくの字に内屈する口縁部で、文様は平行沈線文が横位に施文され、その下に沈線が絞衫状に描かれる。41の体部は、斜位、横位、縦位の平行沈線文で文様が描かれている。42は中期後葉の加曾利E式併行の土器である。2条の平行沈線で区画された内にL R縄文が施文される。43は沈線文で文様が描かれている。44と45は同一個体で、弥生時代後期の箱清水式の壺形土器である。資料は頸部から体部にかけての小破片で、接合できたものはごく僅かである。44は頸部で、樹脂直線文が施文されている。内外面とも赤彩されている。45は底部に近い体部で、外面のみ赤彩されている。内面はハケメ調整されている。46は古墳時代後期の壺の口縁部である。口径は、11.6cmである。形状は緩やかに外反し、端部は丸く整形されている。47は中世の珠洲焼きの甕片で、外面は平行タタキが認められる。48の石器は不定形石器で、石材は珪質頁岩である。二次加工が右側辺に不連続な小剥離でなされている。『清水上遺跡II』[鈴木1996]での不定形石器の分類でいうと「F1類」に相当すると思われる。刃部は使用により光沢を帯び、磨かれている。49は磨石類で右側刃を欠損している。石材は安山岩で、凹痕だけ認められる。

C 野林遺跡D地点（図版18-50・51）

出土した遺物は非常に少なく、縄文時代中期前葉の土器1点と石器1点だけである。D地点は、陥し穴状土坑が検出されたが、遺構からの出土はなかった。

50は北陸の新保式の土器である。口径は、13.2cmで、文様は半截竹管を用いて半隆起線文、爪形文を施している。蓮華状文は、細線文に三角形印刻を施して作り出している。51の石縁は凹基無茎縁で前掲書[鈴木1996]の石縁の分類では「A1類」に相当する。

D 表採遺物（図版18-52）

52は、C地点の平成7年終了調査区内で表採した古墳時代後期の須恵器杯蓋片である。調整は回転ヘラ削りされている。胎土は、直径1～3mmの砂礫をまばらに含み、やや粗質である。焼成は良い。

7 まとめ

A 道路遺構について

道路遺構に伴う波板状の痕跡については諸説ある。上敷領久氏は東京都武藏国分寺跡での調査事例について「道路状遺構を構築するための基礎工事」〔上敷1989〕としている。また埼玉県東の上遺跡について飯田充晴氏は「構築時に道路母体の路床として計画され、その上面の路面（舗装）をより永く維持させるため行った、古代土木技術の一工法である」〔飯田1993〕として、道路の路床と捉える。両氏は波板状痕跡を道路構築時の産物と捉えるが、これに対し早川氏は「重量物を運搬した際に用いられたコロや梃子あるいは枕木として利用した丸太の路面に残された圧痕と思われる」〔早川1991〕とし、道路構築後に他の目的で道路が利用された結果の産物と捉える。この他「道路上に平行した階級的な区画施設の跡」〔高橋1985〕との見方もある。また、相模原市橋本遺跡では、波板状痕跡と類似する遺構が検出されたものの、これは急流が河床の岩石面を侵食して形成する「亀穴」と呼ばれる漏状の穴で、自然現象の結果であるとの判断に至った〔土井1986〕。

野林遺跡の波板状痕跡では、各小溝の底面は凹凸が激しく深さも一定しない。コロや梃子の跡とは考えにくい。また底面は黄褐色土と黒色土が転圧されたように堅くしまり、加えて、各小溝の周辺の土も堅くしまっていた。これらを考慮すると、野林遺跡の波板状痕跡は、飯田氏の唱える路床説に沿うと思われる。飯田氏の論をまとめるに、路床を波板状にすることの目的として①舗装部分の強度を安定させるため、②表面積を増大させることにより雨水を分散し、基礎地盤への雨水の透過を円滑にするため、③舗装部材との接面に抵抗を持たせ、舗装面の活動崩壊を防ぐためなどの解釈がなされている。また、野林遺跡の道路については側溝は検出されておらず道路の幅を決定することはできない。しかし小溝の長径の最大値が280cmであることから、少なくともそれ以上の幅をもつ道路であったことは推測できる。この道路遺構は、東側にある郷清水遺跡で検出した道路遺構〔立木（土橋）1999〕に延びていくものである。郷清水遺跡では、構築時期を炭窯との切り合い関係や遺物の出土状況と他の遺跡の類例から古墳時代に遡る可能性があることを述べているが、野林遺跡では構築時期を比定できる資料がなく明らかにできなかった。

B 陥し穴列について

(1) 形態

検出した陥し穴状土坑は17基で、その形状は上端が不整円形で下端が隅円長方形となり、壁面は開口部より底部に向かって徐々にくびれていき、くびれ部からややオーバーハングぎみに落ちるものとくびれ部から垂直に落ちるものである。新潟県湯沢町に所在する岩原Ⅰ遺跡〔佐藤1990〕では、ほぼ網羅できる陥し穴状遺構の分類がなされており、その中の「D類」に相当すると思われる。

陥し穴状土坑内の小ビットについては、その数が1～3基と少ないものは動物に傷を与える目的があると指摘されている〔今村1983〕。野林遺跡D地点の陥し穴状土坑の底部からも小ビットが検出されたものがある。いずれも平面形は円形ないし椭円形を呈する。その規模や底部での配置はおよそ共通している。岩手県袖ヶ浦遺跡〔吉田ほか1981〕では陥し穴状土坑底部の小ビットには掘り方がなく、瀬川氏は先端を鋭利にしたものを持ち込んだものと考察している〔瀬川1981〕。野林遺跡の陥し穴状土坑の小ビットは径10～20cm前後、深さ10cm前後で、逆茂木を直接打ち込んだとは考えにくく、断定はできないが、土をつき

固めて小ピット内の逆茂木を固定したものと考えておく。また小ピットの位置であるが、小ピット3基の陥し穴状土坑と4基の陥し穴状土坑はそれぞれ底部平面の中央付近に小ピットが位置し、逆茂木は陥し穴状土坑内中央に配置されたと思われる。

(2) 機能

SK4は南西側が調査区外のため北東側しか調査できなかった。そのためSK4では陥し穴状土坑の埋没の過程がうかがえる。それによると、SK4の掘り込みからの深さは約96cmとなる。野林遺跡の陥し穴状土坑のなかで、深さが最深のものはSK7で約105cm、平均85.25cmを測る。一方、岩原I遺跡の陥し穴状土坑「B類」の深さは125~150cm、平均132.3cmを測る。明らかに野林遺跡の陥し穴状土坑の方が小規模である。この規模では、逆茂木を考慮したとしても、体の大きい動物の捕獲は不可能と思われる。またいわゆる「Tピット」のように動物の足を挟みこんで、跳躍力を奪う仕掛けも見られない。野林遺跡の陥し穴状土坑は跳躍力のあまりない小動物を対象にしたものと思われる。

(3) 立地・配列

D地点北側約20mには渋江川による深い開析谷が形成され、南西から北東に緩やかに傾斜する。陥し穴状土坑はその尾根づたいに直線的に配されており、およそ東西方向に並ぶ。間隔は60~70cmとばらつきがある。おそらくけもの道に設置されたものと考えられる。SK4からSK14までは直線上に並び、その間の距離は約40mを測り、1つの陥し穴列を形成するものと考える。このSK4からSK14までの陥し穴状土坑列をA群とする。またA群自体SK4からさらに西方向にびる可能性もある。SK15からSK19までの陥し穴状土坑列をB群とする。SK15からSK19までは約24mを測る。B群は東方向にびていたことが予想される。SK14とSK15との間隔が約20mと開いていること、SK14とSK15が直線上に並ばないことを考慮すると、A群とB群は同じ陥し穴列を形成するのではなく、別の陥し穴列をそれぞれ形成すると考えられる。

(4) 構築時期

野林遺跡D地点の陥し穴状土坑から出土遺物はなく、切り合ひ関係もなく、さらに火山灰も検出されなかった。そこで他遺跡との比較をすることで、手がかりとしたい。

鳥取県米子市に所在する青木遺跡〔船越ほか1977〕からも野林遺跡の陥し穴状土坑と形態の類似する陥し穴状土坑が検出されている。所属時期については、青木遺跡D地区では陥し穴状土坑からサヌカイト製スクレーパーが出土していること、同E地区では縄文時代後期の土器片が出土していること、埋土のほとんどが黒灰色土1層で、縄文時代の遺物以外の出土がほとんどないことから、陥し穴状土坑の構築時期を縄文時代後～晩期と推定している。岩手県内の陥し穴状土坑については田村壮一氏の詳しい考察がある。田村氏によると、岩手県北部地域では陥し穴状土坑の検出面が、十和田火山に起源する中揮浮石層の下で、中揮浮石層の降下時期が古く見て縄文時代前期前半まで遡ることから、「C型」の陥し穴状土坑のうち県北地域のものは縄文時代前期初頭以前の構築と結論づける〔田村1987〕。青森県に所在する鶴窪遺跡〔福田1983〕からも野林遺跡の陥し穴状土坑に類似する、平面が円形の陥し穴状土坑が検出されている。鶴窪遺跡でも中揮浮石層に陥し穴状土坑が覆われており、縄文時代早期末～前期初頭と考えられている。新潟県三川村に所在する上ノ平遺跡A地点〔中澤1994〕では、岩手県や青森県、県内の事例から縄文

時代早期末～前期初頭と推測する。

野林遺跡にみられた形態の陥し穴状土坑の検出はそれほど多くはなく、時期決定の根拠も積極的なものがないのが現状と考える。野林遺跡でも年代を与える積極的な根拠はない。ただ県内外の事例より推測するほかない。鳥取県青木遺跡では縄文時代後～晩期という年代が与えられているが、野林遺跡D地点の包含層から縄文時代中期の土器片が出土していることから、縄文時代後～晩期に下る可能性は低いと考える。そこで、野林遺跡の陥し穴状土坑の構築時期も縄文時代早期末～前期初頭におさまるものと考えておく。

C 炭窯とそれに伴う土坑について

野林遺跡の多くの炭窯は隣接した土坑を伴っている。これらの土坑は、C地点ではいずれも炭窯から見て西又は北西寄りに、D地点では南寄りに作られている。これらの土坑は、炭窯に土を被せる際に、炭窯本体を掘り上げた土だけで足りない部分を補うために、土を採取した結果の産物と推定される。

C地点2・4・5号炭窯およびD地点1号炭窯はいずれも窯体壁に突出部を持つ。これらの炭窯の主軸方向はほぼ南北で統一される。また、C地点4・5号炭窯、D地点1号炭窯の窯底に見られる溝は、材から出る水分を排水する働きと、通気の働きを兼ねていたものと思われる。

構築時期は、いずれの炭窯、土坑からも遺物が検出されておらず不明である。しかし、C地点2・3・4・5号炭窯及びSK1・2・3・4・5・6、D地点1・3号炭窯及びSK1・2の覆土中には、褐色または灰白色を呈する火山灰が認められる。この火山灰は炭窯とそれに伴う土坑の覆土からのみ検出され、他の遺構覆土や包含層からは検出されない。早津賢二氏の所見によれば、中郷村郷清水遺跡や同村籠峰遺跡、新井市の杉明遺跡や萩清水遺跡では、平安時代の遺構覆土中、あるいは平安時代の遺物包含層直下から焼山第2期の噴火に際し噴出した火山灰（KG-c）が確認されている〔早津1994〕。このKG-cが焼山の東方に広範囲で確認されることから、野林遺跡の火山灰もKG-cである可能性が高い。また、同様の形態の炭窯が検出されている妙高高原町閑川谷内遺跡は、採取した炭化物を¹⁴C年代測定法にかけたところ10世紀頃という結果が出されている〔小池ほか1998〕。これらのことから、炭窯の操業及び廃棄は平安時代と位置づけておきたい。

野林遺跡で検出された炭窯は、いずれもほぼ平坦な地形に作られた小規模な平窯である。しかし、そこで生産されたであろう木炭の用途は明らかではない。全国各地のいわゆる製鉄関連遺跡では斜面上から大規模な炭窯が検出される例が多いが、これとは規模や構造が大きく異なる。1基毎に比較すると野林遺跡の炭窯で製鉄業の需要を満たすだけの大量の木炭が生産されていたとは考えにくい。しかし周辺の遺跡では野林遺跡と同形態の炭窯が数多く検出されている。前述の中郷村郷清水遺跡では昭和62年度の調査で14基〔県教委1987〕、63年度の調査で重複した10数基〔県教委1988a〕、平成3年度の調査で22基〔県教委1991〕の炭窯群が確認されている。また同村窪田B遺跡でも重複した5基の炭窯が検出されている〔県教委1988b〕。これらを踏まると、1基の生産効率の差し悪さは別として大量生産も決して不可能ではない。しかもある程度の期間繰り返し操業されていたことから、木炭を必要とする何らかの営みが行われていたことは間違いない。それが何を目的とした操業であったかは今後の各遺跡の報告と併せ、検討していく必要がある。

D 縄文時代前中期の土器について

ここでは、石川県能登町に所在する真脇遺跡での縄年をもとに考察する。真脇遺跡「第5群土器」は福

浦上層式に比定されている〔小島1986a〕。また「第6群土器」をもとに真勝式が設定された〔小島1986b〕。野林遺跡A地点出土の1の土器は、文様構成から考えて真勝遺跡の「第5群土器」(福浦上層式)と併行関係にあると思われる。ただ、この土器には「第5群土器」や他遺跡の福浦上層式に見られる鋸歯状印刻文がない。さらに「第5群土器」から「第6群土器」へという編年の中で考えた場合、この土器には「第5群土器」に見られる半隆起線の渦文が省略されている。このことから、この土器は「第5群土器」でもやや新しい段階、すなわち福浦上層式でもやや新しい段階と考えられる。また真勝式が口縁部が内湾気味なのに比べ、この土器の口縁が外反すること、胴部中央でのくびれが認めにくことから真勝式までは下らないと思われ、この土器は、福浦上層式のやや新しい段階に相当すると考えられる。

9~29は結節浮線文が施されており、関東から長野方面に分布する十三菩提式に比定できる。野林遺跡の位置する頸南地域は長野県地域と関連がある。十三菩提式が東北地方や北陸、長野の影響を受けて成立しており、また神奈川県横浜市に所在する華藏台南遺跡〔石井1993〕の「第5群」土器は十三菩提式~諸磯C式に比定されている。その中に爪形文を施す十三菩提式の破片があり、野林遺跡出土の土器と類似する。「第5群」土器は「かなりの類型を含み、かつ、かなりの時間差をも含む」と考察されている。同じ横浜市の細田遺跡〔白石1981〕の「第十群土器」も十三菩提式に比定されているが、それよりも華藏台南遺跡「第5群」土器はやや新しい。そこで野林遺跡の結節浮線文を施す土器は十三菩提式の中でもやや新しい段階と考えられる。

第4表 野林遺跡遺物観察表

土器観察表

| 番号 | 出土位置・層位 | 器種 | 時期・系統 | 部位 | 色調(註1) | 胎土 | 焼成 | 文様 | 法量 |
|----|-------------|----|-------|----|------------------|-----------|----------|-------------------|---------------------|
| 1 | A 地点 6E-14 | 陶鉢 | 商周末 | 北壁 | 口縁 褐灰色 | 砂礫・石英 | 普通 | 半縦起線文 押住帶 素状縞文 | 口径 27.6 |
| 2 | A 地点 7G-21Ⅱ | 陶鉢 | 商周末 | 北壁 | 口縁 浅黃色/黃褐色 | 砂粒多 雲母 | 白色粒子 | 普通 | 半縱起縞文 |
| 3 | A 地点 6G-17Ⅱ | 陶鉢 | 商周末 | 北壁 | 口縁 浅黃褐色 | 砂粒多 雲母 | 白色粒子 | 普通 | 半縱起縞文 |
| 4 | A 地点 6G-23 | 陶鉢 | 商周末 | 北壁 | にぶい黃褐色/淺黃色 | 砂粒多 雲母 | 白色粒子 | 普通 | 半縱起縞文 |
| 5 | A 地点 6G-24Ⅱ | 陶鉢 | 商周末 | 北壁 | 浅黃褐色/淺黃色 | 砂粒多 雲母 | 白色粒子 | 普通 | 細密的押住帶 半縦起縞文 |
| 6 | A 地点 6E-4 | 陶鉢 | 商周末 | 北壁 | 底 灰白色 | 砂礫多 | 雲母 | 良好 | RL 半縱起縞文 |
| 7 | A 地点 7G-21Ⅱ | 陶鉢 | 商周末 | 北壁 | 底 褐色/淺黃色 | 砂礫多 | 雲母 | 良好 | RL 半縱起縞文 |
| 8 | A 地点 6G-24 | 陶鉢 | 商周末 | 北壁 | 底 浅黃色 | 砂礫多 | 白色粒子 | 良好 | RL 半縦起縞文 |
| 9 | A 地点 6G-25Ⅱ | 陶鉢 | 商周末 | 南東 | 口縁 黃褐色 | 砂粒多 | 石英 | 普通 | 細密浮継文 |
| 10 | A 地点 6E-4Ⅱ | 陶鉢 | 商周末 | 南東 | 口縁 明褐色 | 砂粒多 | 石英 | 普通 | 細密浮継文 |
| 11 | A 地点 6E-5Ⅱ | 陶鉢 | 商周末 | 南東 | 口縁 黃褐色/明褐色 | 砂粒多 | 石英 | 普通 | 細密浮継文 |
| 12 | A 地点 6E-5Ⅱ | 陶鉢 | 商周末 | 南東 | 口縁 明褐色 | 砂粒多 | 石英 | 普通 | 細密浮継文 |
| 13 | A 地点 6G-23 | 陶鉢 | 商周末 | 南東 | 底 褐色 | 砂礫 | 石英 雲母 | 普通 | RL 半縦浮継文 |
| 14 | A 地点 6E-5Ⅱ | 陶鉢 | 商周末 | 南東 | 底 明褐色 | 砂粒 | 石英 | 普通 | RL 半縦浮継文 |
| 15 | A 地点 11A-T | 陶鉢 | 商周末 | 南東 | 底 明褐色/黃褐色 | 砂礫 | 石英 | 普通 | RL 半縦浮継文 |
| 16 | A 地点 11A-T | 陶鉢 | 商周末 | 南東 | 底 褐色 | 砂粒多 | 石英 | 普通 | 半縦浮継文 |
| 17 | A 地点 6H-5Ⅱ | 陶鉢 | 商周末 | 南東 | 底 明褐色/黃褐色 | 砂粒多 | 石英 | 普通 | 半縦浮継文 |
| 18 | A 地点 6H-5Ⅱ | 陶鉢 | 商周末 | 南東 | 底 明褐色 | 砂粒 | 石英 | 普通 | 半縦浮継文 |
| 19 | A 地点 6H-4 | 陶鉢 | 商周末 | 南東 | 底 赤褐色/褐灰色 | 砂礫 | 石英 | 普通 | 半縦浮継文 |
| 20 | A 地点 6G-24 | 陶鉢 | 商周末 | 南東 | 底 褐色/褐灰色 | 砂粒 | 石英 雲母 | 良好 | RL 半縦浮継文 |
| 21 | A 地点 6G-24 | 陶鉢 | 商周末 | 南東 | 口縁 明黃褐色 | 砂礫 | 石英 | 良好 | RL 半縦浮継文 |
| 22 | A 地点 6G-24Ⅱ | 陶鉢 | 商周末 | 南東 | 口縁 明黃褐色 | 砂礫 | 石英 | 良好 | RL 半縦浮継文 |
| 23 | A 地点 6G-23 | 陶鉢 | 商周末 | 南東 | にぶい褐色/暗褐色 | 砂礫 | 石英 | 普通 | 半縦浮継文 |
| 24 | A 地点 6G-24 | 陶鉢 | 商周末 | 南東 | 底 褐色/暗褐色 | 砂粒 | 石英 雲母 | 良好 | 半縦浮継文 |
| 25 | A 地点 6H-4Ⅱ | 陶鉢 | 商周末 | 南東 | 底 にぶい褐色/明黃褐色 | 砂礫 | 石英 | 良好 | 半縦浮継文 |
| 26 | A 地点 6G-14Ⅱ | 陶鉢 | 商周末 | 南東 | 口縁 明黃褐色/褐色 | 砂礫 | 石英 | 良好 | 半縦浮継文 |
| 27 | A 地点 6G-14Ⅱ | 陶鉢 | 商周末 | 南東 | 底 明褐色/にぶい褐色 | 砂礫 | 白色粒子 | 良好 | 半縦浮継文 |
| 28 | A 地点 6G-4Ⅱ | 陶鉢 | 商周末 | 南東 | 底 褐色/暗褐色 | 砂礫 | 石英 雲母 | 良好 | 半縦浮継文 |
| 29 | A 地点 7H-5Ⅱ | 陶鉢 | 商周末 | 南東 | 底 褐色 | 砂礫 | 石英 雲母 | 良好 | 半縦浮継文 |
| 30 | A 地点 7H-11 | 陶鉢 | 商周末 | 中部 | 底 黃褐色/褐色 | 砂礫 | | 良好 | 押住帶 半縦起縞文 |
| 31 | A 地点 7G-21Ⅱ | 陶鉢 | 商周末 | 中部 | 底 明黃褐色/にぶい黃褐色 | 砂礫 | | 良好 | 押住帶 半縦起縞文 |
| 32 | A 地点 6G-12Ⅱ | 陶鉢 | 商周末 | 中部 | 底 明黃褐色/にぶい黃褐色 | 砂粒 | 石英 | 良好 | 押住帶 半縦起縞文 |
| 33 | A 地点 6H-5Ⅱ | 陶鉢 | 商周末 | 中部 | 底 明褐色 | 砂礫 | | 普通 | 押住帶 |
| 34 | A 地点 6H-5Ⅱ | 陶鉢 | 商周末 | 中部 | 底 明黃褐色 | 砂粒 | | 普通 | 半縦起縞文 |
| 35 | A 地点 6H-5Ⅱ | 陶鉢 | 商周末 | 中部 | 底 明黃褐色/淺黃色 | 砂礫 | | 普通 | 半縦起縞文 |
| 36 | A 地点 7H-1 | 陶鉢 | 商周末 | 中部 | 底 明褐色/褐色 | 砂礫 | | 普通 | 半縦起縞文 |
| 37 | A 地点 6E-19 | 陶鉢 | 中筋後幅 | 底 | 褐色 | 砂粒 | 石英 雲母 | 良好 | 鉛子文 壓帶 |
| 38 | A 地点 4F-19 | 陶鉢 | 不明 | 底 | 褐色/赤褐色 | 砂粒 | 石英 雲母 | 良好 | LR |
| 39 | C 地点 8F-II | 陶鉢 | 早中期 | 底 | 明黃褐色 | 砂礫 | 石英 | 良好 | 鉛丹坪型文 |
| 40 | C 地点 6G | 陶鉢 | 商周末 | 諸邊 | 底 灰白色 | 砂粒 | | 良好 | 平行沈継文 |
| 41 | C 地点 6G | 陶鉢 | 商周末 | 諸邊 | 底 灰白色 | 砂粒 | | 良好 | 平行沈継文 |
| 42 | C 地点 9D | 陶鉢 | 中期後期 | 底 | にぶい褐色/褐色 | 砂礫 | 雲母 | 普通 | LR 沈継文 |
| 43 | C 地点 7H-14 | 陶鉢 | 中筋後幅 | 底 | にぶい褐色/暗褐色 | 砂礫 | | 普通 | 沈継文 |
| 44 | C 地点 10G-25 | 甕 | 共生後期 | 底部 | 赤褐色/赤褐色 | 白色粒子 | 石英 | 普通 | 鉛子文 |
| 45 | C 地点 11G-21 | 甕 | 共生後期 | 底部 | 赤褐色/赤褐色 | 白色粒子 | 石英 | 普通 | 鉛子文 |
| 46 | C 地点 10G-1 | 甕 | 古墳後期 | 口縁 | 赤褐色 | 白色粒子 | 石英 | 普通 | 口徑 11.6 |
| 47 | C 地点 8E | 甕 | 中期後幅 | 底 | 赤褐色/赤褐色 | 白色粒子 | 石英 | 良好 | |
| 50 | D 地点 3C-18 | 陶鉢 | 中筋後幅 | 口縁 | 褐褐色 | 白色粒子 | 石英 | 良好 | 半縦起縞文 三角形印継文 黑彩文 |
| 52 | C 地点 表2 | 甕 | 古墳後期 | 底 | 青灰色 | 砂礫 | | 良好 | 口径 13.2 |

註1) 色調の外側内面とも同じものは色調を重複して記載しない。色調の2つものは外観、内面の順に記載してある。

石器観察表

| 番号 | 出土地点 | 器種 | 石材 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) |
|----|-----------|-------|------|--------|-------|--------|-------|
| 48 | C 地点 8FⅢ | 不定形石器 | 珪質頁岩 | 4.2 | 1.6 | 0.5 | 4.31 |
| 49 | C 地点 9EⅢ | 磨 石類 | 安山岩 | 10 | 51.5 | 35 | 256.2 |
| 50 | D 地点 2E-1 | 石 錐 | チャート | 28.5 | 16.5 | 4.5 | 1.62 |

要 約

上中島遺跡

1. 上中島遺跡は、新潟県中頸城郡中郷村大字二本木字上中島1708他に所在する。遺跡は妙高山北東山麓の標高約245mの火碎流堆積台地上に位置する。
2. 発掘調査は、上信越自動車道建設に伴い、一次調査は平成6年6月に、二次調査は平成7年4月～8月に実施した。調査面積は、7,800m²である。
3. 調査の結果、縄文時代と弥生時代の遺物、平安時代以降の遺構が検出された。
4. 縄文時代の遺物は浅箱4箱である。土器の時期は中期前葉のものが主体を占め、早期と前期、晚期のものが少量出土した。石器は出土点数は少ないが、器種は石礫、磨製石斧、磨石類、不定形石器などが認められた。
5. 弥生時代の遺物は、調査区西側で中期後半の土器がまとまって出土した。土器は、中部高地系の栗林式の土器と考えられる。また、表探遺物であるが、当時代に属すると考えられる磨製石斧が認められた。
6. 平安時代以降の遺構は、炭窯2基とこれに関係する土坑が3基検出された。土坑は、炭窯の近くに位置し、窯を覆う土を採掘したものと考えられる。炭窯は、形状が長方形に近く、両端が突出し底面に排水溝を備える。

野林遺跡

1. 野林遺跡は、新潟県中頸城郡中郷村大字藤沢字野林1142-1他に所在する。遺跡は渋江川右岸の標高235～258mの火碎流堆積台地上に位置する。
2. 発掘調査は、上信越自動車道建設に伴い、一次調査は対象面積が広いことと用地買収の進展などにより平成6年から平成7年に5回に分けて行われた。この結果により、調査区はA～D地点に分けられ、二次調査は平成7・8年の2か年にわたりて実施した。調査面積は、A地点が2,000m²、B地点が600m²、C地点が5,600m²、D地点が1,570m²で、合わせて9,770m²である。
3. 調査の結果、A地点、C地点、D地点で縄文時代の遺物が出土した。C地点とD地点は、縄文時代の遺構と平安時代に属すると推定される炭窯とこれに関係する土坑が検出された。B地点は、遺構、遺物とも検出されなかった。
4. A地点は、遺構は検出されなかつたが、縄文時代前期末の土器が出土した。土器は、北陸の福浦上層Ⅱ式や関東の十三善提系、中部高地系のものが認められ、遺跡が立地する場所が各文化圏とぶつかり合う地域であることを反映している。
5. C地点は、縄文時代のフラスコ状土坑1基と平安時代頃と推定される炭窯が5基、これらに関係する土坑が6基、時期不明の道路遺構が検出された。道路遺構は、畝状の痕跡が残り調査区の緩斜面上を東西に横断する。縄文時代の遺物は、縄文時代早期の押型文、前期末の諸磧C式、中期後葉の加曾利E式併行の土器と磨石類、不定形石器などの石器が出土した。他に、弥生時代後期の箱清水式の土器や古墳時代後期の土師器、中世の珠洲焼の土器片が認められた。
6. D地点では、縄文時代の陥穴状土坑が16基、平安時代頃と推定される炭窯が3基、これに関係する土坑が3基、性格不明のビット3基が検出された。陥穴状土坑の配列は、2群に大別され、渋江川で浸食された断崖を背景にした狩獵が想定できる。

引用・参考文献

- 荒川隆史 1995 「和泉A遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成6年度 (財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
飯坂盛泰 1997 「八斗舞原遺跡・野林遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成8年度 (財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
飯田充晴 1993 「道路築造方法について—埼玉県所沢市東の上遺跡の道路跡を中心にして—」『古代交通研究』第2号 古代交通研究会
石井 寛 1993 「港北ニアタウン地域内埋蔵文化財調査報告書X N 牛ヶ谷遺跡・草薙台南遺跡」(財) 横浜市ふるさと歴史財団
石岡憲雄 1991 「Tピットについて(再論)」『埼玉考古学論集—設立10周年記念論文集—』
石川智記ほか 1998 「上信越自動車道関係発掘調査報告書III 旧得寺跡」新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
今村啓爾 1983 「陰穴(おとし穴)」『繩文文化の研究 2生業』雄山閣
上教領久 1989 「第2章 尼寺跡の調査 4. 第93次調査」『武藏国分寺跡発掘調査概報X N—昭和52~57年度尼寺跡確認調査会』
上田典男 1998 「上信越自動車道埋蔵文化財調査報告書4—長野市辺その2— 松原遺跡 繩文時代」(財) 長野県埋蔵文化財センターほか
大川 清・鈴木公雄・工業善通 1996 『日本土器辞典』雄山閣
岡本都栄 1982 「奥の城(西岸)遺跡第二次発掘調査概報」中郷村教育委員会
岡本 男ほか 1967 「大貝遺跡の調査」立教大学考古学研究会
金子直行 1996 「N: 1 繩文時代前期の土器群」『八木上/八木下/八木前/上高瀬北/森坂北/森坂』(財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
菊池 実 1987 「繩文時代の階層調査法と派生する諸問題—大原II遺跡・村主遺跡検出の階層分析から—」『研究紀要』4 (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団
小池義人ほか 1996 「上信越自動車道関係発掘調査報告書I 横引遺跡・龍峰遺跡・柳平遺跡」新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
小池義人ほか 1998 「上信越自動車道関係発掘調査報告書IV 関川谷内遺跡I」新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
小島俊彦 1986a 「第6章第1節5第5群土器 福浦上層式期」「真駒遺跡—農村基盤総合整備事業能都東地区真駒工区に係わる発掘調査報告書—」能都町教育委員会・真駒遺跡発掘調査団
小島俊彦 1986b 「第6章第1節6第6群土器 真駒式期」「真駒遺跡—農村基盤総合整備事業能都東地区真駒工区に係わる発掘調査報告書—」能都町教育委員会・真駒遺跡発掘調査団
小島俊彦 1989 「十三苦提土器様式」「繩文土器大観」1 草創期 早期 初期 小学館
小島正巳 1991 「妙高山麓採集の押型土器—松ヶ峯N o 202・208遺跡ほか(17遺跡)ー」『新潟県考古学談話会』第7号 新潟考古学談話会
小島正巳・早津賢二 1995 「妙高山麓松原B遺跡における加曾利B式および新地式併行土器」『新潟考古』第6号 新潟県考古学会
越坂一也 1983 「北陸における繩文時代前期中・後葉土器の編年について」『北陸の考古学』石川考古学研究会
近藤尚義ほか 1992 「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書I 下茂内遺跡」日本道路公团東京第二建設局野界教育委員会(財) 長野県埋蔵文化財センター
佐藤俊之 1990 「第3章3 A層に穴状土坑」「関越自動車道関係発掘調査報告書 岩原I 遺跡・上林塚遺跡」新潟県教育委員会
佐藤雅一ほか 1987 「湯沢町埋蔵文化財報告第7輯 岩原II 遺跡」湯沢町教育委員会
中澤 敏 1994 「磐越自動車道関係発掘調査報告書 上ノ平遺跡A地点」新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
白石浩之ほか 1981 「神奈川県埋蔵文化財調査報告23 細田遺跡」神奈川県教育委員会
鈴木寅成ほか 1994 「北陸自動車道上越市日木・木本地区発掘調査報告書IV 一之口遺跡東地区」新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査報告書
舛木寅成 1996 「第N章2 C (2) b 出土石器の分類」「関越自動車道掘削之内インターチェンジ関連発掘調査報告書 清水上遺跡II」新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
瀬川司男 1981 「陥り穴状遺構について」『紀要』I (財) 岩手県埋蔵文化財センター
高橋 保 1989 「県内における繩文中期前半の関東・信州系土器」『新潟考古学談話会会報』第4号 新潟考古学談話会
高橋 保ほか 1992 「関越自動車道関係発掘調査報告書 五丁歩遺跡・十二木遺跡」新潟県教育委員会
高橋康男 1985 「千葉県市原市・草刈遺跡」市原市街跡課・財團法人市原市原市文化財センター
武田孝昭 1996 「小野沢西遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成7年度 (財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
田村壮一 1987 「陥り穴状遺構の形態と時期について—岩手県北地方を中心として—」『紀要』VI (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

- 親跡 留 1988 『國錄 南田遺跡』 中郷村教育委員会
- 親跡 留 1990 『國錄 小丸山遺跡』 中郷村教育委員会
- 親跡 留 1992 『國錄 葵ノ木遺跡』 妙高村教育委員会
- 親跡 留 1992 『上ツ平遺跡 発掘調査概況報告書』 妙高村教育委員会
- 立木（土橋）由理子・寺崎裕助ほか 1996 『一般国道18号妙高野尻バイパス関係発掘調査報告書Ⅰ 大畠遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 立木（土橋）由理子・寺崎裕助 1997 『上新バイパス関係発掘調査報告書Ⅲ 萩清水・三本木新田B遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 立木（土橋）由理子・寺崎裕助ほか 1997 『一般国道18号妙高野尻バイパス関係発掘調査報告書Ⅱ 中ノ沢遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 立木（土橋）由理子 1999 「第N章 3.A (3) 道路状遺構の構成時期」『国道18号線上新バイパス関係発掘調査報告書Ⅳ 西福田新田遺跡・郷清水遺跡・上中島遺跡・上瀧ノ沢遺跡・中の原D遺跡・窪細B遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 寺村光晴ほか 1960 『鍋屋町遺跡』 柿崎町教育委員会
- 土井永好 1986 『橋本遺跡Ⅷ 歴史時代編—一般国道16号(八王子バイパス)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』 相模原市橋本遺跡調査会
- 中川成夫ほか 1967 「幕末遺跡『頃南』」 新潟県教育委員会・頃南地区総合学術調査会
- 中郷村教育委員会 1996 『越後湯舟跡発掘調査報告書Ⅰ 造橋稿』
- 中沢 恒ほか 1986 『大原Ⅱ遺跡 村主遺跡一般調査17号線(月夜野バイパス)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』 群馬県教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 中島庄一 1994 『第3章栗林跡第4章弥生時代3中期後半の遺物』『県道中野豊野線バイパス志賀中野有料道路埋蔵文化財発掘調査報告書—長野県中野市内—栗林遺跡・七瀬遺跡』(財)長野県埋蔵文化財センターほか
- 長野県 1982 『長野県史 考古資料編』
- 中村良一ほか 1988 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第121集 大久保・西久保遺跡発掘調査報告書』(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 新潟県 1983 『新潟県史』 資料編1 原始・古代一考古編
- 新潟県教育委員会 1987 「3. 郡清水遺跡」「昭和62年度上新バイパス遺跡発掘調査の概要」
- 新潟県教育委員会 1988 a 「2. 郡清水遺跡」「昭和63年度上新バイパス遺跡発掘調査の概要」
- 新潟県教育委員会 1988 b 「3. 露煙B遺跡」「昭和65年度上新バイパス遺跡発掘調査の概要」
- 新潟県教育委員会 1991 「郷清水遺跡第三次発掘調査の概要」
- 橋本 正 1972 『富山県埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』 富山県教育委員会
- 橋本 正 1974 『高速自動車国道北陸自動車道関係埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 小杉町上野遺跡—記念写真編—』 富山県教育委員会
- 秦 繁治ほか 1986 『板倉町埋蔵文化財報告第1 峰山B遺跡』 板倉町教育委員会
- 早川 泉 1991 「古代道路遺構に我された圧痕—波板状凹凸面の性格について—」『東京考古』9 東京考古談話会
- 早津賢治 1985 『妙高山群—その地質と活動史—』 第一法規
- 早津賢治 1994 「新潟焼山火山の活動と年代—歴史時代のマグマ噴火を中心として—」『地学雑誌』 Vol. 103 No.2 (社) 東京地学協会
- 福田友之 1983 「第5章第1節3.おとし穴」『青森県埋蔵文化財調査報告書第76集 鶴庭遺跡発掘調査報告書』 青森県教育委員会
- 船越元四郎ほか 1977 『青木遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 鳥取県教育委員会
- 船越元四郎ほか 1978 『妙木遺跡発掘調査報告書Ⅲ』 鳥取県教育委員会
- 細田 肇 1991 『在家』 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 巻 町 1993 『巻町史』 資料編1 考古
- 増子正三・田中耕作 1989 『新潟県4 中期後葉の土器群』第3回 繩文中期の諸問題』 繩文セミナーの会
- 三ノ井朋子ほか 1997 『上信越自動車道関係発掘調査報告書Ⅱ 大洞原C遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 室岡 博・早津賢治 1986 『中古遺跡』 妙高村教育委員会
- 室岡 博 1986 『激尻遺跡(D地区)』 妙高村教育委員会
- 室岡 博 1994 『道添遺跡』 妙高村教育委員会
- 柳井 謙ほか 1975 『富山県立山町吉経遺跡 第4次緊急発掘調査概報』 富山県教育委員会
- 柳沢清一 1990 『大木9-10式土器論(上)』『先史考古学研究』3 阿佐ヶ谷先史学研究会
- 柳沢清一 1993 『大木9-10式土器論(下)』『先史考古学研究』4 阿佐ヶ谷先史学研究会
- 湯尻修平ほか 1986 『鹿島町憩前C遺跡調査報告(Ⅱ・Ⅲ) 国道159号線改築事業に係る石川県鹿島郡鹿島町憩前C遺跡第2・3次緊急発掘調査報告』 石川県埋蔵文化財センター
- 横浜市歴史博物館・(財)横浜市ふるさと歴史財团埋蔵文化財センター 1996 『横浜市歴史博物館企画展幻の繩文土器の時代—都筑区桜並遺跡の発掘調査の成果—』
- 吉田 努ほか 1981 『岩手県文化財調査報告書第60集 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書X I (水沢地区)』 岩手県教育委員会・日本道路公団
- 和田 博ほか 1984 『長野市の埋蔵文化財第15集 箱清水遺跡(2)』 長野市教育委員会・長野市遺跡調査会

図 版

凡 例

1. 遺構・遺物実測図の縮尺は、各図版に示した。
2. 遺構・遺物実測図においてスクリーントーンで示したものは以下の通りである。



炭窯の木炭層



石器の磨痕

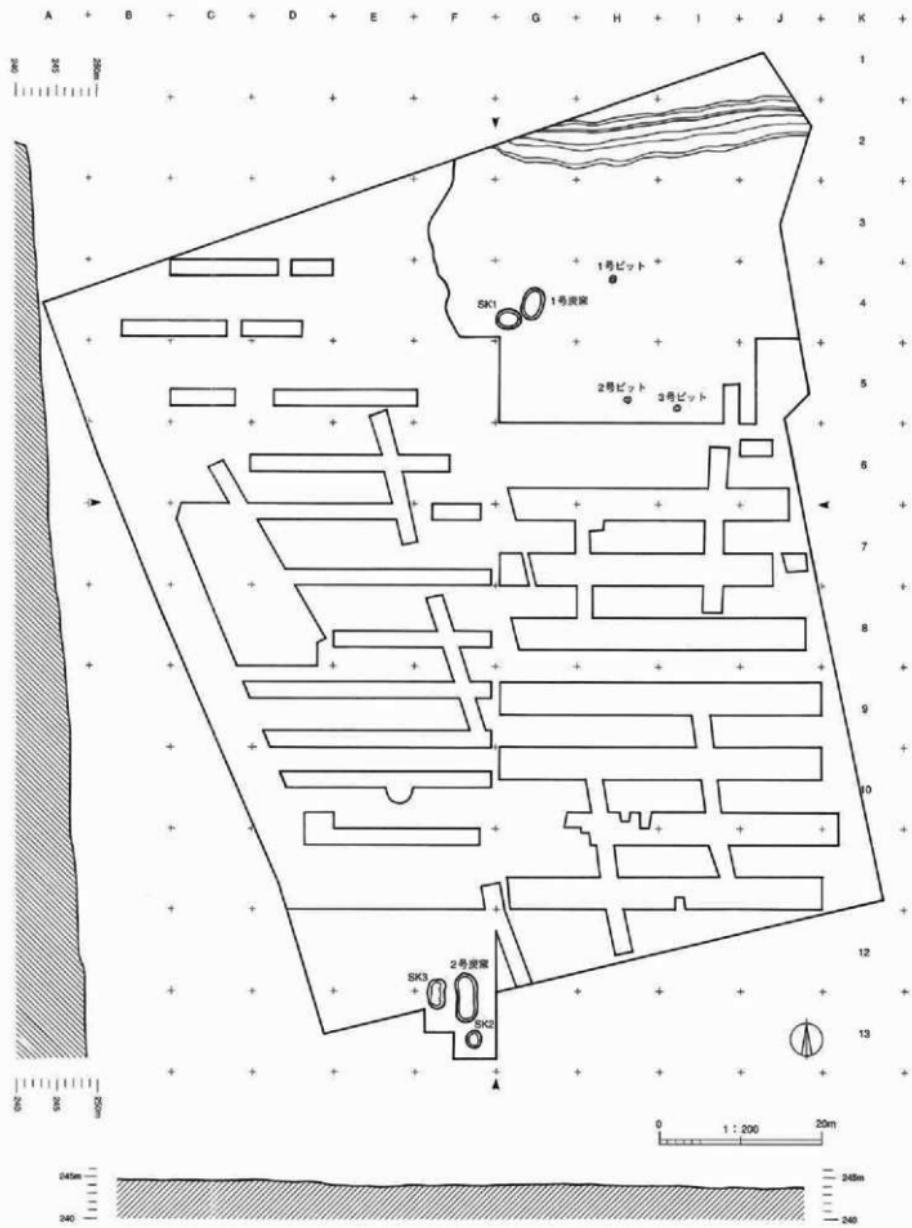


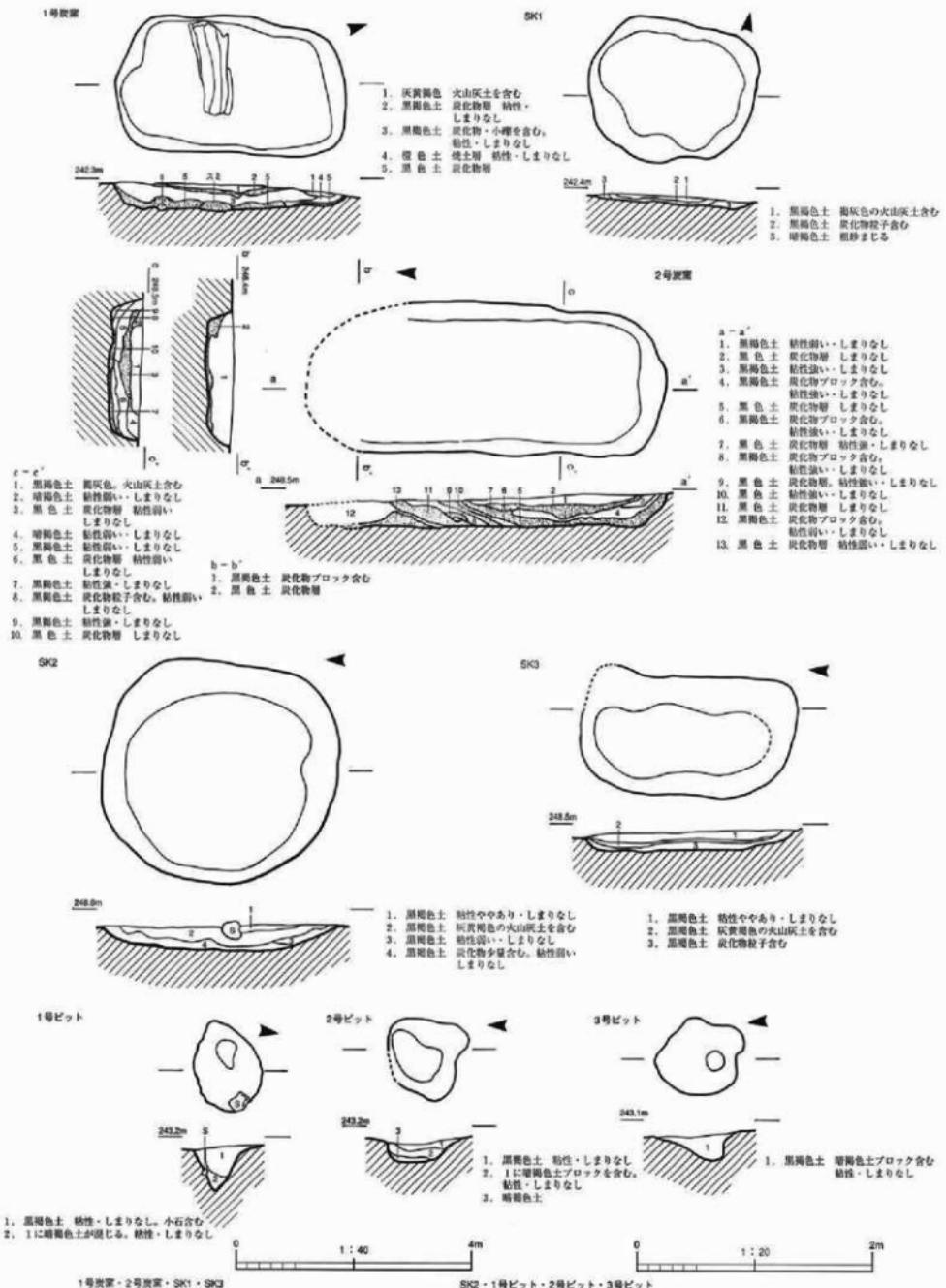
石器の変色部分

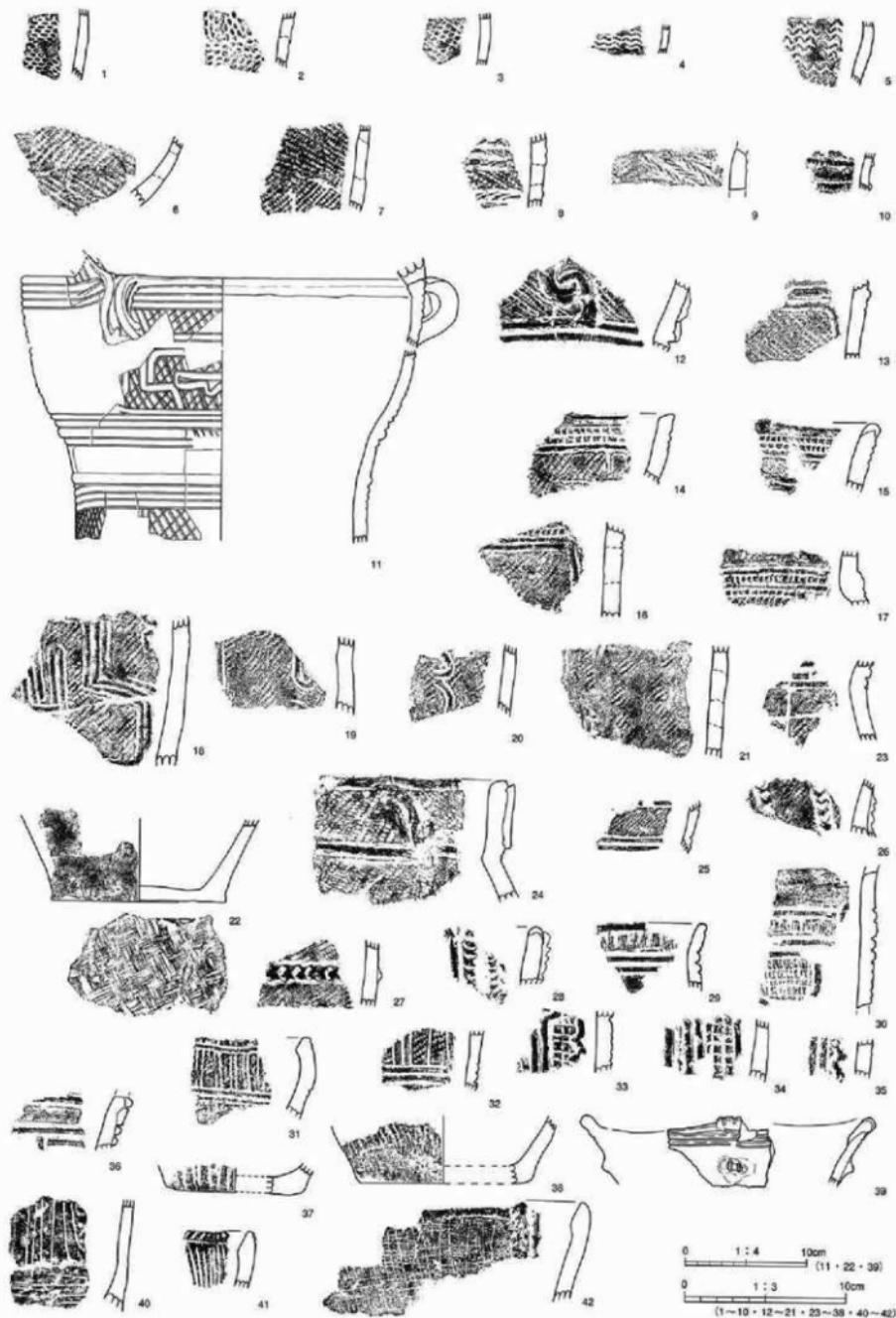


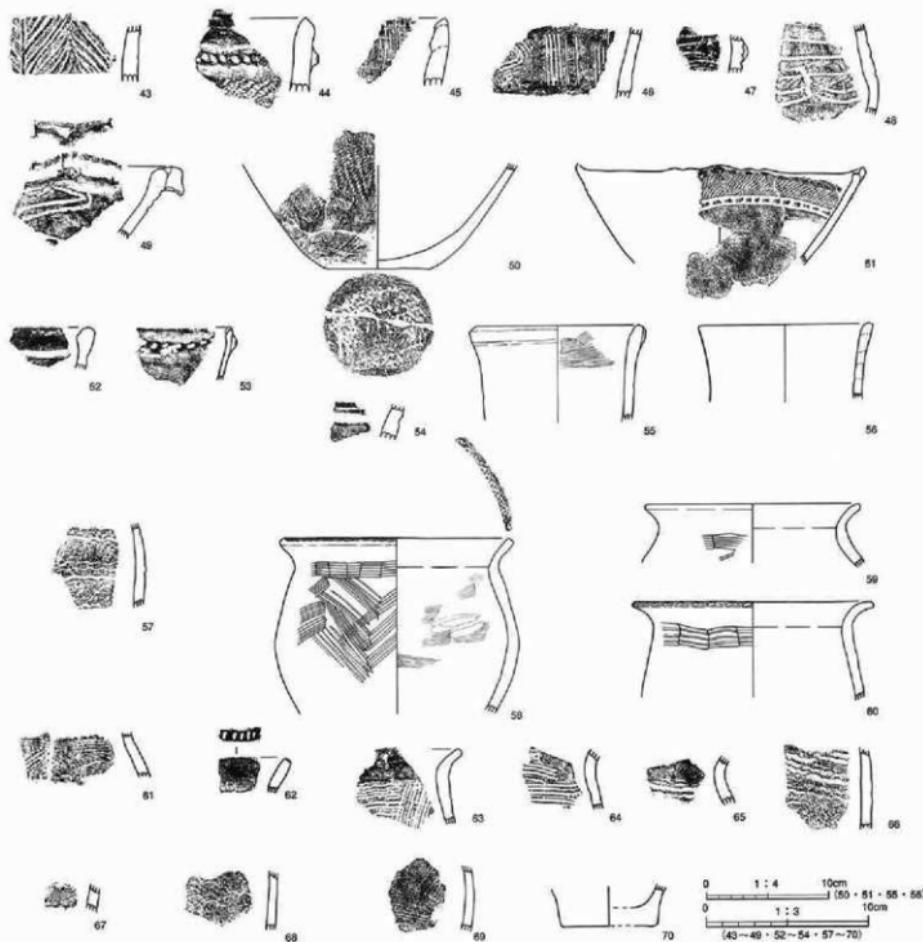
土器の赤彩部分

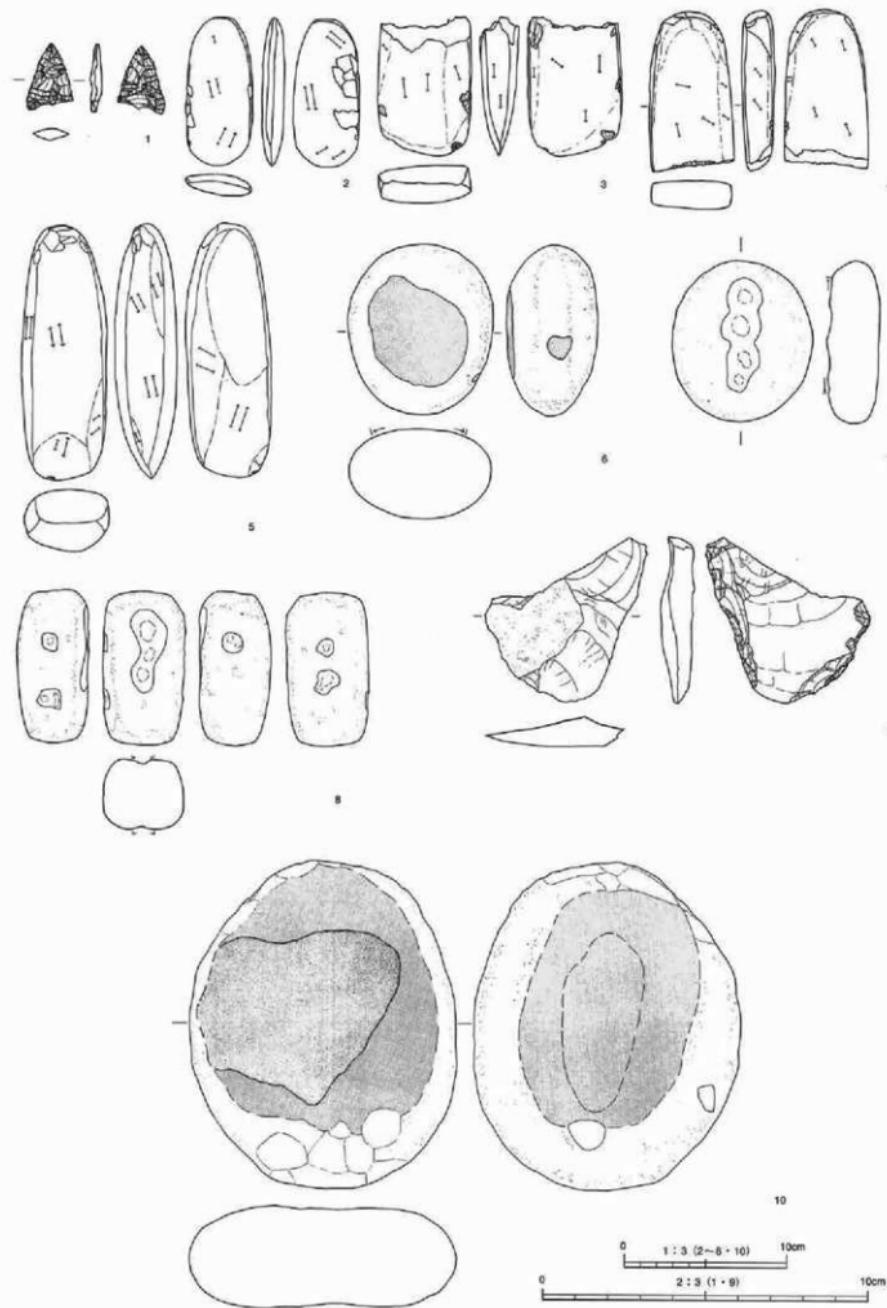
3. 土器で断面が黒塗りになっているものは須恵器・中世陶器である。

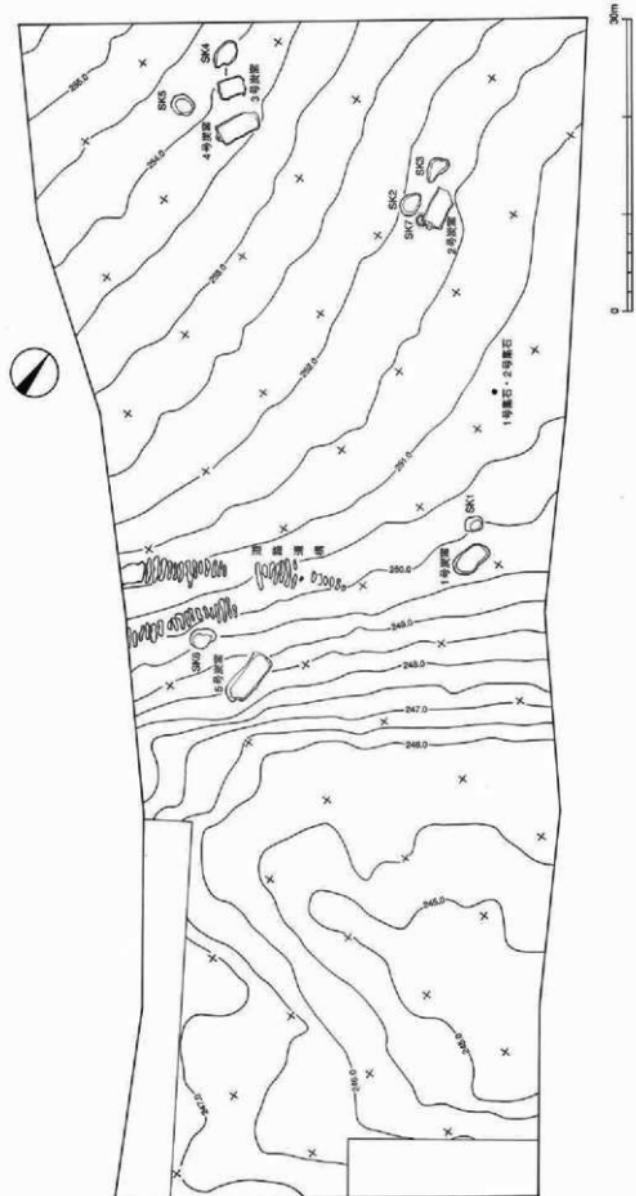


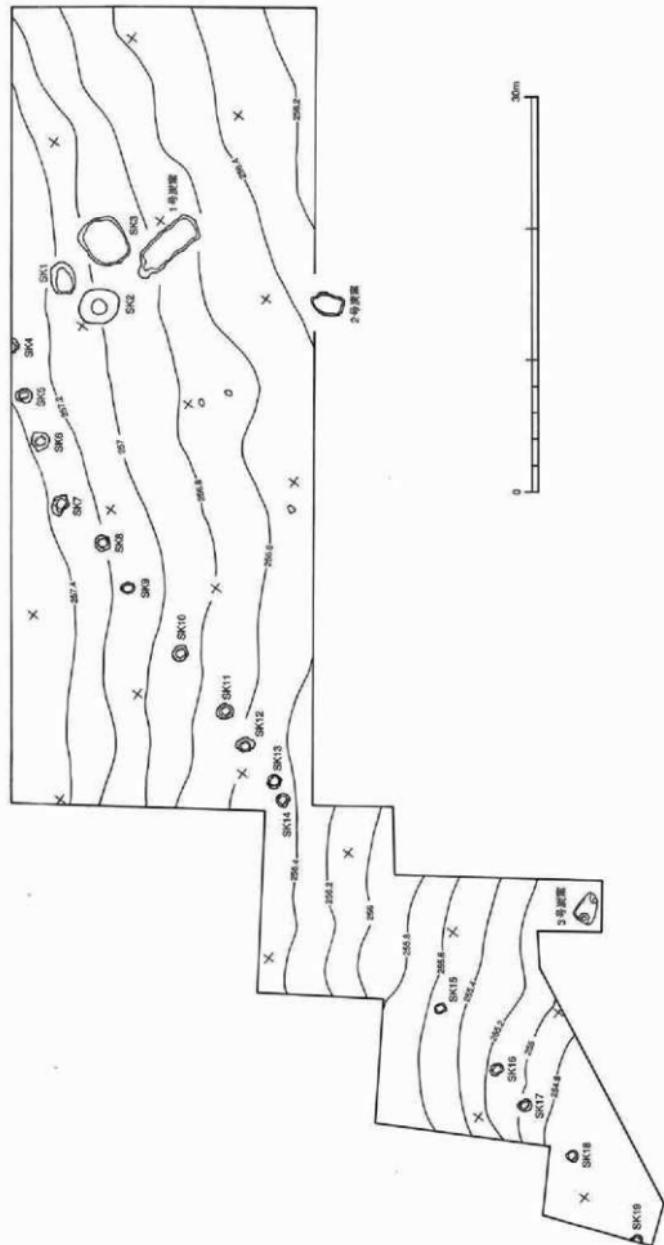


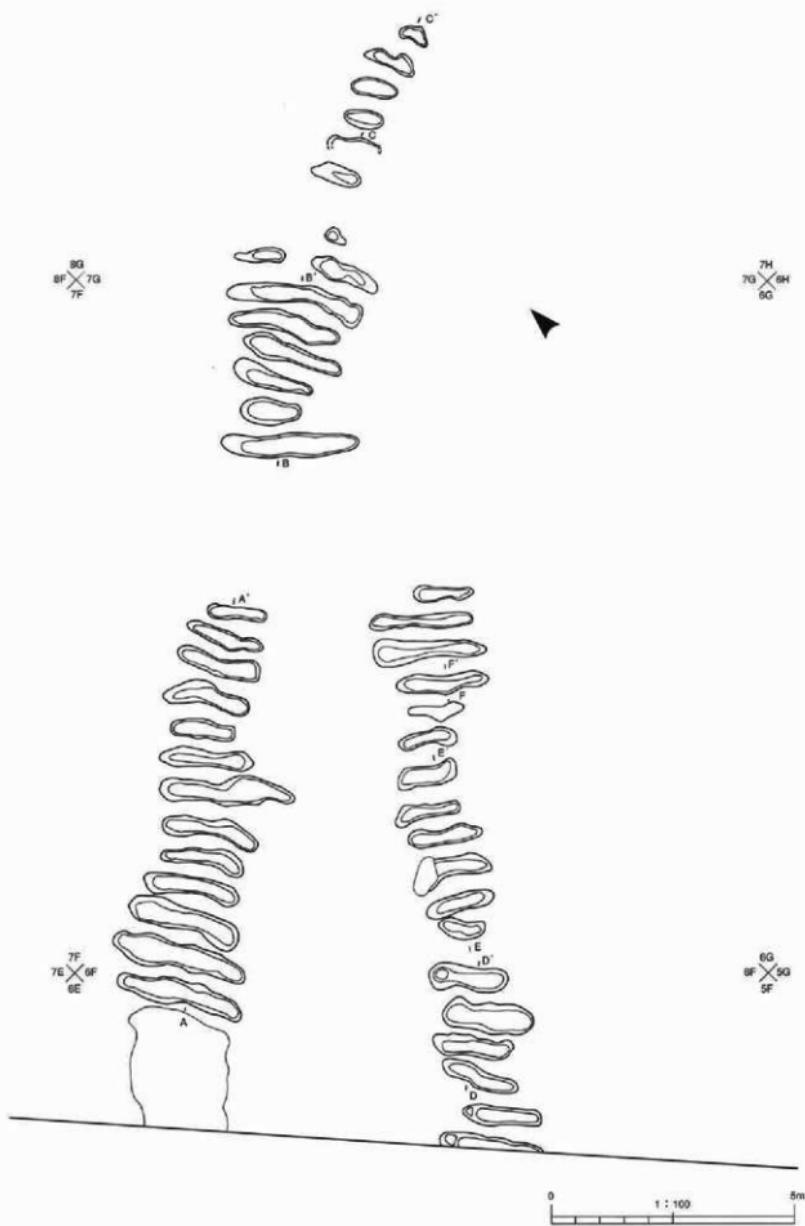


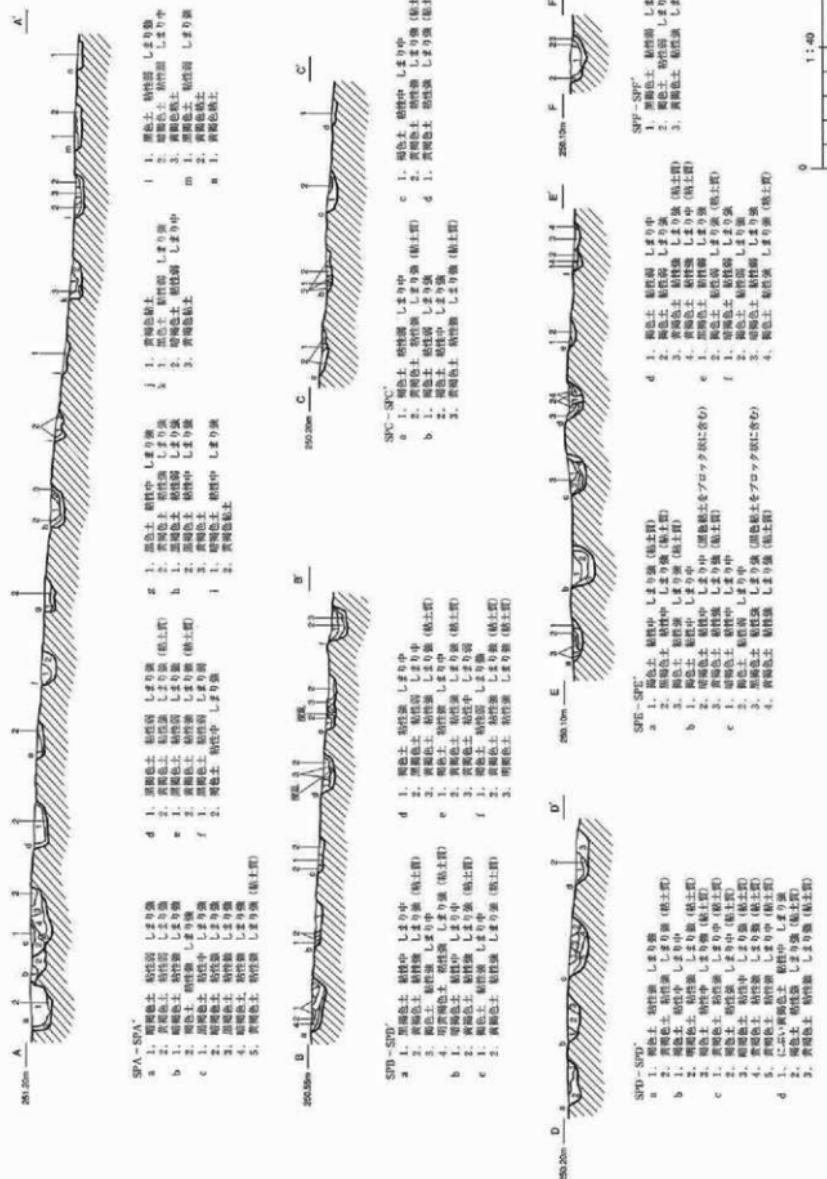




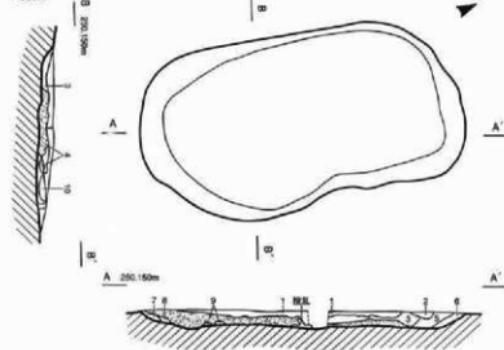






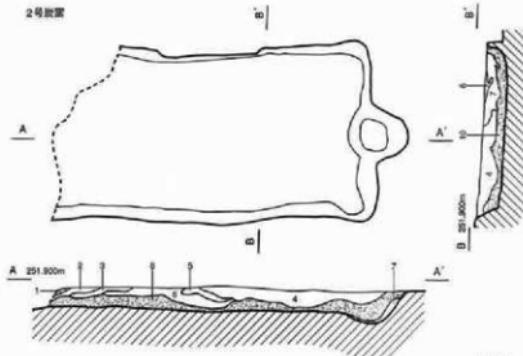


1号窓室



1. 黒褐色土 しまりあり 黏性あり 炭化物を少量含む
2. 褐褐色土 しまりあり 黏性あり 炭化物焼土粒をごく微量含む
3. 黑褐色土 しまりあり 黏性あり 炭化物(2~5cm角)を含む
4. 黑褐色土 しまりあり 黏性あり 炭化物を非常に多く含む
5. 褐褐色土 しまりあり 黏性あり 炭化物を少含む
6. 黑褐色土 しまりあり 黏性あり
7. 褐褐色土 しまりなし 黏性ややあり 炭化物をごく微量含む
8. 黑褐色土 しまりなし 黏性あり 炭化物焼土粒を少含む
9. 黑褐色土 しまりなし 黏性ややあり
10. 深褐色土 しまりあり 黏性あり 炭化物焼土粒をごく微量含む
11. 黑褐色土 しまりなし 黏性あり 炭化物をおごく微量含む

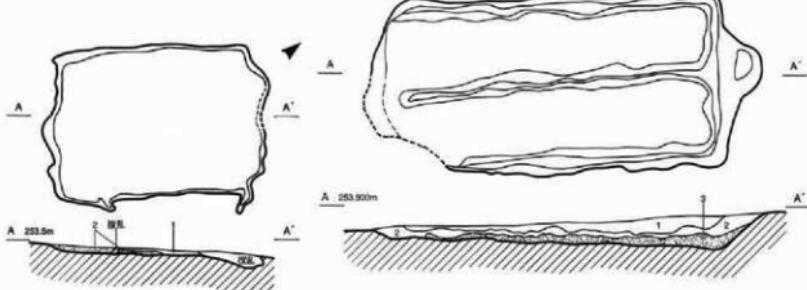
2号窓室



1. 黒色土 しまりあり 黏性あり 炭化粒 褐色土粒を含む
2. 黒色土 しまりあり 無灰大山灰を含む
3. 黑色土 しまりあり 黏性あり 炭化物(2~3cm角)を多く含む
4. 黑色土 しまりあり 無灰大山灰 黑色土 無灰物の混合土
5. 黑色土 しまりあり 黏性あり 無灰土粒を少含む
6. 黑色土 しまりあり 黏性あり 無灰土粒を多く含む
7. 黑色土 しまりあり 黏性あり 無灰物を多く含む
8. 黑色土 しまりあり 黏性あり 無灰土粒を少含む
9. 黑色土 しまりあり 黏性ややあり 無灰物

4号窓室

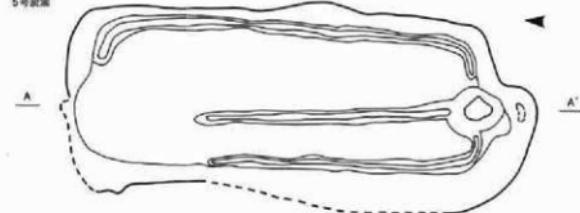
3号窓室



1. 褐灰色土 しまりふつう 黏性なし 灰白色灰がブロック状に混入 火山灰層
2. 深褐色土 しまりあり 粉粒をブロック状に含む 褐色土ブロックを含む
1. 黑色土 しまりあり 黏性なし 灰を全面に含む 灰(△2~3mm)を少含む
2. 黑褐色土 しまりあり 黏性ややあり 灰(△2mm)をごく少含む
3. 黑色土 しまりややあり 黏性ややあり 無灰物を多く含む

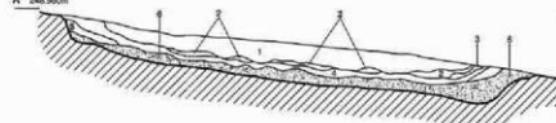


197



1. 黒褐色土 しまりなし 粘性あり
 2. 黒色土 しまりなし 粘性あり
 3. 褐褐色土 しまりなし 粘性あり
 4. 灰白色土 しまりなし 粘性なし 火山灰層
 5. 褐褐色土 しまりなし 粘性あり
 6. 黑褐色土 しまりなし 粘性なし 硫化物層

八



SK



SKC



A 252.200-1



1. 黒色土 しまりあり 粘性あり
液化物土と粘土を少混合含む
鶏糞土を少し含む
灰白色土を微量含む

2. 黒褐色土 しまりあり 粘性あり
灰白色土を解して含む
液化物土と粘土を少量含む

3. 黒色土 しまりあり 粘性あり
液化物土と粘土を少混合含む

4. 黑褐色土 しまりあり 粘性あり
液化物土と粘土を微量含む
鶏糞土を少混合含む

5. 黑褐色土 しまりあり 粘性あり
黑褐色土と鶏糞土の混合土
液化物土を少量含む

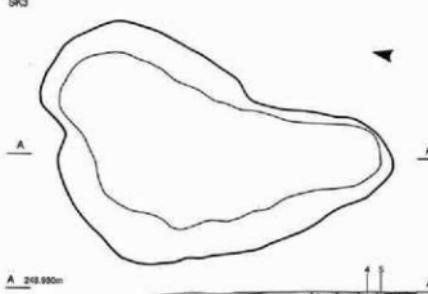
6. 黑褐色土 しまりやより 粘性あり
液化物土と少混合含む

7. 黑色土 しまりあり 粘性あり
液化物土が多少に含む

8. 暗褐色土 しまりより 粘性あり
灰白色土を解して含む

9. 明褐色土 しまりあり 粘性あり

210



1. 黒色土 しまりあり 耐性あり
無機化物質 同色土粒子を少量含む

2. 黒色土 しまりあり 耐性あり
無機化物質 同色土粒子を少量含む
灰白色火成岩を含む

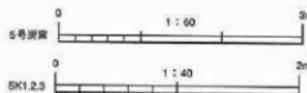
3. 黒色土 しまりあり 耐性あり
無機化物質 同色土粒子を少量含む

4. 褐色土 まろらか
悪化をブロック法に含む

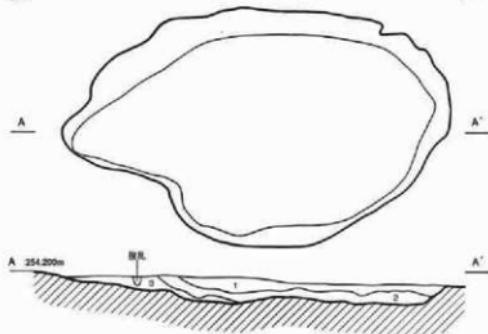
5. 黒色土 しまりあり 耐性あり
無機化物質 (2~3cm角) を多く含む
同色土粒子

6. 黒色土 しまりあり 耐性あり
無機化物質 (2~3cm角) を多く含む
同色土粒子

7. 黒色土 しまりあり 耐性あり
無機化物質 (2~3cm角) を多く含む
同色土粒子を含む



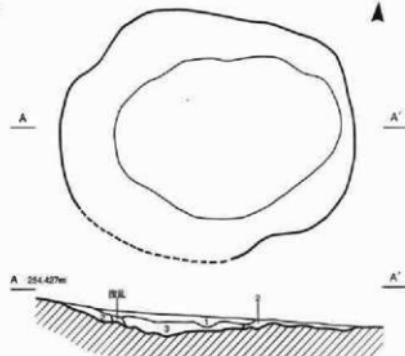
SK4



SK 4

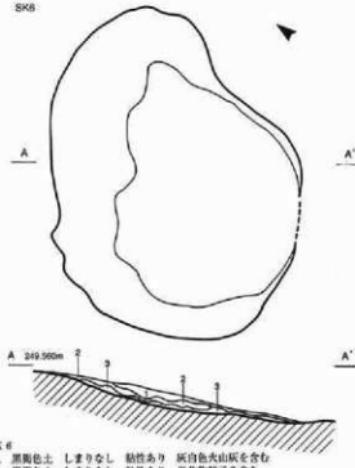
1. 黒褐色土 黒褐色所をブロック状に含む
しまりあり 粘性やや混じる
2. 灰黄褐色土
しまりあり 硫化物粒子を含む
3. 明黄褐色土
しまりあり

SK5



1. 黒褐色土 しまりなし 粘性あり 灰白色火山灰を含む
2. 明褐色土 しまりなし 粘性あり 黄褐色土ローム混じる
3. 黑褐色土 しまりなし 粘性あり ローム質土

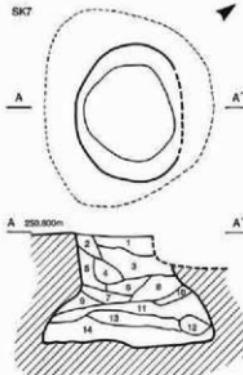
SK6



SK 6

1. 黒褐色土 しまりなし 粘性あり 灰白色火山灰を含む
2. 黒褐色土 しまりなし 粘性あり 硫化物粒子を含む
3. 褐色土 しまりなし 粘性あり ローム質土

SK7



1. 増褐色土 灰土粒 ($\phi \sim 7$ mm) 黄褐色土粒 ($\phi \sim 5$ mm) を多く含む
粘土ブロックあり
2. 明褐色土 増褐色土が斑状に混入
3. 黑褐色土 しまりあり 黄褐色土粒 ($\phi \sim 1$ cm) を全面に含む
4. 増褐色土 しまりなし 黄褐色土粒 ($\phi \sim 8$ mm) を少量含む
5. 黄褐色土 しまりなし 2層土に転換
6. 増褐色土 しまりなし 粘性なし
砂土粒 ($\phi \sim 3$ mm) を少量含む
7. 増褐色土 しまりなし 灰褐色土を少量含む
8. 明褐色土 しまりなし 粘性あり 黄褐色土を含む
9. 褐色土 しまりなし 粘性あり 黄褐色土を含む
10. 黑褐色土 しまりなし 粘性あり 黄褐色土を含む
11. 黑褐色土 しまりなし 粘性ややあり 黄褐色土粒 ($\phi \sim 7$ mm) を少箇含む
12. 黄褐色土 しまりなし 粘性ややあり
13. 黑褐色土 しまりなし 黄褐色土粒 ($\phi \sim 4$ mm) を少量含む
14. 黄褐色土 しまりなし 黄褐色土粒 ($\phi \sim 4$ mm) を非常に多く含む

1号集石

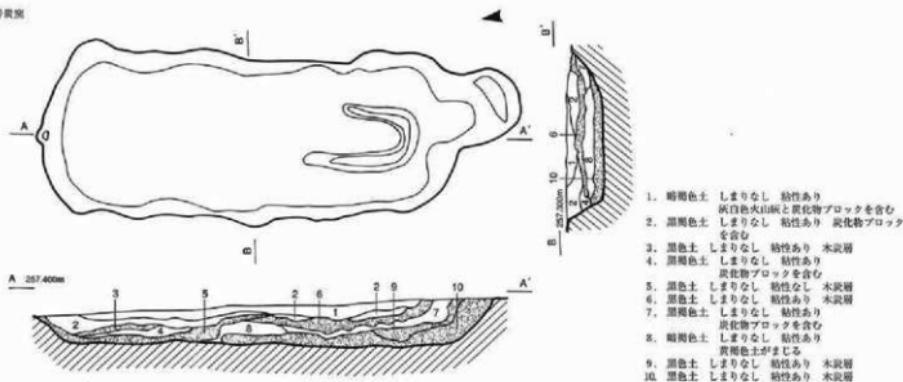
2号集石

A 251.000m

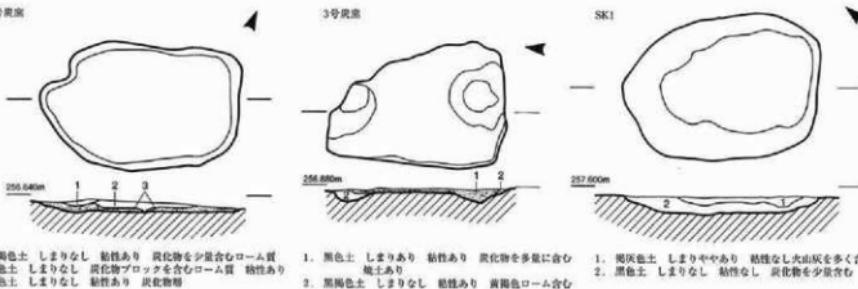


0 1 : 40 2m

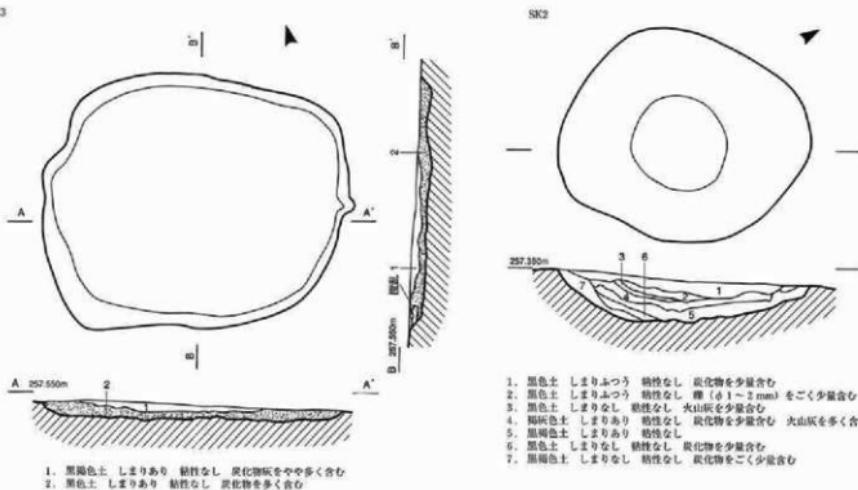
1号坑底



2号坑底



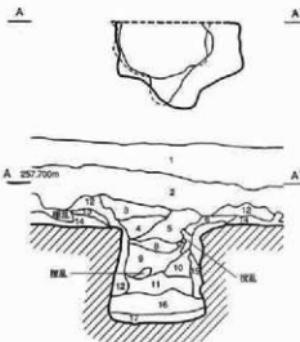
SK3



0 1:60 3m

1. 黒色土 しまりややあり 粘性なし
2. 黒色土 しまりややあり 粘性なし
3. 黒色土 しまりあり 粘性あり
4. 赤褐色土 しまりあり 粘性あり
5. 黒色土 しまりややあり 粘性なし
6. 黒色土 しまりあり 粘性なし
7. 暗褐色土 しまりあり 粘性あり
8. 黒色土 しまりややあり 粘性あり
9. 黒色土 しまりややあり 粘性あり
10. 暗褐色土 しまりなし 粘性あり
11. 黒色土 しまりややあり 粘性あり
12. 暗褐色土 しまりあり 粘性あり
13. 黄褐色土 しまりあり 粘性あり ローム層
14. 明灰褐色土 しまりあり 粘性あり ローム層
15. 黑褐色土 しまりややあり 粘性あり 粘土粒を全面に含む
16. 黒色土 しまりなし 粘性なし
17. オリーブ褐色土 しまりあり 粘性あり 粘土粒を少量含む

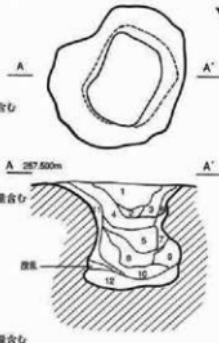
SK4



SK5

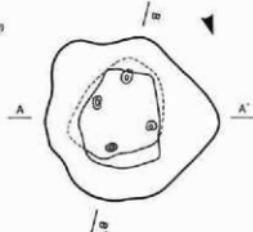
1. 黒色土 しまりややあり 粘性なし
2. 黒色土 しまりややあり 粘性あり
3. 黒色土 しまりややあり 粘性なし
4. 黒色土 しまりややあり 粘性ややあり
5. 黒色土 しまりなし 粘性あり
6. オリーブ褐色土 しまりややあり 粘性ややあり
7. 黑褐色土 しまりややあり 粘性あり
8. 黒色土 しまりなし 粘性ややあり
9. オリーブ褐色土 しまりなし 粘性ややあり
10. 黒色土 しまりややあり 粘性あり
11. 黑褐色土 しまりあり 粘性ややあり
12. 黑褐色土 しまりあり 粘性ややあり

SK5

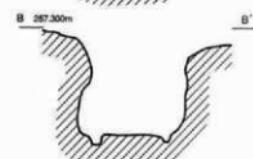


SK6

SK6

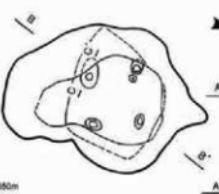


1. 黒色土 しまりあり 粘性なし 粘 (2 mm) を少量含む
2. 黑褐色土 しまりあり 粘性なし
3. 黑褐色土 しまりあり 粘性なし 粘 (3 mm) をごく少量含む
4. 黑褐色土 しまりあり 粘性あり 粘 (2 ~ 5 mm) をごく少量含む
5. 黑褐色土 しまりあり 粘性あり
6. 黑褐色土 しまりややあり 粘性あり
7. 黑褐色土 しまりあり 粘性あり
8. 黑褐色土 しまりややあり 粘性あり
9. 黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり
10. 黑褐色土 しまりなし 粘性あり
11. 黑褐色土 しまりややあり 粘性ややあり



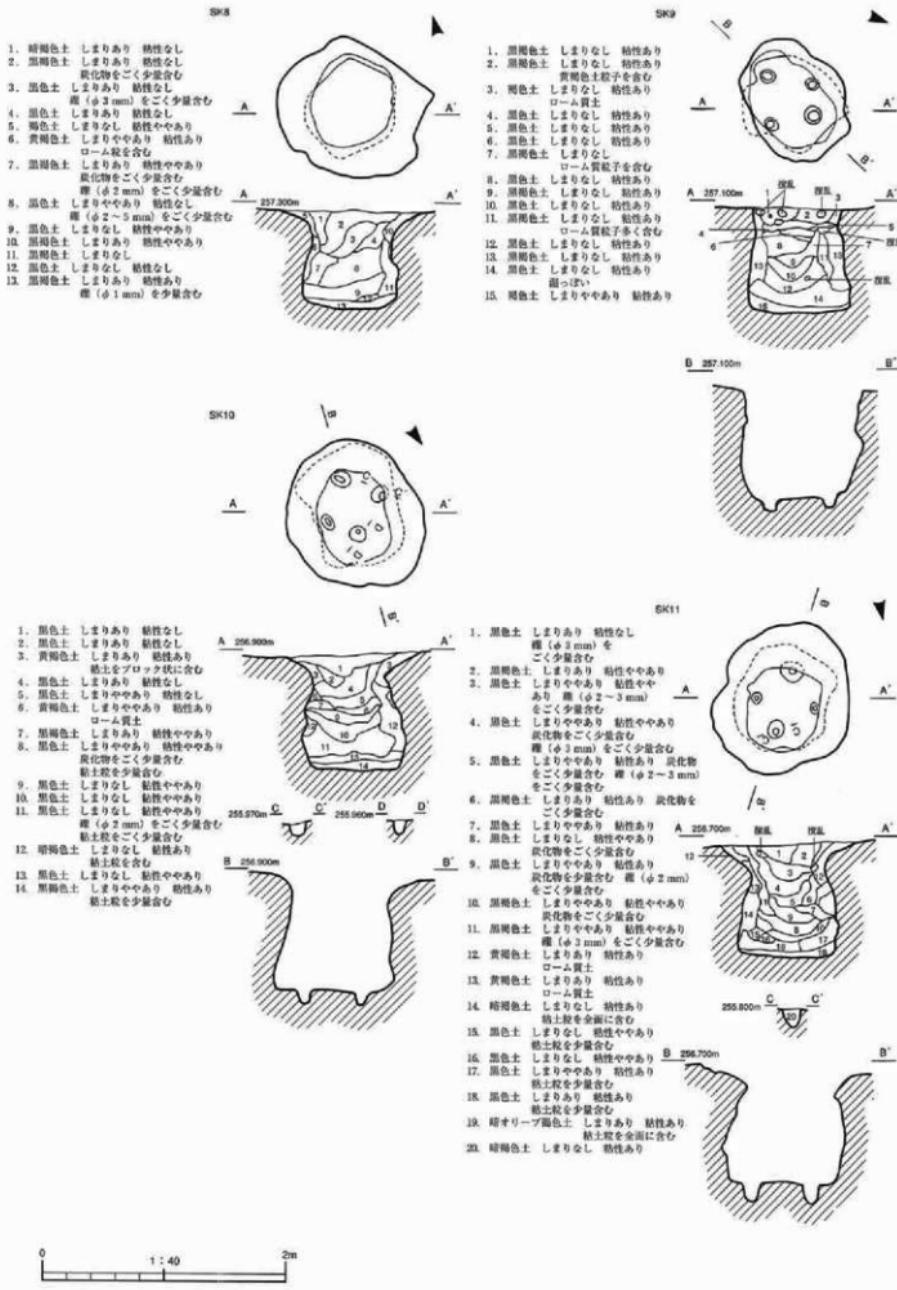
1. 黒色土 しまりややあり 粘性ややあり 粘 (3 mm) をごく少量含む
2. 赤褐色土 しまりややあり 粘性ややあり
3. 黑褐色土 しまなし 粘性あり 沈化性をごく少量含む
4. 黑褐色土 しまなし 粘性あり 沈化性を少く含む
5. 黑褐色土 しまりややあり 粘性あり 粘土をプロック状に含む
6. 黑褐色土 しまりなし 粘性あり 粘 (2 ~ 3 mm) を少量含む
7. 赤褐色土 しまりややあり 粘性ややあり
8. 黑褐色土 しまりなし 粘性ややあり 沈化性 粘 (2 mm) を少量含む
9. 黑褐色土 しまりややあり 粘性あり 粘 (2 ~ 3 mm) をごく少量含む
10. 黑褐色土 しまりあり 粘性なし 粘 (3 mm) を少量含む
11. 黄褐色土 しまりあり 粘性あり 粘土を全面に含む
12. 黄褐色土 しまりややあり 粘性あり
13. 黑褐色土 しまりややあり 粘性あり 粘土粒をやや多く含む
14. 黑褐色土 しまりややあり 粘性あり
15. 黑褐色土 しまりなし 粘性あり 沈化性を少量含む
16. オリーブ褐色土 しまりあり 粘性あり 粘土を全面に含む
17. 黑褐色土 しまりふつう 粘性あり

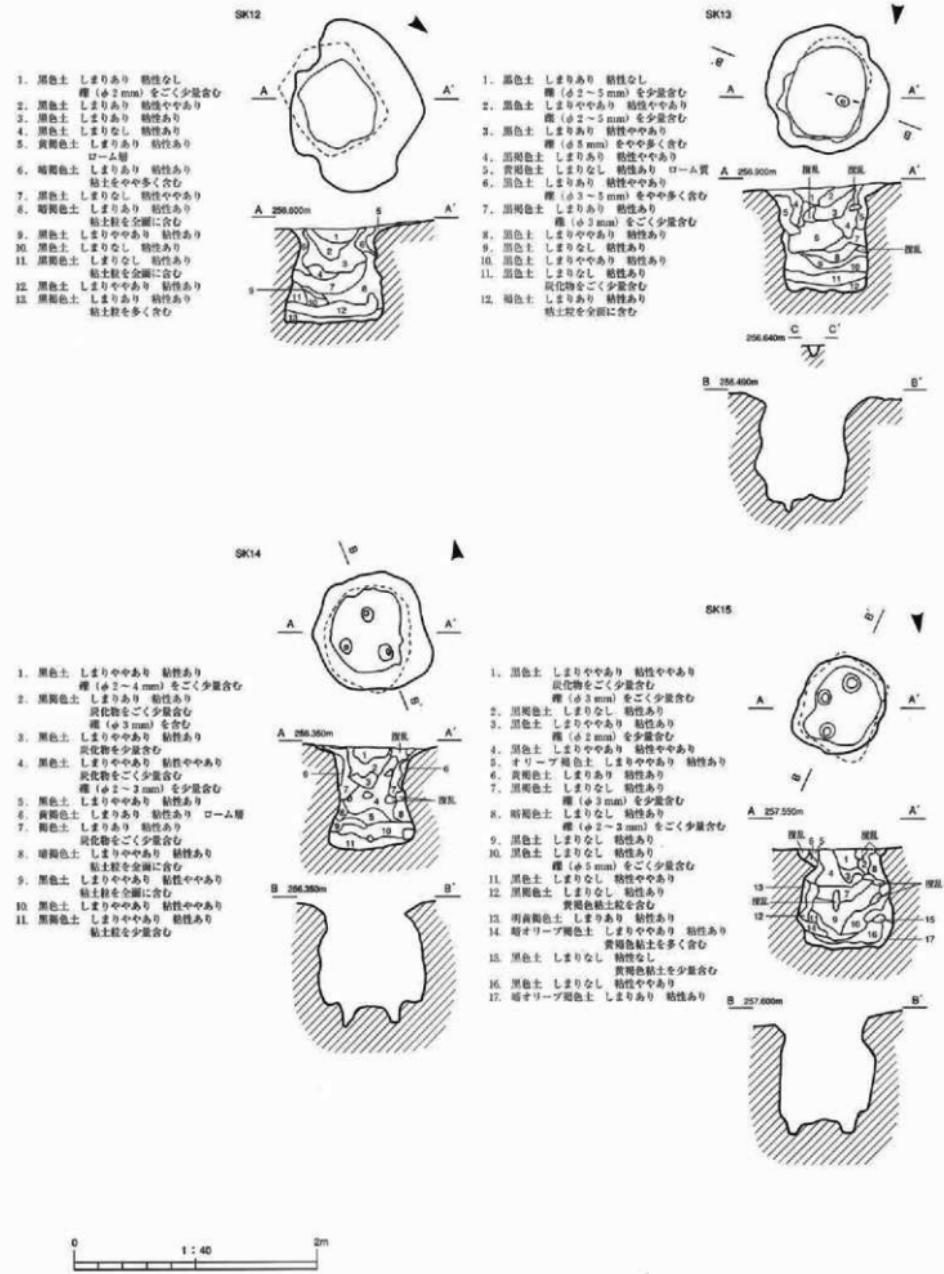
SK7

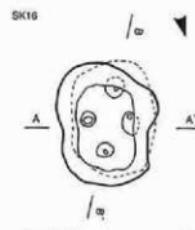


B

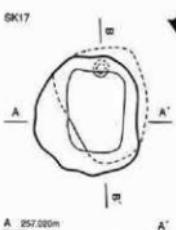
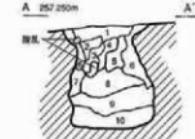




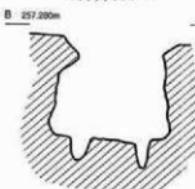




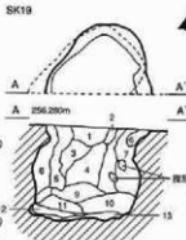
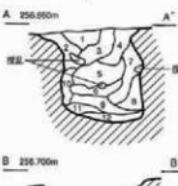
1. 黒褐色土 しまりなし 粘性あり
黄褐色ローム質土まじる
2. 黒色土 しまりややあり 粘性あり
3. 黒褐色土 しまりなし 粘性あり
4. 黑褐色土 しまりなし 粘性あり
黄褐色ローム質土多く含む
5. 黑褐色土 しまりなし 粘性あり
黄褐色ローム質土少量含む
6. 黑褐色土 しまりなし 粘性あり
黄褐色ローム質土多く含む
7. 褐色土 しまりなし 粘性あり
黄褐色ローム質土多く含む
8. 黑褐色土 しまりなし 粘性あり
黄褐色土粒子まじる
9. 黑褐色土 しまりなし 粘性あり
10. 黑褐色土 しまりなし 粘性あり
ローム質土まじる



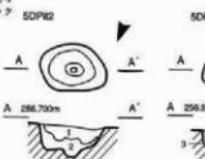
1. 黒褐色土 しまりなし 粘性あり
2. 黑褐色土 しまりなし 粘性あり
3. 黑褐色土 しまりなし 粘性あり
黄褐色土粒子まじる
4. 黑褐色土 しまりなし 粘性あり
黄褐色土粒子まじる
5. 黑褐色土 しまりなし 粘性あり
6. 黑褐色土 しまりなし 粘性あり
7. 黑褐色土 しまりなし 粘性あり
8. 褐色土 しまりあり 粘性あり



1. 黒褐色土 しまりなし 粘性あり
2. にじむ黄褐色土 しまりなし
粘性あり
黄褐色土と
褐色土まじる
3. 黑褐色土 しまりなし 粘性あり
黄褐色ローム質土
4. 黑褐色土 しまりなし 粘性あり
黄褐色ローム質土のブロック
含む
5. 黑褐色土 しまりなし 粘性あり
6. 褐色土 しまりなし 粘性あり
7. 黑褐色土 しまりなし 粘性あり
黄褐色ローム質土まじる
8. 黑褐色土 しまりなし 粘性あり
ローム質土のブロック
含む
9. 黑褐色土 しまりなし
粘性あり
10. 黑褐色土 しまりなし
粘性あり
11. 黑褐色土 しまりなし
粘性あり
12. 褐色土 しまりあり
粘性あり
ローム質土



1. 黑褐色土 しまりなし 粘性なし
2. 褐色土 しまりなし 粘性あり
黒褐色土と黄褐色土の混合土
3. 黑褐色土 しまりなし 粘性あり
4. 黑褐色土 しまりなし 粘性あり
5. 黑褐色土 しまりなし 粘性あり
黄褐色ローム質土まじる
6. 褐色土 しまりふつづけあり
黄褐色ローム質土を主で
黒褐色土をまじる
7. 黑褐色土 しまりなし 粘性あり
黒褐色土が主で若干の
黒土土じる
8. 黑褐色土 しまりなし 粘性なし
黄褐色ローム質土まじる
9. 黑褐色土 しまりなし 粘性なし
10. 黑褐色土 しまりなし 粘性あり
11. 黑褐色土 しまりなし 粘性あり
12. 黑褐色土 しまりなし 粘性あり
黄褐色土
13. にじむ褐色土 しまりなし 粘性あり
黒褐色土粒子若干まじる



1. 黑褐色土 しまりなし
粘性あり
2. 黑褐色土 しまりなし
粘性あり
ローム質土

1. 黑褐色土 しまりなし
粘性なし
ローム質土

2. 黑褐色土 しまりなし
粘性なし
ローム質土

2. 黑褐色土 しまりあり
粘性なし

3. 黑褐色土 しまりあり
粘性あり
粘質土

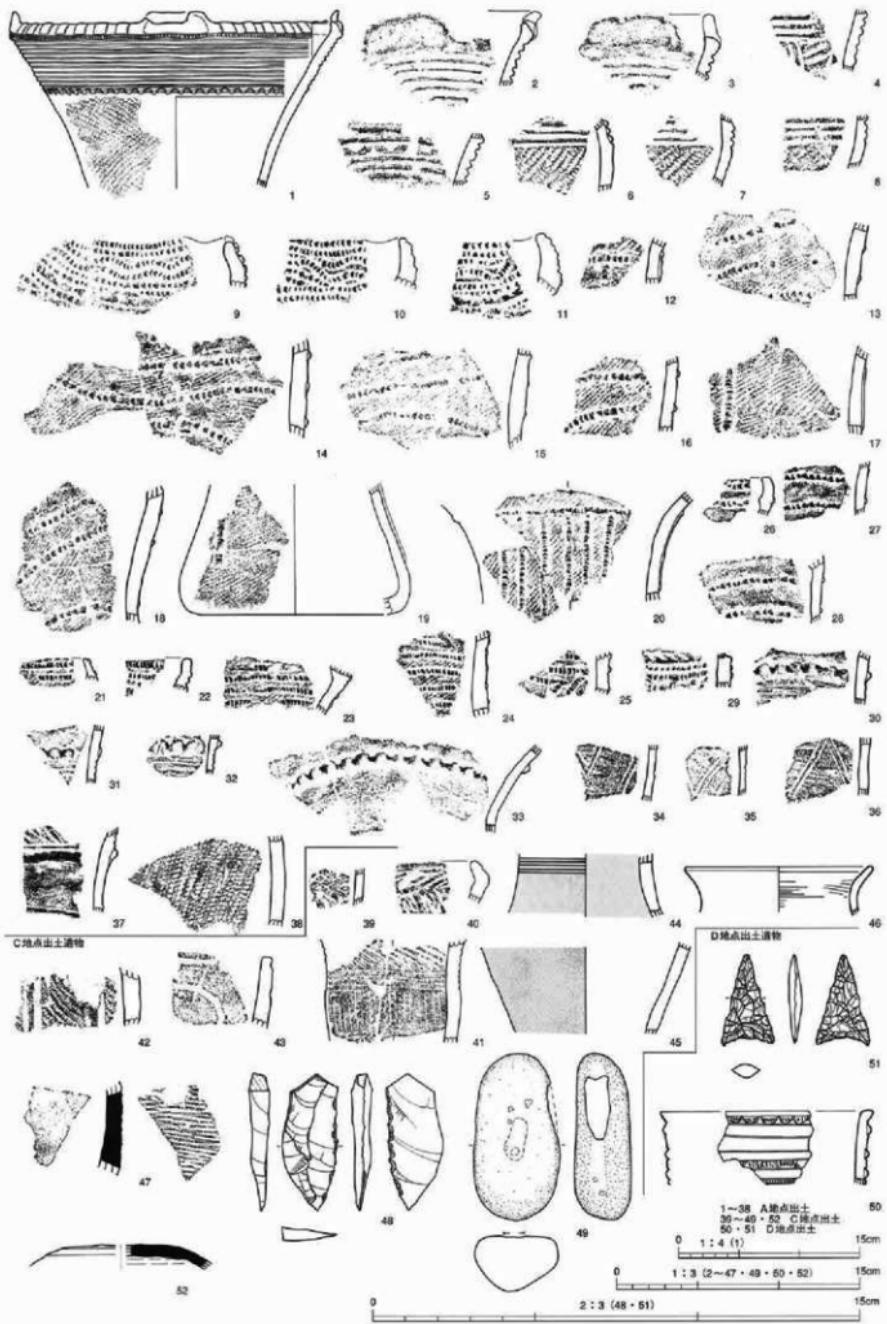
3. 黑褐色土 しまりあり
粘性あり
粘質土

1. 黑褐色土 しまりあり
粘性なし
2. 黑褐色土 しまりあり
粘性なし

3. オリーブ褐色土 しまりあり
粘性なし

4. オリーブ褐色土 しまりあり
粘性なし

0 1:40 2m



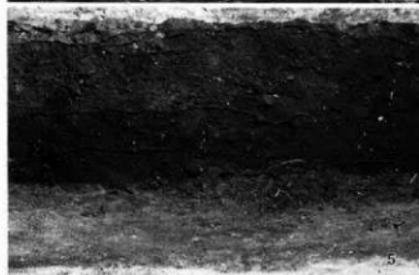
1. 調査前近景
(北東から)
2. 調査区南西側
全景(南東から)



3. 調査区東側
全景(南から)
4. 調査区北東側
全景(北西から)



5. 調査区南西側
土層断面(西から)
6. 作業風景

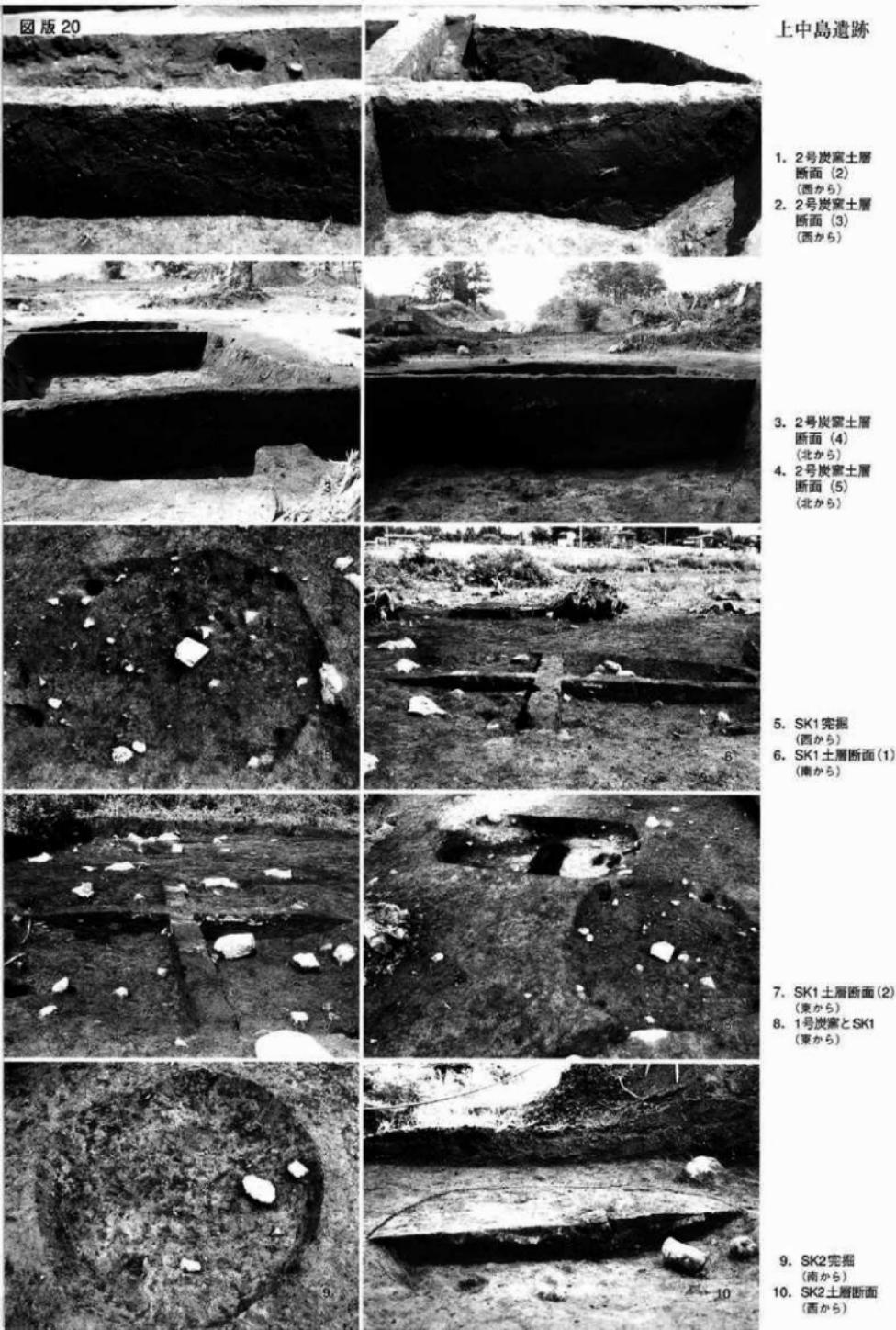


7. 1号炭窯発掘
(東から)
8. 1号炭窯土層
断面(西から)



9. 2号炭窯とSK2
発掘状況
(東から)
10. 2号炭窯土層
断面(1)
(西から)





上中島遺跡

1. SK3完掘
(西から)
2. SK3土層断面
(西から)



3. 1号ピット
完掘(西から)
4. 1号ピット
土層断面
(東から)



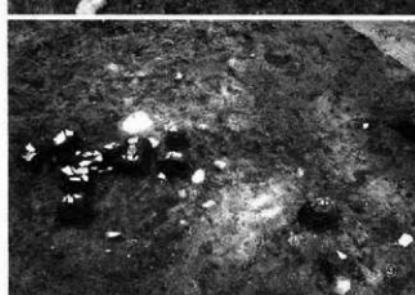
5. 2号ピット
完掘(東から)
6. 2号ピット
土層断面
(東から)

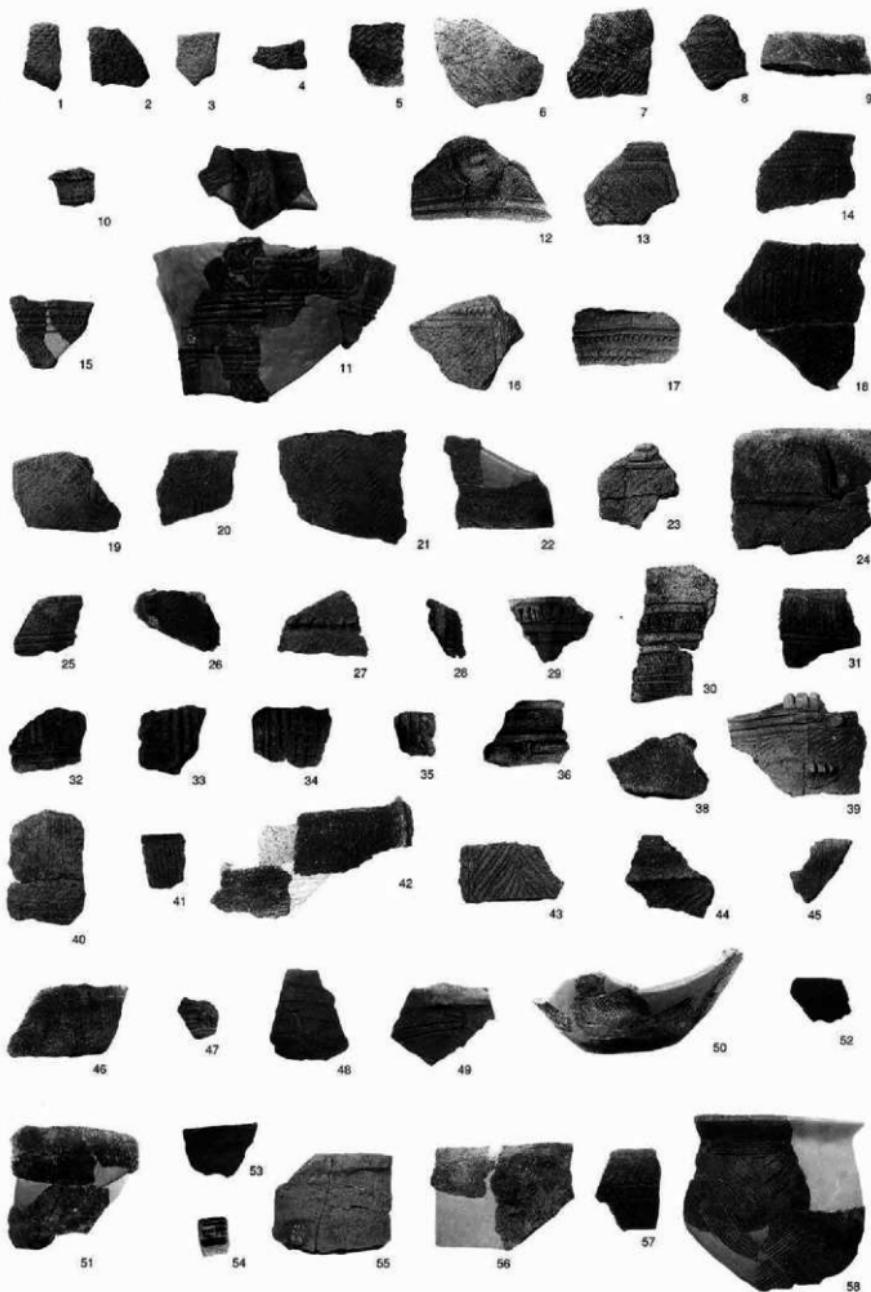


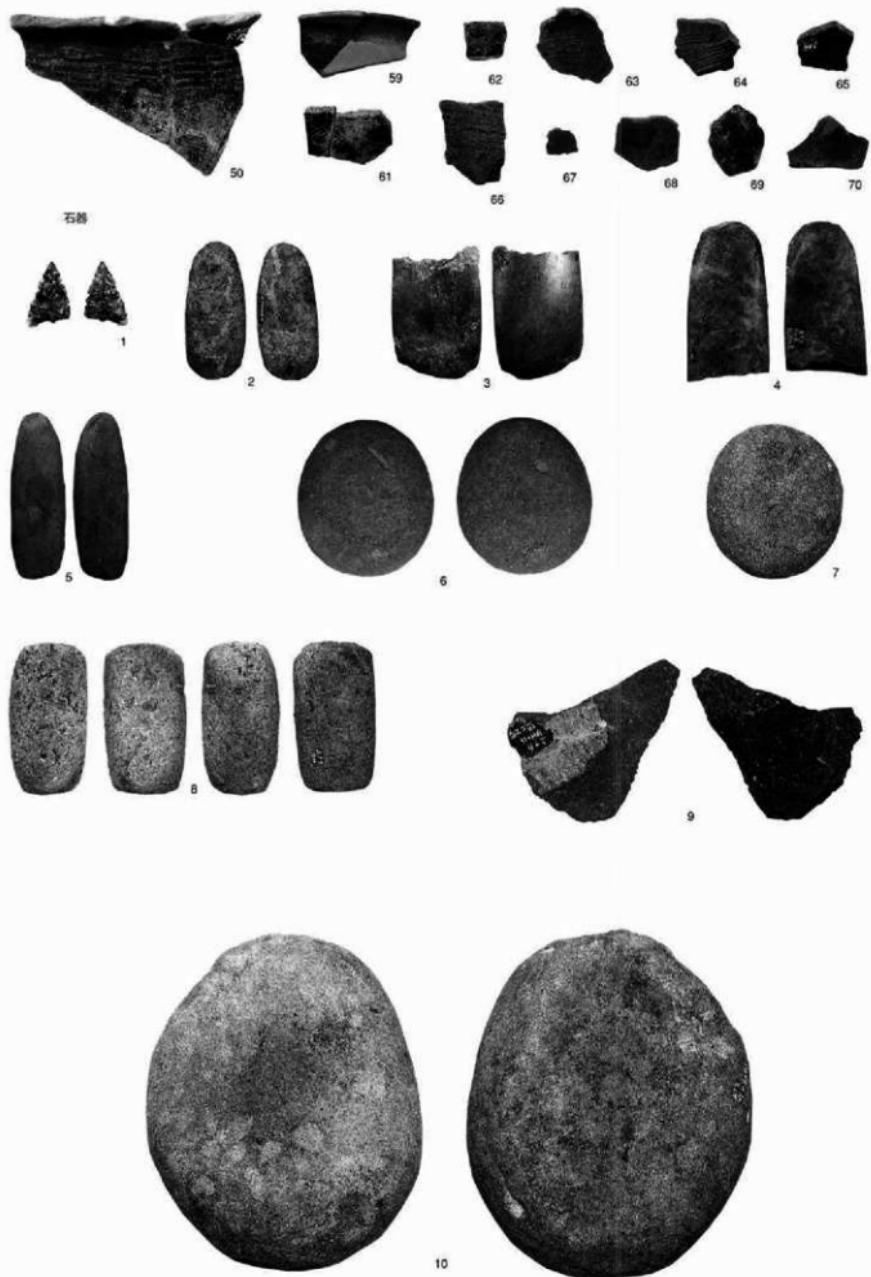
7. 3号ピット
完掘(西から)
8. 3号ピット
土層断面
(東から)



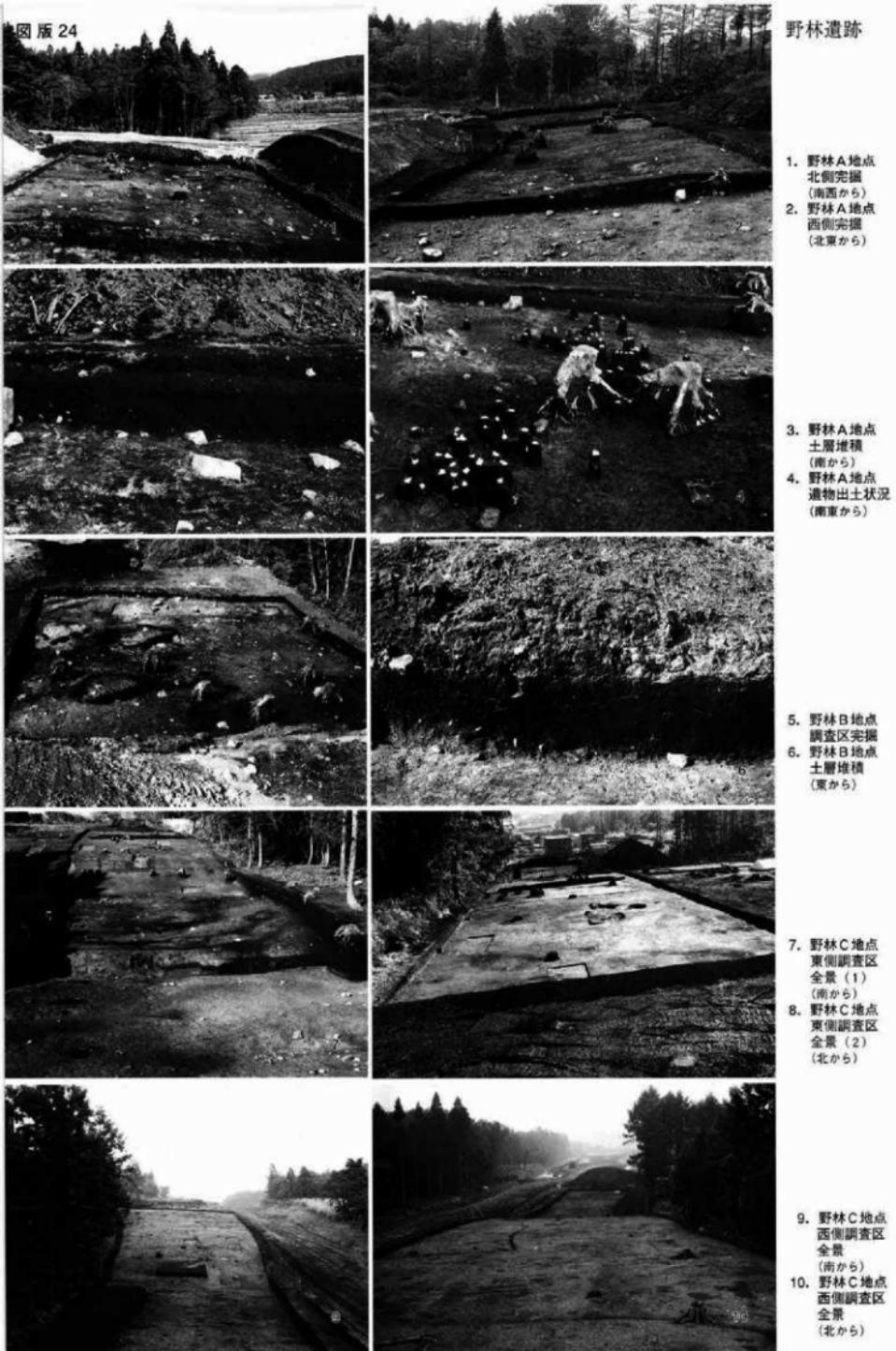
9. 弁生土器
出土状況
(南から)
10. 2号炭窯と
SK2、SK3
(東から)







土器 (1:3) 石器 1:3 (2~8, 10) 2:3 (1, 9)



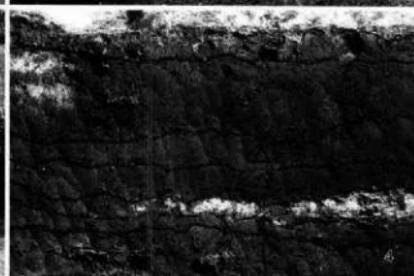
野林遺跡
C地点

図版 25

1. 上段西側
全景
(北から)
2. 下段西側
全景
(南から)



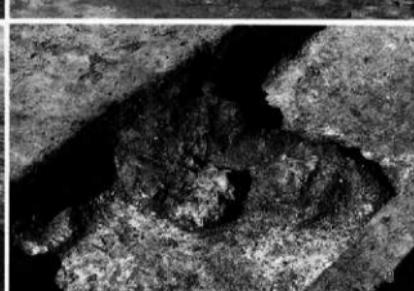
3. 上段土層堆積
(南から)
4. 下段土層堆積
(西から)



5. 1号炭窯完掘
(南西から)
6. 1号炭窯土層
断面
(南西から)

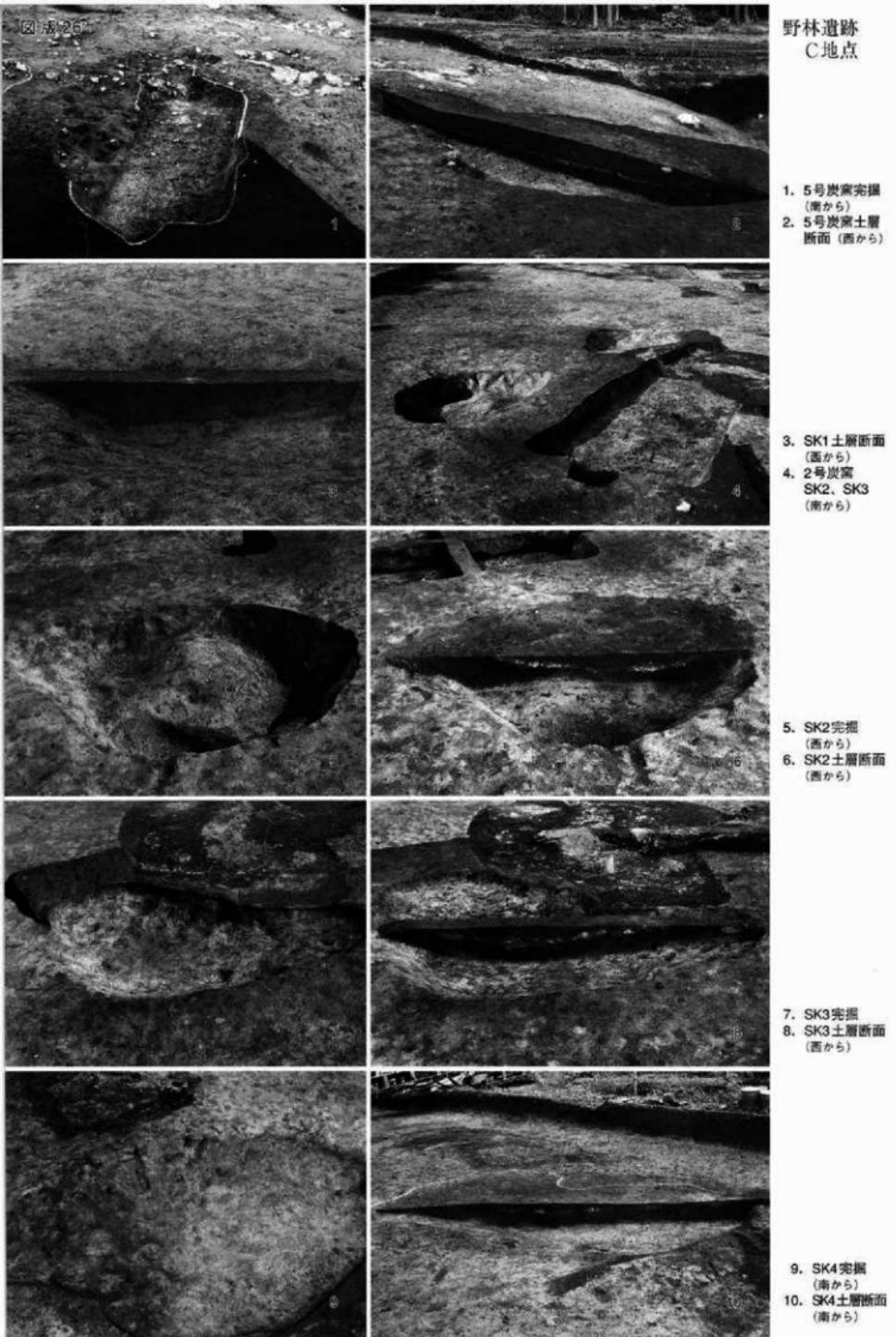


7. 2号炭窯
(南から)
8. 2号炭窯木炭
出土状況
(東から)

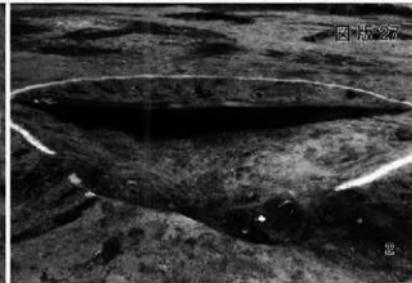
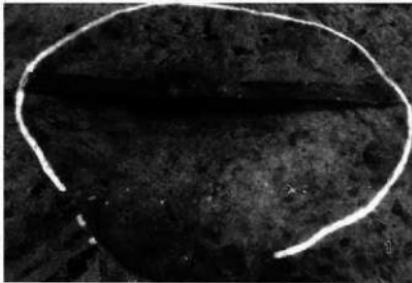


9. 3号炭窯完掘
(東から)
10. 4号炭窯完掘

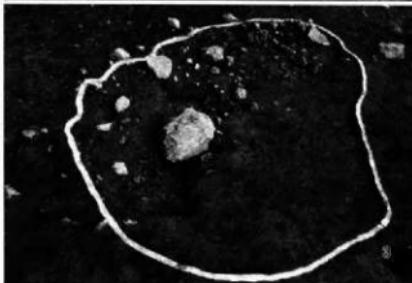




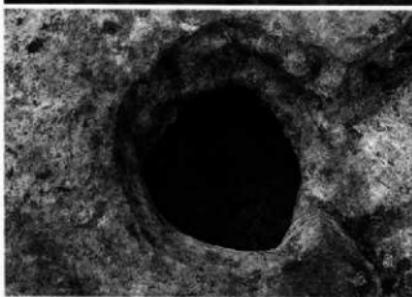
1. SK5窓掘
(南から)
2. SK5土層断面
(南から)



3. SK6窓掘
(南西から)
4. SK6土層断面
(南西から)



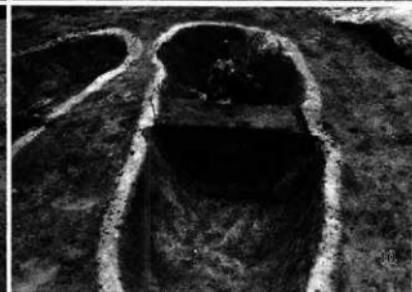
5. SK7窓掘
(東南から)
6. SK7土層断面
(東南から)



7. 1・2号集石
(東から)
8. 1・2号集石
断面
(南から)



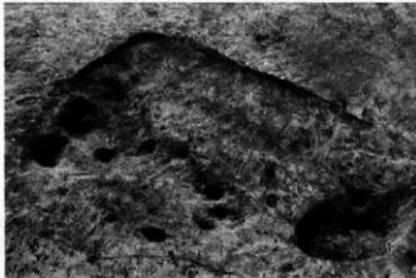
9. 道路遺構
(東から)
10. 道路遺構
断面
(南から)



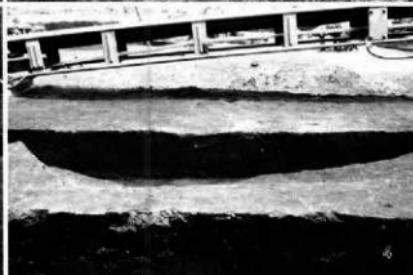
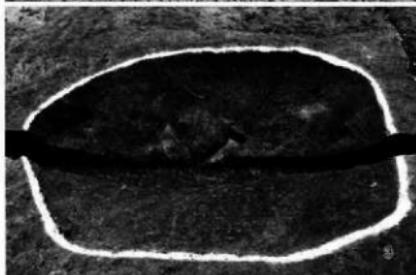


10. 2号炭窯
土層断面
〔南東から〕

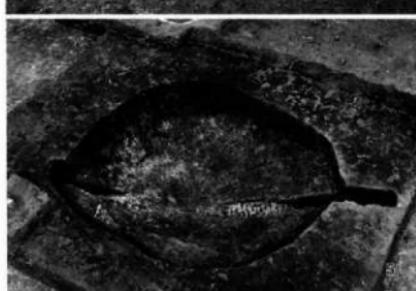
1. 3号炭窯完掘
(東から)
2. 3号炭窯土層
断面 (北西から)



3. SK1完掘
(西から)
4. SK1土層断面
(南西から)



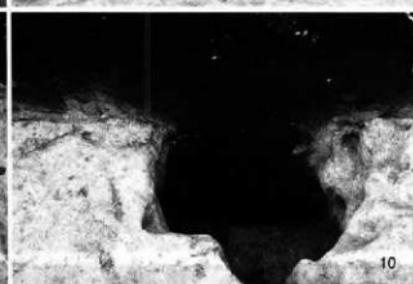
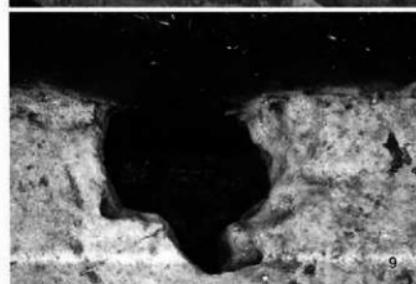
5. SK2完掘
(南東から)
6. SK2土層断面
(南東から)

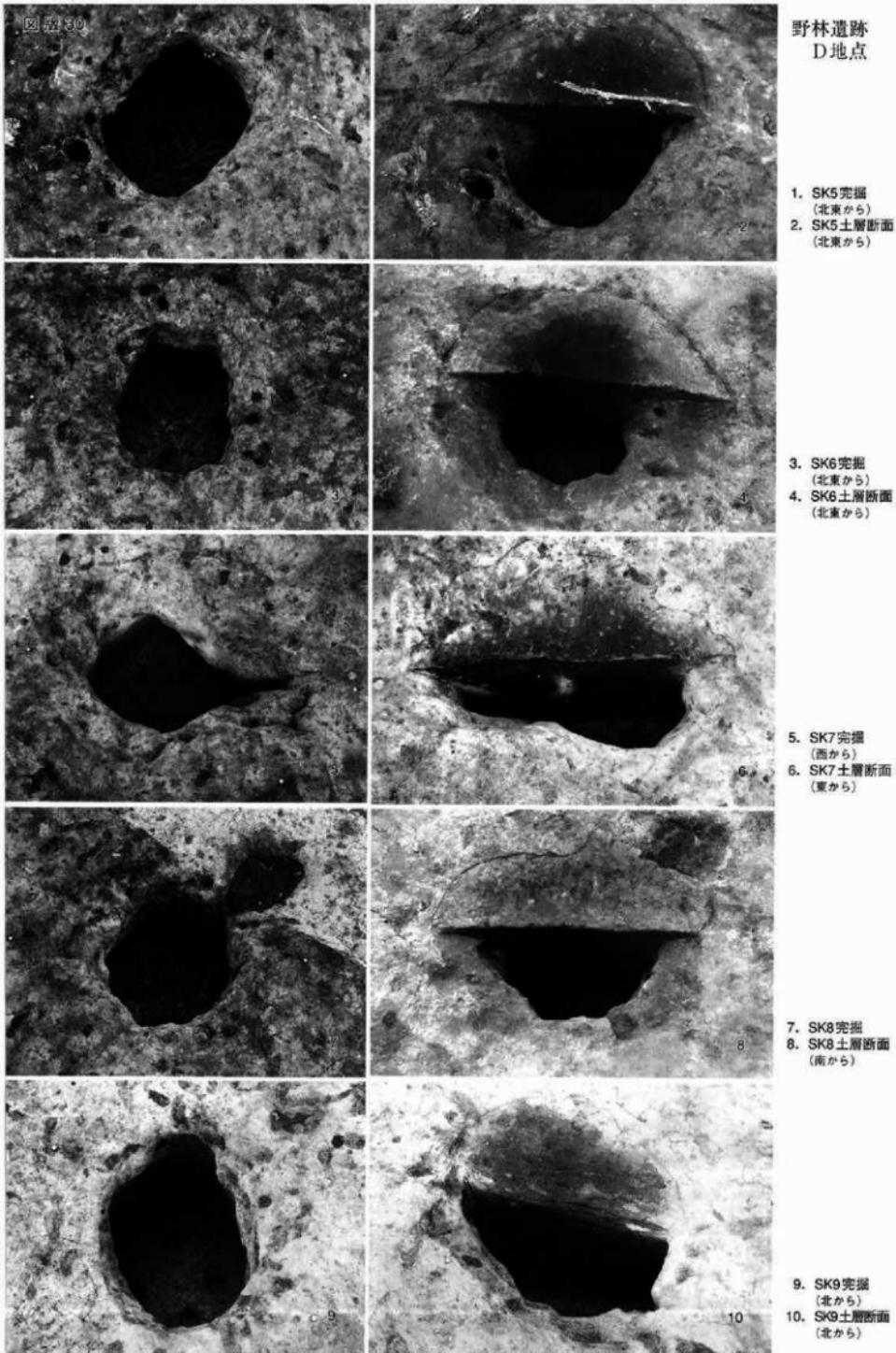


7. SK3完掘
(南から)
8. SK3土層断面
(南東から)

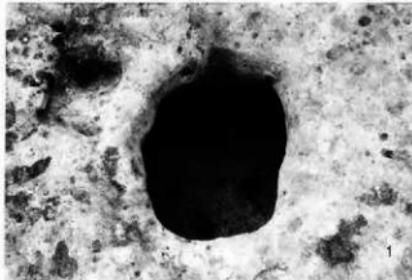


9. SK4完掘
(東から)
10. SK4土層断面
(東から)

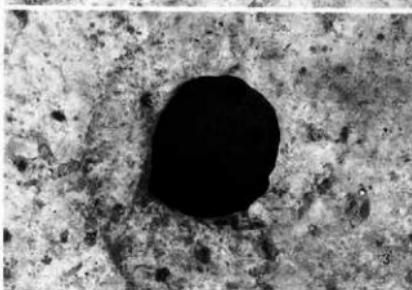




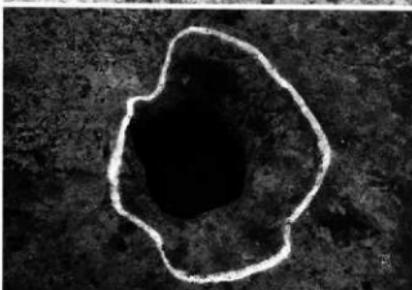
1. SK10完掘
(北東から)
2. SK10土層
断面 (北東から)



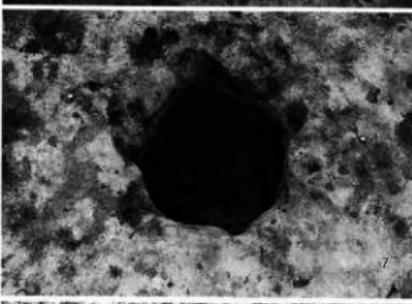
3. SK11完掘
(北東から)
4. SK11土層
断面 (東から)



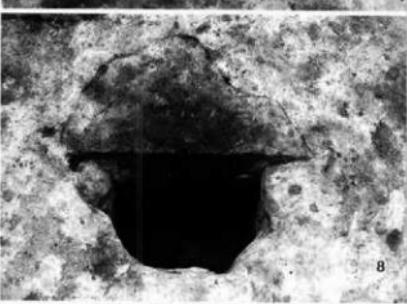
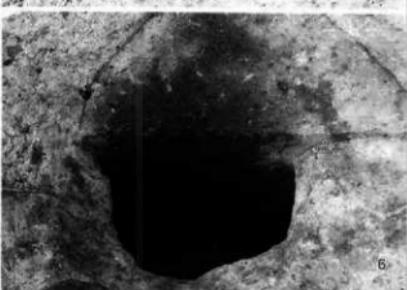
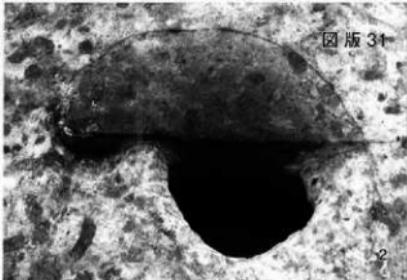
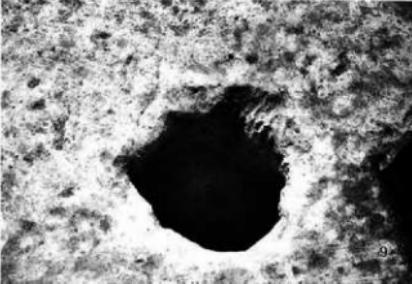
5. SK12完掘
(北東から)
6. SK12土層
断面 (東から)

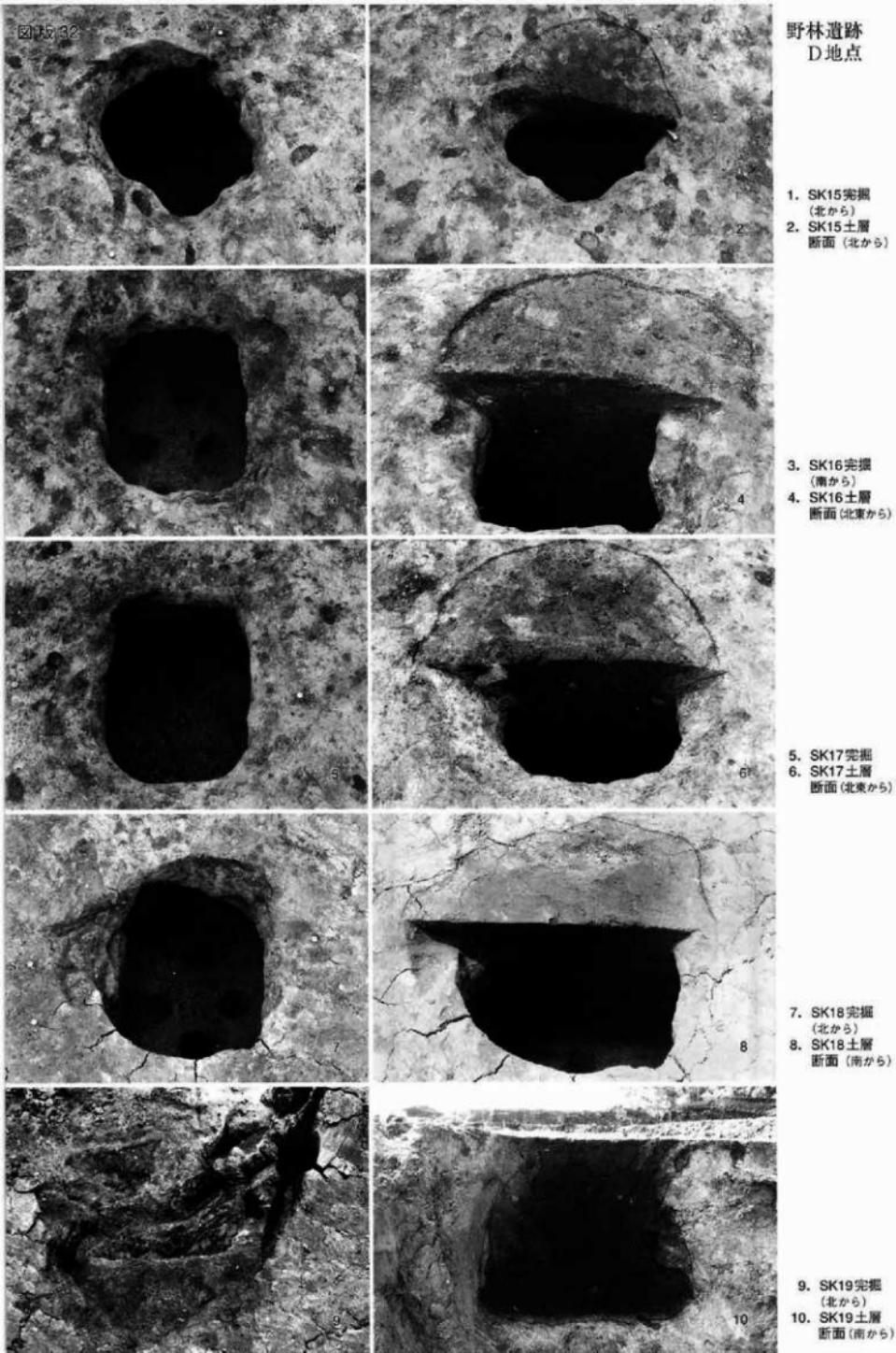


7. SK13完掘
(北から)
8. SK13土層
断面 (北から)



9. SK14完掘
(東から)
10. SK14土層
断面

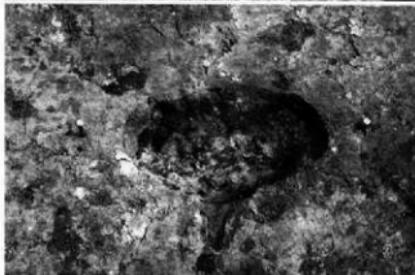




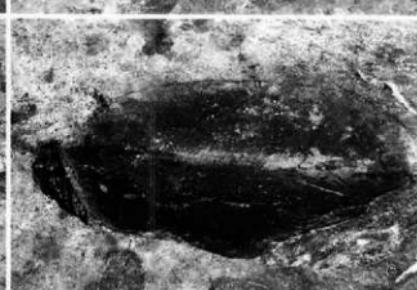
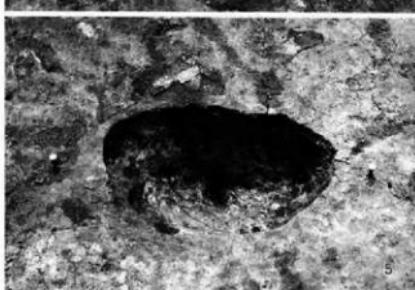
1. 踏し穴列 (1)
(南東から)
2. 踏し穴列 (2)
(北西から)



3. 5DP1完掘
(東から)
4. 5DP1土層
断面 (東から)



5. 5DP2完掘
(北から)
6. 5DP2土層断面
(南から)

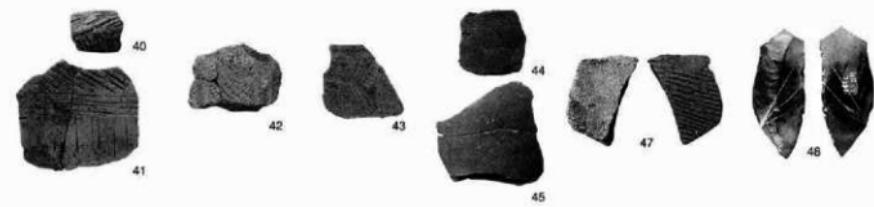
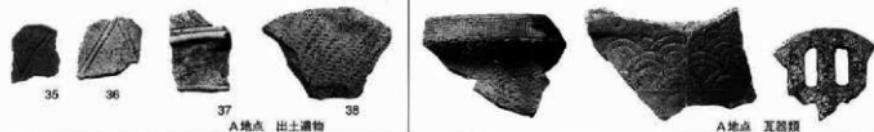
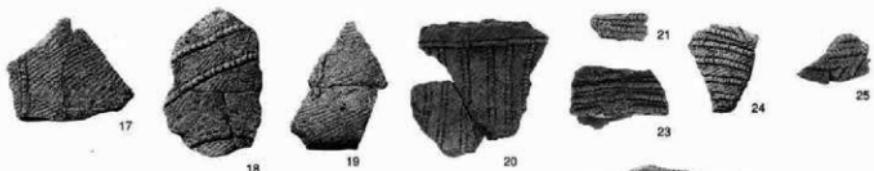
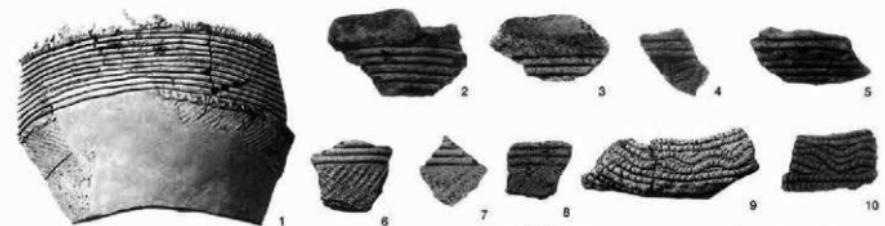


7. 4EP1完掘
(東から)
8. 4EP1土層断面
(南から)



9. 調査区完掘
(北から)
10. 調査風景





報告書抄録

| 書名 | 上中島遺跡 野林遺跡 | | | | | | |
|--------|--|---------------------------------|-------------------|--|--|---------------------|-------------------|
| 調査名 | 上信越自動車道関係発掘調査報告書 VI | | | | | | |
| シリーズ名 | 新潟県埋蔵文化財調査報告書 | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第 95 集 | | | | | | |
| 編著者名 | 坂本盛泰・島田昌幸・山崎忠良・佐藤恒・濱澤誠 | | | | | | |
| 編集機関 | 財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団 | | | | | | |
| 所在地 | 〒956-0845 新潟県新津市金津 93-1 TEL 0250-25-3981 | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦 2000 年 3 月 31 日 | | | | | | |
| 所取遺跡名 | 所在地 | コード 市町村 遺跡番号 | 北緯 度 分 秒 | 東経 度 分 秒 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| 上中島遺跡 | 新潟県中頃郡中郷村大字二本木字上中島 1708番地ほか | 15-546 | 34 59分 30秒 | 36度 17分 | 138度 17分 1994.09.06~1994.10.10 1995.04.25~1995.08.11 | 7,800m ² | 上信越自動車道の建設に伴う事前調査 |
| 野林遺跡 | 新潟県中頃郡中郷村大字垂沢字野林 1142番地1ほか | 15-546 | 89 | 36度 59分 17分 | 138度 17分 1994.09.02~1994.09.07 1994.10.31~1994.11.18 1995.06.29 1995.08.22~1995.08.25 1995.09.11~1995.09.14 1995.08.28~1995.09.08 1995.10.02~1995.11.22 1996.07.22~1996.10.03 | 9,770m ² | 上信越自動車道の建設に伴う事前調査 |
| 所取遺跡名 | 種別 | 主な時代 | | 主な遺構 | | 主な遺物 | 特記事項 |
| 上中島遺跡 | 遺物包含地 | 縄文時代（早期～晩期） 弥生時代（中期） 平安時代 | | 民窯 2 基（平安） 土坑 3 基（平安） ピット 3 基（不明） | | 縄文土器・石器 弥生土器 | |
| 野林遺跡 | 遺物包含地 | 縄文時代（前期） 平安時代 | | フラスコ状土坑 1 基（縄文） 陥し穴状土坑 16 基（縄文） 民窯 8 基（平安） 土坑 9 基（平安） 道路遺構（不明） | | 縄文土器・石器 | |

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第95集
上信越自動車道関係発掘調査報告書 VI
上中島遺跡・野林遺跡

平成12年3月30日 印刷 発行・編集 新潟県教育委員会
 平成12年3月31日 発行 〒950-8570 新潟市新光町4番地1
 電話 025(285)5511
 新潟県埋蔵文化財調査事業団
 〒956-0845 新潟県新津市金津93番地1
 電話 0250(25)3981
 FAX 0250(25)3986

印刷会社 (株)平電子印刷所
 〒970-8024 福島県いわき市平北白土字西ノ内13
 電話 0246(23)9051

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第95集『上中島遺跡 野林遺跡』 正誤表

| 頁 | 位置 | 源 | 正 |
|----|----------|-----------|------------|
| 抄錄 | 上中島遺跡 北緯 | 36度59分30秒 | 36度58分26秒 |
| 抄錄 | 上中島遺跡 東経 | 138度17分 | 138度13分27秒 |
| 抄錄 | 野林遺跡 北緯 | 36度59分 | 36度58分53秒 |
| 抄錄 | 野林遺跡 東経 | 138度17分 | 138度13分5秒 |